山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第118集

九鬼Ⅱ遺跡

KU　KI　SITE

― 山梨リニア実験線建設に伴う発掘調査報告書 ―

1996. 3

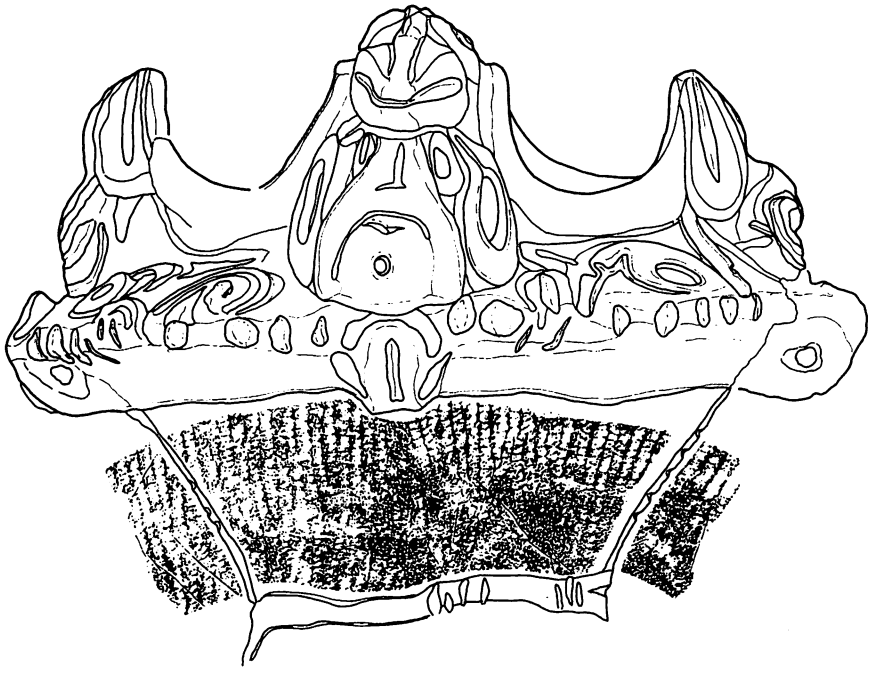
山梨県教育委員会
日本鉄道建設公団

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第118集

九鬼Ⅱ遺跡

KU　KI　SITE

― 山梨リニア実験線建設に伴う発掘調査報告書 ―



1996. 3

山梨県教育委員会
日本鉄道建設公団

序

本報告書は、山梨リニア実験線建設に先立ち平成５年度に発掘調査を行ないました、山梨県都留市井倉地内の九鬼Ⅱ遺跡について、その成果をまとめたものであります。

山梨リニア実験線は秋山村から境川村に至るほぼ直線の48.2㎞の超電導磁気浮上方式による新しい高速輸送鉄道であります。直線であるためほとんどはトンネルですが、地上に出た部分に本報告書の九鬼Ⅱ遺跡や、都留市の中溝遺跡、揚久保遺跡、中谷遺跡、大月市の外ガイド遺跡の５遺跡がリニア関連で調査されております。

九鬼Ⅱ遺跡の所在する都留市は山梨県の東部に位置し、富士山の豊富な湧水を源とする桂川、また桂川に合流する各支流に発達した河岸段丘が多く見られ、その段丘上に縄文時代を中心とする数多くの遺跡が存在しています。今回調査された九鬼Ⅱ遺跡は、桂川を西に見下ろす九鬼山の北西面、山裾沖積地の緩傾斜面標高416mに立地しています。

調査の結果から、平安時代を中心とした集落であることが確認されました。しかし、縄文時代前期～後期に至る遺物も検出され、中には縄文時代に位置づけられる住居跡１軒や陥し穴も数基検出されていることからも該期の集落が周辺に存在していることは間違いないことであると思われます。本遺跡の中心である平安時代では、住居跡14軒が検出されており、出土遺物からは９世紀後半～10世紀後半に位置づけられ、住居内から豊富な遺物も検出されています。その中で、第８号住居跡からはほとんど甲斐型の甕で占められているものの、１点だけ当地方の特色を色濃く残した「堀之内原type」と呼ばれる甕が完形で出土しています。器形・整形は甲斐型甕と同様でありますが、胎土が全く異なり注目される資料であります。また、鉄製品（鎌・刀子・紡錘車）、土製品（土錘）のほか、様々な墨書土器が検出されています。また、カマドや覆土中から炭化種子・骨片などが見られたため、分析を行った結果、モモの核（内果皮）、骨片についてはウサギ・鹿・鳥類のものと分析され、当時、食用としていた可能性が高いとされています。

この調査によって、過去の分布調査等で明らかにできなかった部分での発掘調査により、貴重な資料が得られることになりました。しかし、未だ日の目を見ない遺跡が調査もされず破壊されてしまうことが数多くあることは現在でも否めません。今後もより一層の地道な調査が要求されることについて痛感いたします。今後の調査研究の進展により、本遺跡と周辺の遺跡との関連性や他地域での差異が少しでも解明されることに期待したいと思います。また、本書を学習や研究資料としてご利用くださいますよう念じてやみません。

末筆ながら、調査に当たってご指導・ご協力を賜った関係各位、並びに調査に従事された方々に厚く御礼申し上げます。

1996年３月

山梨県埋蔵文化財センター
所長　大塚初重

例　言

1．本報告書は、山梨リニア実験線建設工事に先立って、日本鉄道建設公団との契約により、1993年度に行った九鬼Ⅱ遺跡の発掘調査報告書である。
2．本報告書は高野玄明が執筆・編集した。分析依頼・委託した部分については、文頭に記した。
3．遺跡の写真は、高野玄明・橘田重男が撮影し、遺物は高野玄明が行った。
4．種実遺体同定はパリノ・サーヴェイ株式会社に、獣骨・人骨の同定・解析は署名原稿として早稲田大学　金子浩昌が行い、結果は附編の中に掲載した。
5．調査の図面・写真・遺物は山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
6．第11号住居跡は、調査時に住居番号を付したが、住居跡ではなかったため、欠番とした。

凡　例

1．掲載した図面の縮尺は、原則として、住居跡・溝状遺構・竪穴状遺構・掘立柱建物跡は 1／60、土坑は 1／60・1／30、土器実測図・拓本は1／3、石鏃などの小型及び特殊な遺構及び遺物はこの限りではない。
2．拓本で両面を載せてあるものは、断面右側が表面、左側が内面である。
3．灰釉陶器・緑釉陶器・須恵器の断面には■のスクリーントーンがかけてある。

目　次

序
例　　言
凡　　例
目　　次
第Ⅰ章　調査概況 …… 1
　第1節　調査に至る経過 …… 1
　第2節　調査組織 …… 1
　第3節　調査方法 …… 1

第Ⅱ章　環　　境 …… 4
　第1節　地理的環境 …… 4
　第2節　歴史的環境 …… 4

第Ⅲ章　遺　　構 …… 7
　第1節　住居跡 …… 7
　第2節　掘立柱建物跡 …… 20
　第3節　土坑 …… 27
　第4節　集石土坑 …… 27
　第5節　墓壙 …… 34
　第6節　竪穴状遺構 …… 36
　第7節　溝状遺構 …… 36

第Ⅳ章　遺　　物 …… 38
　第1節　遺構内出土土器 …… 38
　第2節　遺構外出土土器 …… 56
　第3節　出土石器 …… 66
　第4節　その他の出土遺物 …… 73

第Ⅴ章　おわりに …… 75

附　　編
　九鬼Ⅱ遺跡出土の自然化学分析 …… 76
　　1　種実遺体同定 …… 76
　　2　九鬼Ⅱ遺跡出土獣骨と人骨の同定 …… 77
　　3　写真図版

第Ⅰ章　調査概況

第１節　調査に至る経過

平成５年５月10日　文化庁へ発掘通知を提出する。
平成５年５月17日　試掘による範囲確認調査を開始する。
平成５年６月14日　発掘調査を開始する。
平成５年12月24日　発掘調査を終了する。

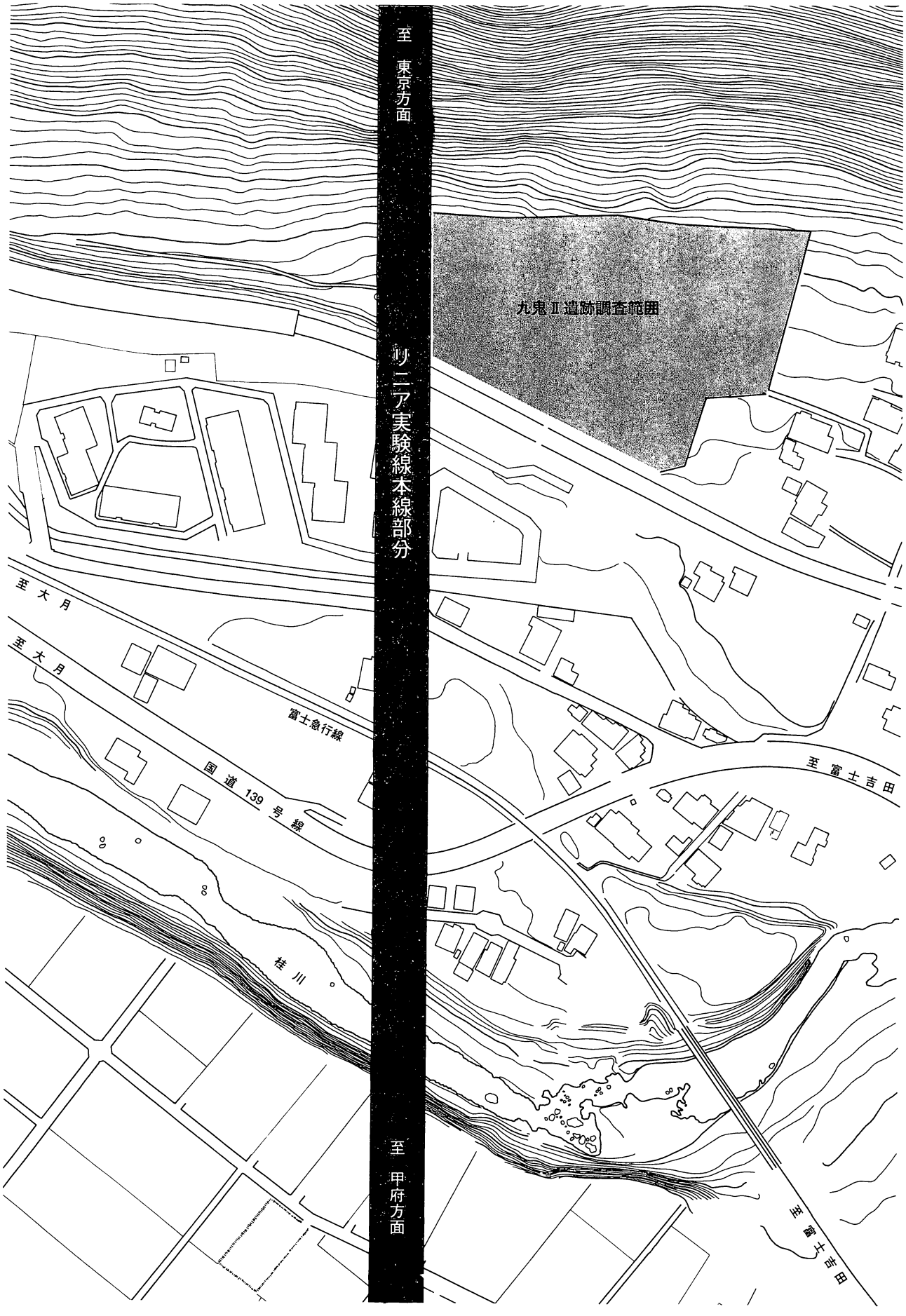
第２節　調査組織

調 査 主 体　山梨県教育委員会
調 査 機 関　山梨県埋蔵文化財センター
　所　　長　大 塚 初 重
　次　　長　三 科 英 訓
　埋蔵文化財指導幹　森　　和 敏
調査担当者　高野玄明（山梨県埋蔵文化財センター主任文化財主事）
　橘田重男（　　〃　　主任文化財主事）
調査作業員　（故）樋貝茂治、田辺末広、白川義明、鈴木高幸、北垣憲仁、小西仁彦、今泉諄挙、天野きみ子、天野ミツ子、杉本義一、高鳥英子、長田隆史、西室清美、米津圭二、清水真寿美、清水光子、鈴木美智恵、西室春子、河野ふく、河野ふさ子、河野宏江、今泉みつゑ、平井豊子、伏見　茂、栗田健一、幡野三郎、山中規矩丸、杉本常勝、金子正之、小宮みね子、武川正人、後藤とあ、長田伸彦、佐藤吉彦、安藤　操、高鳥はま子、小林すみか、小林由子、相馬信子、佐々木栄子、井上利津子、嘉藤田百合子
整理作業員　兼子よし子、北原和江、西川純子、細田正子、三科千代子、石山久美子、山本多美子、志村君子、渡辺早苗、名取洋子、林　美鈴、伊藤順子、長田公子、小林裕子、林美登子
協力者・機関　日本鉄道建設公団、東海旅客鉄道株式会社建設工事部山梨リニア実験線工事事務所、都留市教育委員会、同奈良泰史、大月市教育委員会、都留市土地開発公社

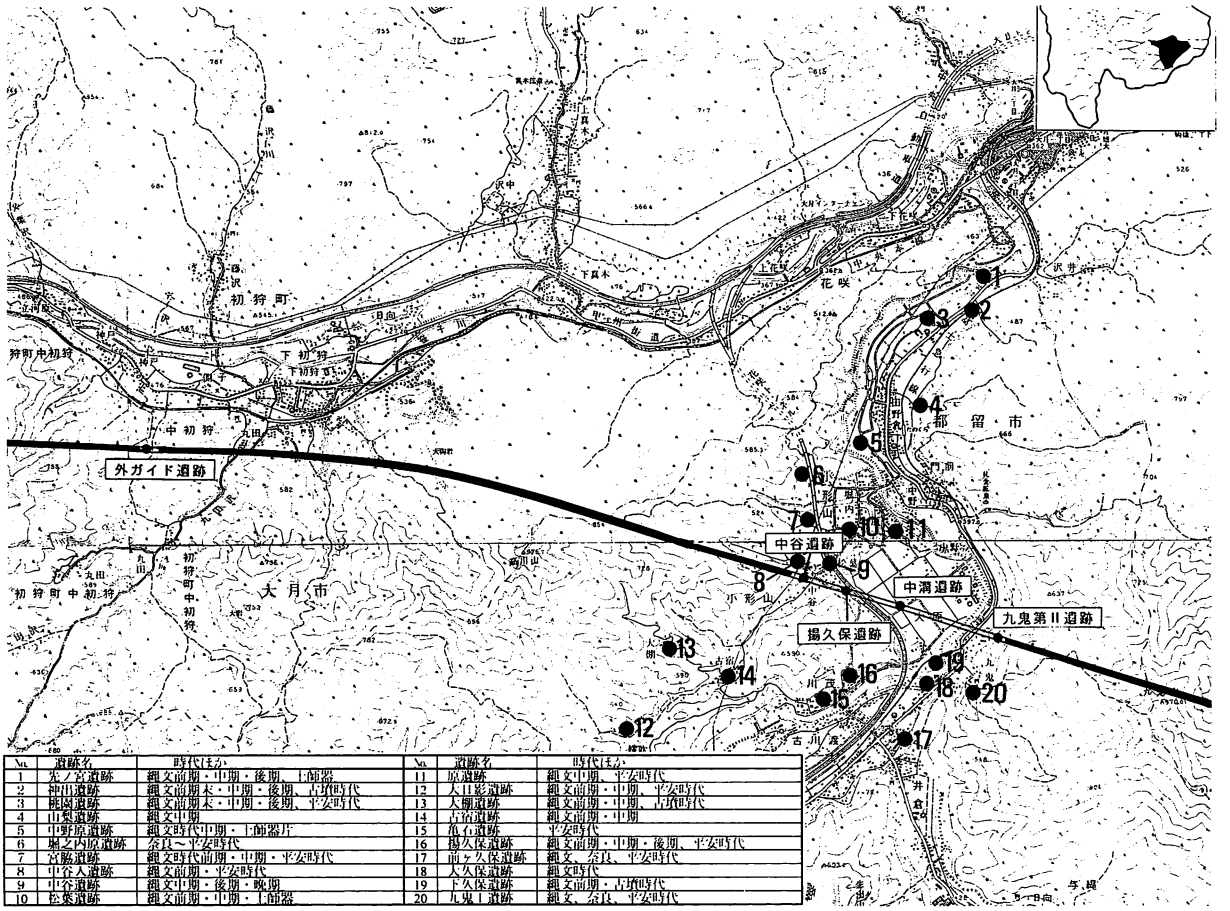
第３節　調査方法

本遺跡は、山梨リニア実験線関連施設コイルヤード建設事業に先立ち、協議の結果、埋蔵文化財センターにおいて遺跡確認調査を行った。確認調査は、事業予定地の全域に幅1.5m、長さ10～30mの試掘トレンチを28本設定し、重機により遺構確認面まで掘り下げ、作業員によりトレンチ内の精査を行った。その結果、遺跡東側の山裾部分を除く平坦部から縄文時代前期～後期、平安時代の遺構や遺物が確認され、6,830㎡について本調査を行うことになった。調査は、建設予定地内のセンター杭を基準とし、調査区内に５m×５mのグリッドを設定し、西から東へA・B・C～のアルファベットを、南から北へ１・２・３～の算用数字を付した。

調査は、まずはじめに試掘データを基に重機によって表土を除去し、作業員による精査を行い、遺構の検出につとめた。本遺跡は、試掘調査の結果、黒色土上面に平安時代の遺構・遺物が検出され、その下のローム層上面に縄文時代前期末～後期の遺構・遺物が検出されたことから、平安時代の遺構などの調査終了後、下層のローム層上面まで掘り下げ、縄文時代の遺構の検出に努めた。遺構確認面までに出土した遺物について、小破片のもの



第１図　九鬼Ⅱ遺跡周辺の地形図



No.	遺跡名	時代ほか	No.	遺跡名	時代ほか
1	宋ノ宮遺跡	縄文前期・中期・後期、土師器	11	原遺跡	縄文中期、平安時代
2	神田遺跡	縄文前期末・中期・後期、古墳時代	12	大日影遺跡	縄文前期・中期、平安時代
3	桃園遺跡	縄文前期末・中期・後期、平安時代	13	大棚遺跡	縄文前期・中期、古墳時代
4	山梨遺跡	縄文中期	14	古谷遺跡	縄文前期・中期
5	中野原遺跡	縄文時代中期・土師器片	15	亀石遺跡	平安時代
6	堀之内原遺跡	奈良～平安時代	16	揚久保遺跡	縄文前期・中期・後期、平安時代
7	宮脇遺跡	縄文時代前期・中期・平安時代	17	前ヶ久保遺跡	縄文、奈良、平安時代
8	中谷A遺跡	縄文前期・平安時代	18	大久保遺跡	縄文時代
9	中谷遺跡	縄文中期・後期・晩期	19	下久保遺跡	縄文前期・古墳時代
10	松葉遺跡	縄文前期・中期・土師器	20	九鬼Ⅰ遺跡	縄文、奈良、平安時代

第２図　リニア関連発掘遺跡と九鬼Ⅱ遺跡周辺の遺跡（S＝1／25,000）

は各グリッドごとに一括で取り上げ、必要に応じて平面図及びレベリングなどの記録作業後、取り上げた。遺構が確認できた段階で、ほかの遺構との重複関係を調べ、前後関係の判るものについては、新しい遺構から掘り下げることにした。遺構内出土遺物については、遺物を残しながら土層断面図、遺構・遺物平面図、遺物出土状況写真などの記録作業終了後取り上げ、遺構全体写真などを経て、各遺構毎に調査を終了している。なお、住居跡の作図はS＝1／20、カマドなどの実測図はS＝1／10を基本に作図している。

第Ⅱ章　環　　境

第１節　地理的環境

本遺跡の所在する都留市は、県の東南部に位置する。周辺を山で囲まれ、東は南都留郡秋山村・道志村、西は南都留郡河口湖町・西桂町、南は富士吉田市・南都留郡忍野村・山中湖村、北は大月市に接している。都留市は総面積に対して、耕地は一割にも満たない山間部で平坦地こそ少ないものの、桂川やその各支流の河岸段丘が発達し、数多くの遺跡が立地している。

今回調査された九鬼Ⅱ遺跡は、朝日川・菅野川・大幡川が桂川に合流し、それを見下ろすように九鬼山がそびえている。その九鬼山の北西面、山裾沖積地の緩傾斜面に本遺跡は立地しており、標高416mを測る。本遺跡の西側には縄文時代、奈良～平安時代における遺物の散布が認められる九鬼Ⅰ遺跡が存在する。

第２節　歴史的環境

まずはじめに、本遺跡を中心とし、リニア実験線建設に関わった遺跡の都留市中谷遺跡、揚久保遺跡、中溝遺跡、大月市外ガイド遺跡についてふれてみる。中谷遺跡は、桂川によって形成された河岸段丘の大原大地の末端部上の小谷、都留市小形山瀬木に位置し、1993年度の調査の結果、住居跡９軒・土坑16基・配石遺構７基・埋甕７基・屋外炉２基・集石土坑２基・石組み溝１条が検出されている。住居跡については縄文時代中期末～後期前半を中心とし、そのうちの７軒が柄鏡形敷石住居であったとされる。翌年度は、住居跡７軒・土坑25基・集石土坑15基・配石遺構15基・屋外炉１基・埋甕１基・中世の溝状遺構１条・近世墓３基・時期不明のピット数十基が検出されている。このように中谷遺跡は、中央道建設など合計３回の調査が行われ、縄文時代後期・晩期の集落として知られている。中溝遺跡は、小形山地区を流れる桂川の左岸河岸段丘上に広がる大原大地の東側に位置し、縄文時代の住居跡７軒・土坑11基・集石３基、平安時代の住居跡３軒・土坑10基・小穴群１、近世の溝状遺構が検出されている。住居跡は縄文時代早期末のもので、本県において、貴重な資料として特筆される。揚久保遺跡は、桂川左岸に迫る山の頂から北東に向けて発達する緩やかな谷底平地の中央部に位置する。調査の結果、縄文時代の陥し穴１基、平安時代以降の土坑12基、近世の掘立柱建物跡１軒、水路３条、溝２条、性格不明のピット21基が検出されている。大月市外ガイド遺跡は、大月市初狩町地内に所在し、相模川水系の宮川と八田川に挟まれた、標高477mの平坦地に所在し、縄文時代早期の集石遺構２基・石組炉12基、後期の配石遺構３基・集石遺構２基・石組炉３基・掘立柱建物跡１軒・柄鏡形敷石住居跡１軒、平安時代の住居跡５軒・土壙墓１基が検出されている。遺物については、早期の押型文・撚糸文、前期の諸磯ｃ式、中期の五領ヶ台式、後期の堀之内式が検出されている。平安時代については須恵器・灰釉陶器が出土している。

次に、本遺跡周辺の主な遺跡分布について、桂川を中心に概観してみる。前節で述べたとおり、本地域の遺跡は、ほとんどが桂川などの河岸段丘上に数多く分布している。１：先ノ宮遺跡は、詳細な発掘調査は行われていないが、縄文時代中期の曽利Ⅱ式の深鉢が採集され、従来採取された遺物は、縄文前期黒浜式、諸磯ｂ・ｃ式、縄文中期曽利式・後期の加曽利B式の土器片や、土師器片が見られる。２：神出遺跡は、工事中に遺物が出土し、かなりの広範囲において土器片が大量に採取され、縄文前期諸磯ｃ式、中期勝坂式、曽利式、後期加曽利B式、及び土師器・須恵器がみられる。３：桃園遺跡は、農道拡幅工事の際、多量の土器片が採集されている。土器片は縄文前期末諸磯ｂ・ｃ式、中期勝坂・曽利式、後期の堀之内式、平安時代の土師器で、縄文時代から歴史時代までの長期にわたる集落の存在が想定される遺跡である。６：堀之内原遺跡は河口湖～大月インター間４車線化に伴う発掘調査で、奈良～平安時代の住居跡６軒と、掘立柱建物跡など多数確認され、当地方特有のいわゆる「堀之内原type」と呼称される土器が検出された遺跡である。７：宮脇遺跡は古くから知られる遺跡で、小学校

校庭拡張の際、住居跡が検出されたとあるが、詳細は不明で、採集されている土器片は、縄文前期・中期および平安時代と考えられている。8：中谷入遺跡は中谷遺跡発掘調査の際、周辺の調査を実施した際に確認された遺跡で、縄文前期末諸磯b式及び平安時代と思われる土師器である。10：松葉遺跡は住居跡、横穴など発見されたとしているが、詳細は不明で、採取された遺物は縄文前期末諸磯c式、中期の五領ヶ台式、曽利式および土師器片である。11：原遺跡も古くから桑畑内より石鏃を多く出土する遺跡として知られているが、従来採集された遺物は縄文中期曽利式、平安時代と思われる土師器片がみられる。12：大日影遺跡は、縄文時代前期末の十三菩提式の完形土器が工事中に偶然発見され、ほかに縄文前期・中期、平安時代の土器片が若干採集されている。13：大棚遺跡は林道工事の際、古墳時代の住居跡3軒が検出され、採取された遺物も縄文前期の諸磯b・c式期、中期勝坂式期および土師・須恵器片が検出されており、長期にわたり集落が形成されている遺跡である。14：古宿遺跡も古くから知られる遺跡で、縄文時代前期諸磯b・cおよび中期勝坂期がみられる。19：下久保遺跡は昭和46年の遺跡分布調査により確認された遺跡で、採集された遺物は縄文時代前期の繊維土器および諸磯c式期および須恵器の破片が見られる。20：九鬼Ⅰ遺跡は本遺跡の南西側小沢を隔てて隣接する遺跡で、縄文・奈良・平安時代の遺物が採取される遺跡である。

【参考文献】

奈良泰史『中谷・宮脇遺跡』都留市教育委員会・日本道路公団東京第二建設局　1981

都留市史編纂委員会『都留市史』資料編地史・考古　1986

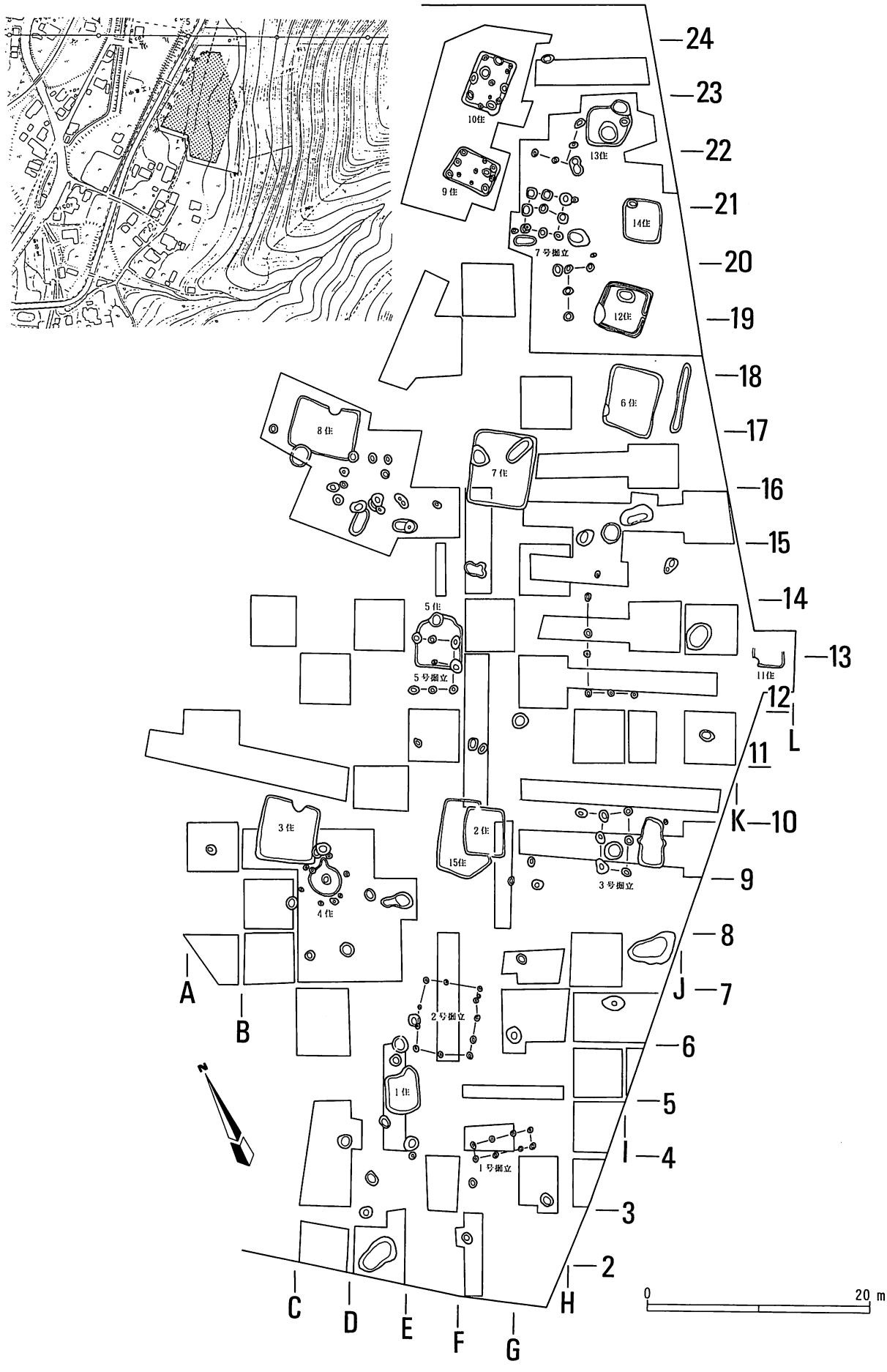
小野正文ほか「外ガイド遺跡」年報8　山梨県埋蔵文化財センター　1992

保坂康夫ほか「揚久保遺跡」年報9　山梨県埋蔵文化財センター　1993

長沢宏昌ほか「中谷遺跡」年報10　山梨県埋蔵文化財センター　1994

〃　「中溝遺跡」　〃　〃

〃　「揚久保遺跡」　〃　〃



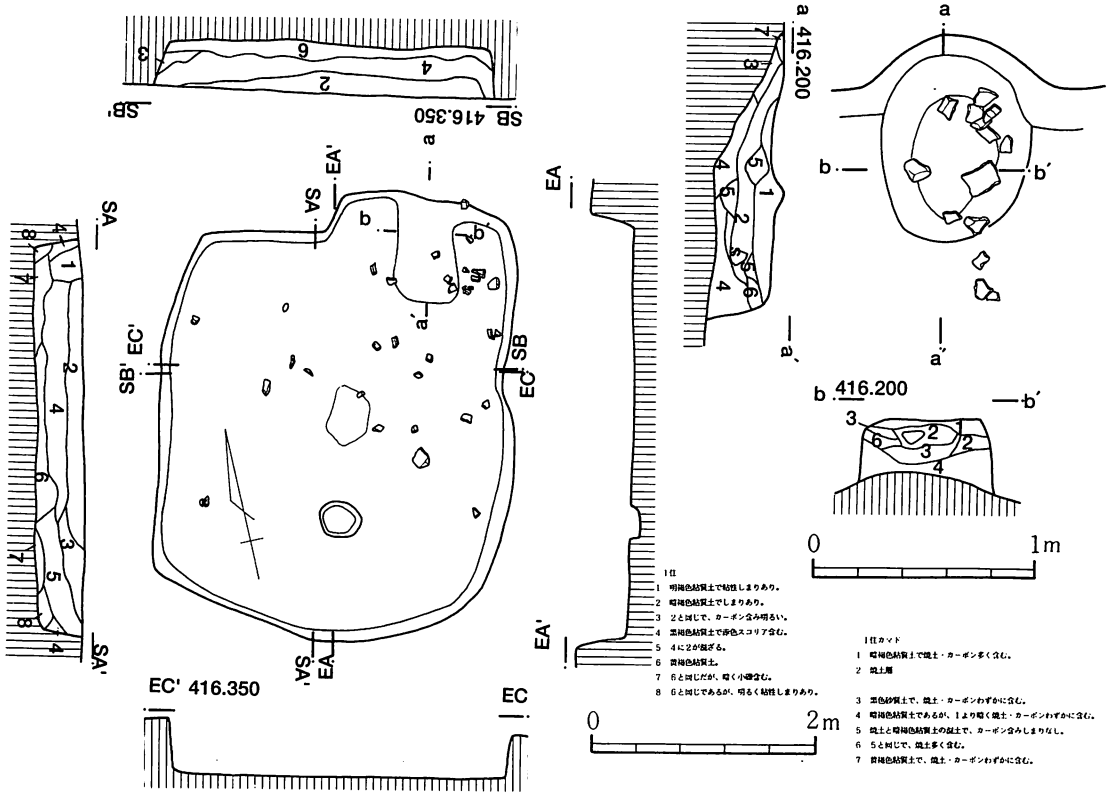
第３図　九鬼Ⅱ遺跡全体図

第Ⅲ章　遺構と遺物

第１節　住居跡

◎第１号住居跡（第４図）

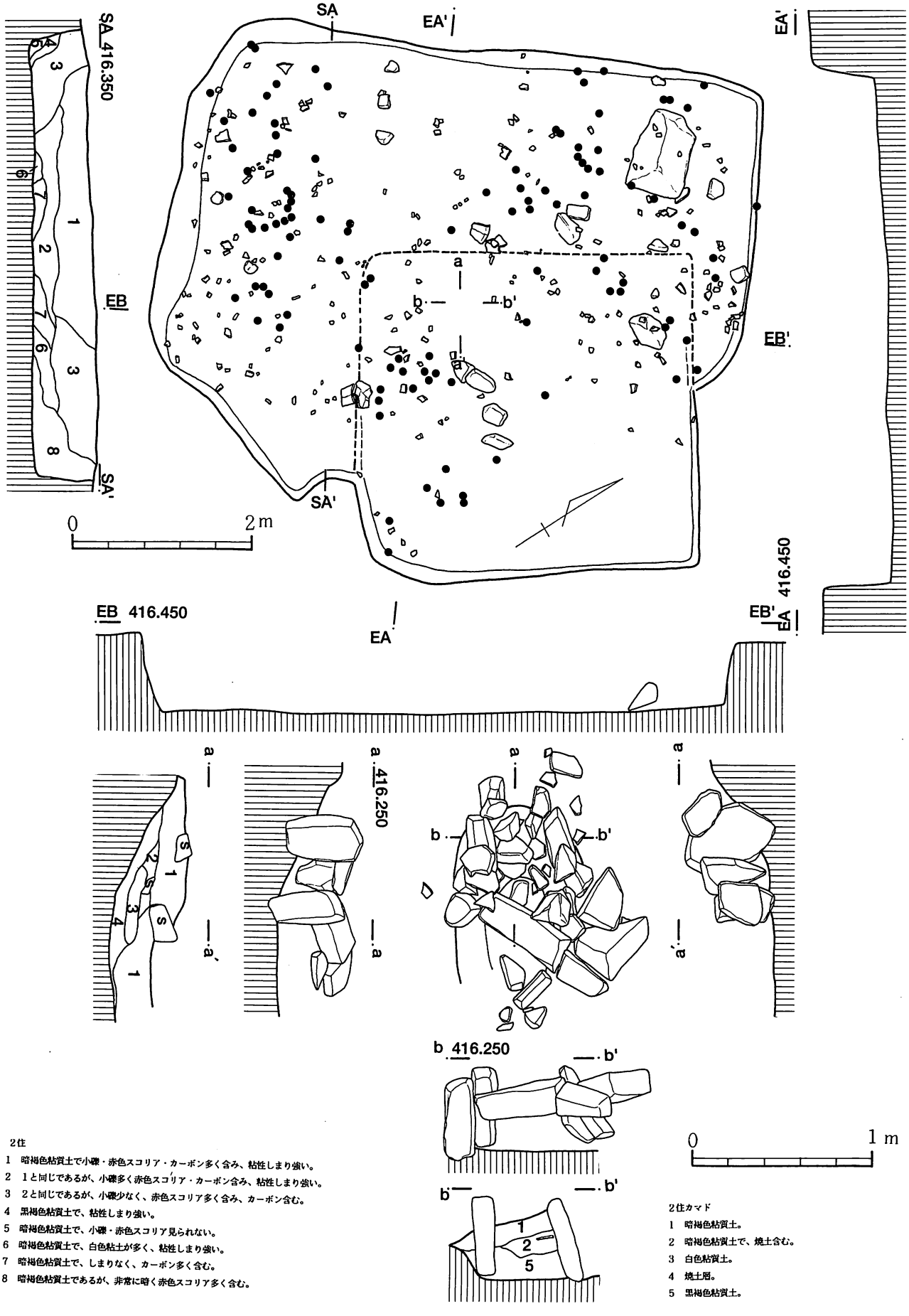
E－４・５、F－４・５グリッドに位置する。長辺4.1m、短辺3.3mの隅丸方形を呈し、北東コーナー付近が突出している。壁高は約0.5mを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は、全体的に軟弱で張り床などは検出されず、柱穴なども確認できなかった。カマドは、住居跡北側の壁に構築されている。袖石や天井石などに礫の使用はなく、若干の掘り込みが検出されている。出土遺物は、カマド内から鉢が１点出土している。



第４図　第１号住居跡平面図・同カマド平面図

◎第２・15号住居跡（第５図）

E－８・９・10、F－８・９・10グリッドに位置する。おそらく２軒の住居跡が重複していると思われる。調査時においては、第２号住居跡として全体の遺物を取り上げており、整理の段階で２軒の住居跡としてとりあげている。第２号住居跡は、一辺が推定４mの隅丸方形を呈する。第15号住居跡は、長辺6.5m、短辺3.8mの長方形を呈すると思われる。第２号住居跡の北西側及び第15号住居跡北東側が重複している。第２号住居跡の壁高は、0.75m程でほぼ垂直に立ち上がる。第15号住居跡の壁高は、約0.7m程で緩やかに傾斜しながら立ち上がる。床面は２軒とも張り床などの踏み固められた痕跡は見られず、全体的に軟弱である。カマドは、第２号住居跡が北西側コーナー付近に見られ、第15号住は住居跡北側壁付近に構築されていたと思われ、付近には焼土や粘土がわずかに散布していた。第２号住カマドは、袖石・天井石などで構築されており、炊き口は0.4m程見られる。柱穴などは２軒とも検出されていない。主な出土遺物については、住居内覆土中から土錘が５点出土している。また、墨書土器なども検出されている。



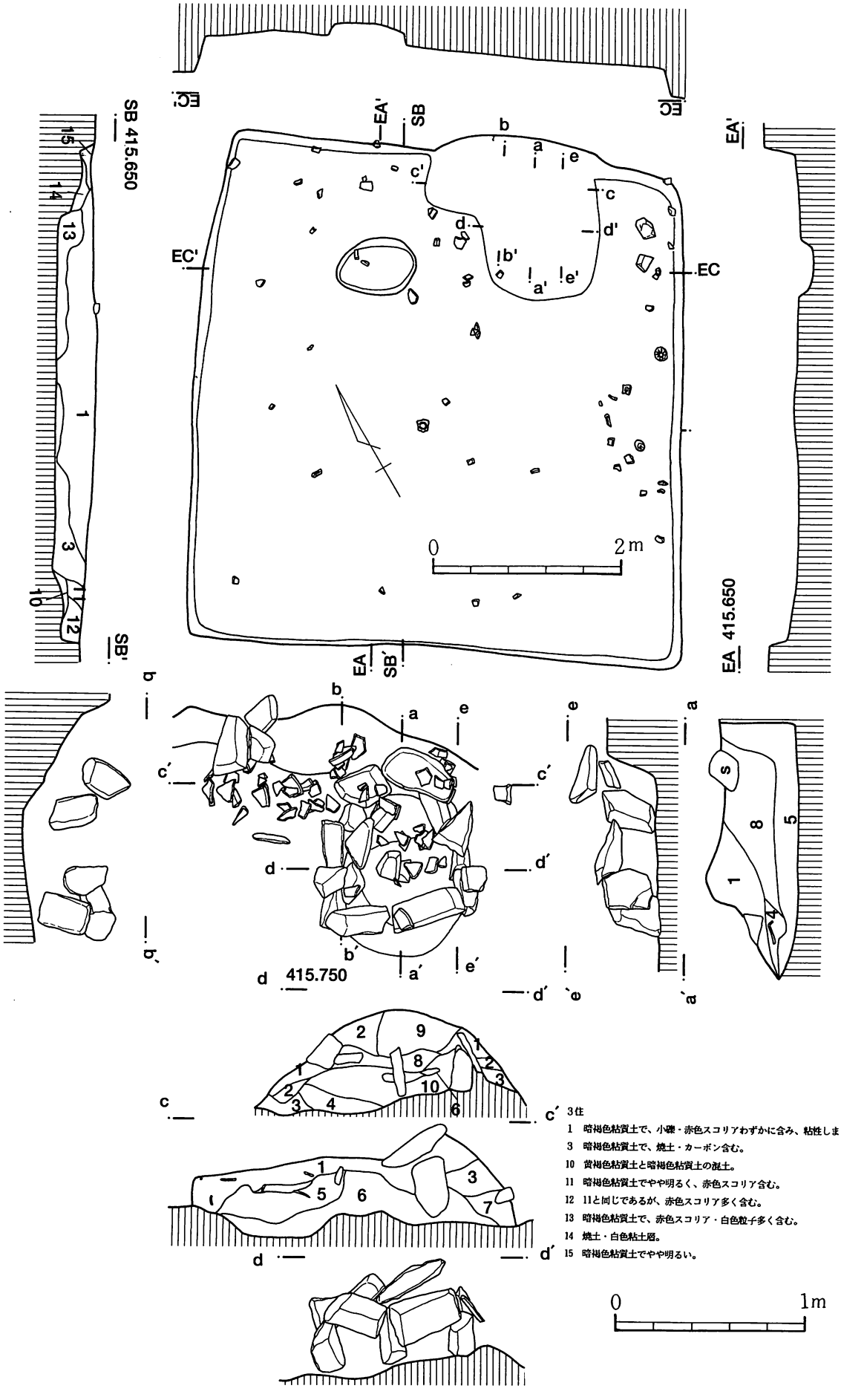
2住

1　暗褐色粘質土で小礫・赤色スコリア・カーボン多く含み、粘性しまり強い。
2　1と同じであるが、小礫多く赤色スコリア・カーボン含み、粘性しまり強い。
3　2と同じであるが、小礫少なく、赤色スコリア多く含み、カーボン含む。
4　黒褐色粘質土で、粘性しまり強い。
5　暗褐色粘質土で、小礫・赤色スコリア見られない。
6　暗褐色粘質土で、白色粘土が多く、粘性しまり強い。
7　暗褐色粘質土で、しまりなく、カーボン多く含む。
8　暗褐色粘質土であるが、非常に暗く赤色スコリア多く含む。

2住カマド

1　暗褐色粘質土。
2　暗褐色粘質土で、焼土含む。
3　白色粘質土。
4　焼土層。
5　黒褐色粘質土。

第５図　第２・15住居跡平面図・同カマド平面図

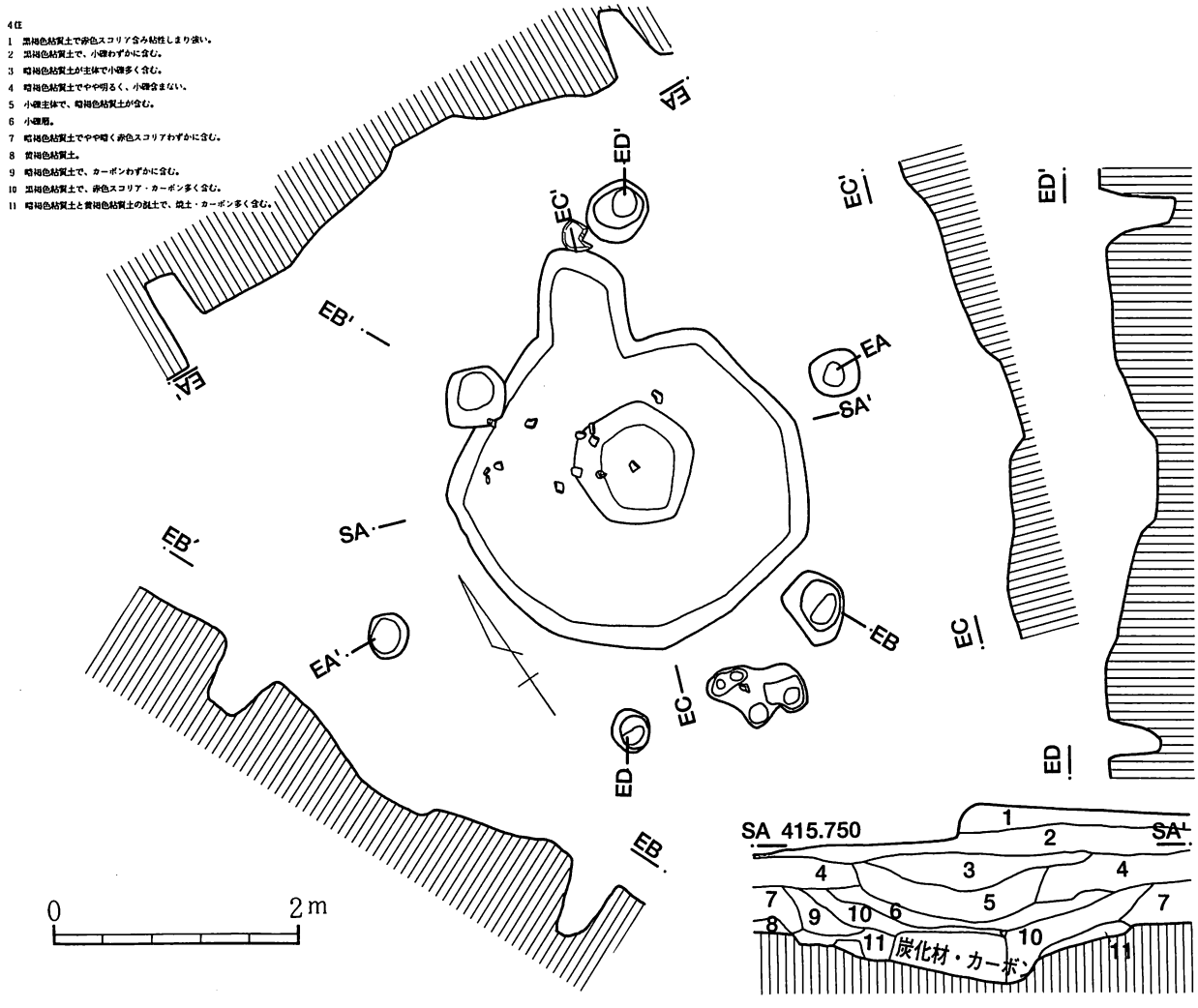


第6図　第3号住居跡・同カマド平面図

◎第３号住居跡（第６図）

C－９・10、D－９・10グリッドに位置する。一辺が5.2mの隅丸正方形を呈する。壁高は0.35mを測り、緩やかに傾斜しながら立ち上がる。張り床は一部分であるものの確認されている。柱穴は、検出されていない。カマドは、住居跡北東壁コーナー付近に構築されている。天井石・袖石など残存状態は極めて良好である。炊き口は0.6m程で、天井石は中央部から崩落している。カマド内部には石製の支脚がみられる。カマド内覆土中からは、甕・坏などが豊富に出土している。

遺物は、住居内覆土から、緑釉陶器・坏・甕・鉄製品など出土している。



第７図　第４号住居跡平面図

◎第４号住居跡（第７図）

D－８・９グリッドに位置する。直径3.2mの不整円形を呈する。住居跡北東側に幅0.8m、長さ0.9m程の突出部がみられる。住居跡中央部には直径1.0m、深さ0.3mを測る落ち込みがみられ、住居跡中央部に向かってすり鉢状に緩やかに傾斜している。住居跡外側には、６本のピットが検出されている。ピット１は、楕円形を呈し、長径0.55m×短径0.35m、深さ0.65mを測る。ピット２は、直径0.4mの不整円形を呈し、深さ0.55mを測る。ピット３は、不定形を呈し、長径0.55m×短径0.45m、深さ0.6mを測る。ピット４は、長径0.4m×短径0.35mの円形を呈し、深さ0.4mを測る。ピット５は、長径0.4m×短径0.3mの円形を呈し、深さ0.7mを測る。ピット６は、不整円形を呈し、直径0.5m、深さ0.5mを測る。覆土中には、炭化材が多く検出されている。炉などの施設は検出されていないため、住居跡とは考えがたいが、焼土やカーボンが覆土中から見られるため住居跡と考えられる。本住居跡は、本遺跡唯一の縄文時代の住居跡と考えられる。出土遺物は、ほとんど見られなかった。

◎第５号住居跡（第８図）

F－12・13グリッドに位置する。一辺が4.4mの隅丸方形を呈する。壁は0.6mでほぼ垂直に立ち上がる。床面は全面に張り床がみられる。本住居跡に伴う柱穴は検出されていないが、カマド左側に直径1.2mの不整円形を呈し、深さは床面より0.4mを測る貯蔵穴が検出されている。カマドは、住居跡の北東方向北側壁に構築されているが、残存状態は不良でわずかに掘り込みが検出されている。また、本住居跡は、第５号掘立柱建物跡と重複しており、掘立柱建物跡の柱穴部分に張り床が検出されていないため、新旧関係については、第５号掘立柱建物跡が新しく、本住居跡が古いことになる。

◎第６号住居跡（第９図）

I－16・17・18、J－16・17・18グリッドに位置する。住居跡の規模は、長辺6.1m、短辺4.6mの隅丸長方形を呈する。本住居跡の残存状況はあまりよくなく、壁高は0.2mで緩やかに立ち上がる。床面には、一部ではあるが張り床が認められる。カマドは、住居跡西側壁のコーナー付近に構築されている。カマドの残存状態は不良で、掘り込みが長径2.0m、短径1.6m、深さ0.3mを測る。遺物は、カマド覆土中より小破片が若干出土している。

◎第７号住居跡（第10図）

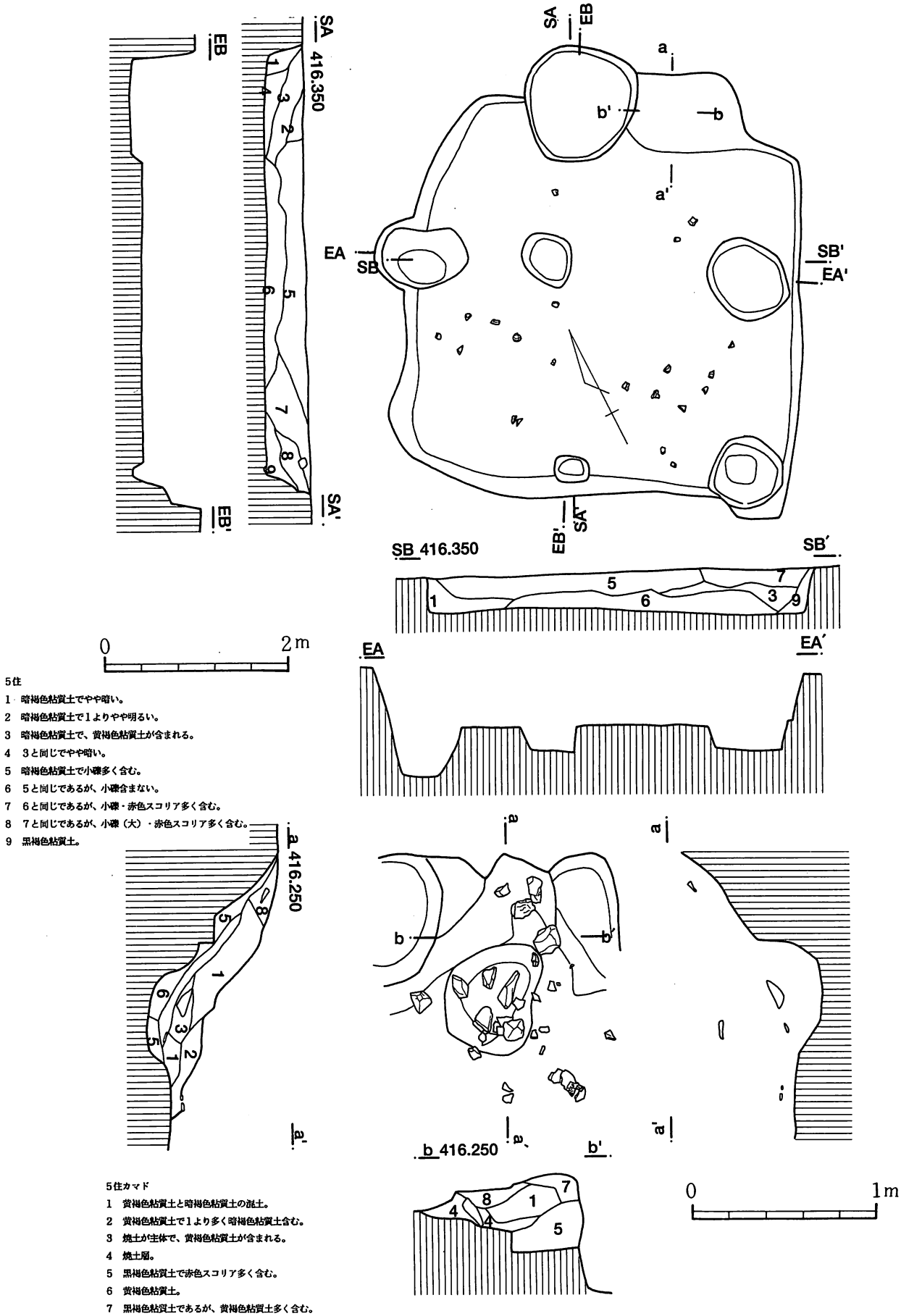
G－15・16・17、H－15・16グリッドに位置する。本住居跡の規模は、長辺6.7m、短辺5.5mの隅丸長方形を呈する。住居内には、幅0.2m、深さ0.1～0.2mの規模で周溝が廻るが、住居北側コーナーで切れるほかは全周する。壁は、高さ0.25m程でほぼ垂直に立ち上がる。また、住居内には５基の土坑が検出されている。土坑1は、土坑北側が不明であるが、直径1.2mほどの円形を呈すると思われ、深さ0.45mを測る。土坑２は、長径0.90m、短径0.75mの楕円形を呈し、深さ0.3mを測る。土坑３は、長径1.6m、直径0.45mの瓢箪型を呈し、深さ0.20mを測る。土坑４は、土坑５と重複しており、直径0.8mの円形を呈すると思われ、深さ0.15mを測る。土坑５は、長径1.35m、短径0.75mの楕円形を呈し、深さ0.25mを測る。床面は、張り床が一部分であるが確認されている。カマドは、住居跡北西コーナー付近の壁に構築されていたと思われる。袖石などの構築材は確認できなかったが、掘り込みが２カ所見られる。また、住居跡南側コーナー付近に焼土・カーボンが堆積している箇所が確認され、覆土中からシカと考えられる骨片が出土している。詳細は、（付編）『九鬼Ⅱ遺跡出土獣骨と人骨の同定』を参照とされたい。また、上面には鉄製品の鎌が出土している。

◎第８号住居跡（第11図）

C－16・17、D－16・17、E－17グリッドに位置する。長辺5.7m、短辺4.5mの隅丸長方形を呈する。住居跡南側の住居跡プランは、はっきりしないため推定である。床面は、張り床などの痕跡は認められず、軟弱な状態である。本住居覆土中及び床面上には炭化材や焼土が非常に多く認められ、焼失家屋の可能性が示唆される。カマドは、北東壁中央部分に構築されている。カマドは、袖石などの構築材は確認できなかったものの、長径1.8m、短径1.6m程の円形を呈する。出土遺物は、長頸壷・鉄製の紡錘車などが出土している。

◎第９号住居跡（第12図）

F－21・22、G－21・22グリッドに位置する。長辺4.3m、短辺3.2mの隅丸長方形を呈する。壁高は0.5m程でほぼ垂直に立ち上がる。床面は、非常に良好で全面に踏み固められた状況が確認されている。柱穴は９基検出されており住居内施設と思われる土坑が２基確認されている。ピット１は、長径0.85m、短径0.75mの不整円形を呈し、深さ0.2mを測る。ピット２は、北側コーナーに位置し、直径0.5mの円形を呈する。深さ0.6mを測る。ピット３は、北東壁中央に位置し、長径0.4m、短径0.25m、深さ0.25mを測る。ピット４は、東側コーナーに位置し、長径0.35m、短径0.3mの不整円形を呈し、深さ0.6mを測る。ピット５は、北西壁中央に位置し、直径0.6mの円形を呈し、深さ0.4mを測る。ピット６は、住居跡の中央に位置し、長径0.5m、短径0.35mの不整円形を呈し、深さ



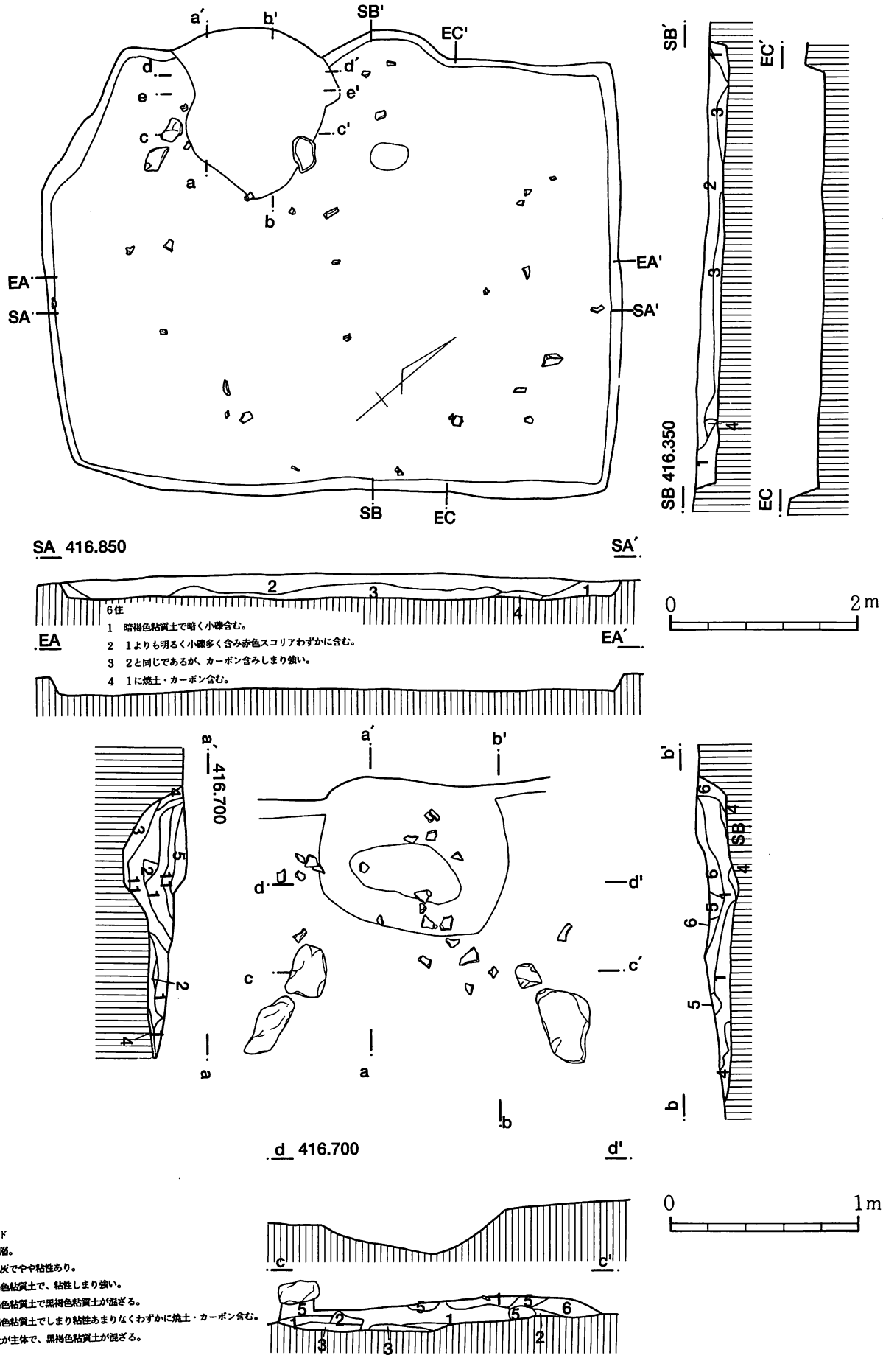
5住

1　暗褐色粘質土でやや暗い。
2　暗褐色粘質土で1よりやや明るい。
3　暗褐色粘質土で、黄褐色粘質土が含まれる。
4　3と同じでやや暗い。
5　暗褐色粘質土で小礫多く含む。
6　5と同じであるが、小礫含まない。
7　6と同じであるが、小礫・赤色スコリア多く含む。
8　7と同じであるが、小礫（大）・赤色スコリア多く含む。
9　黒褐色粘質土。

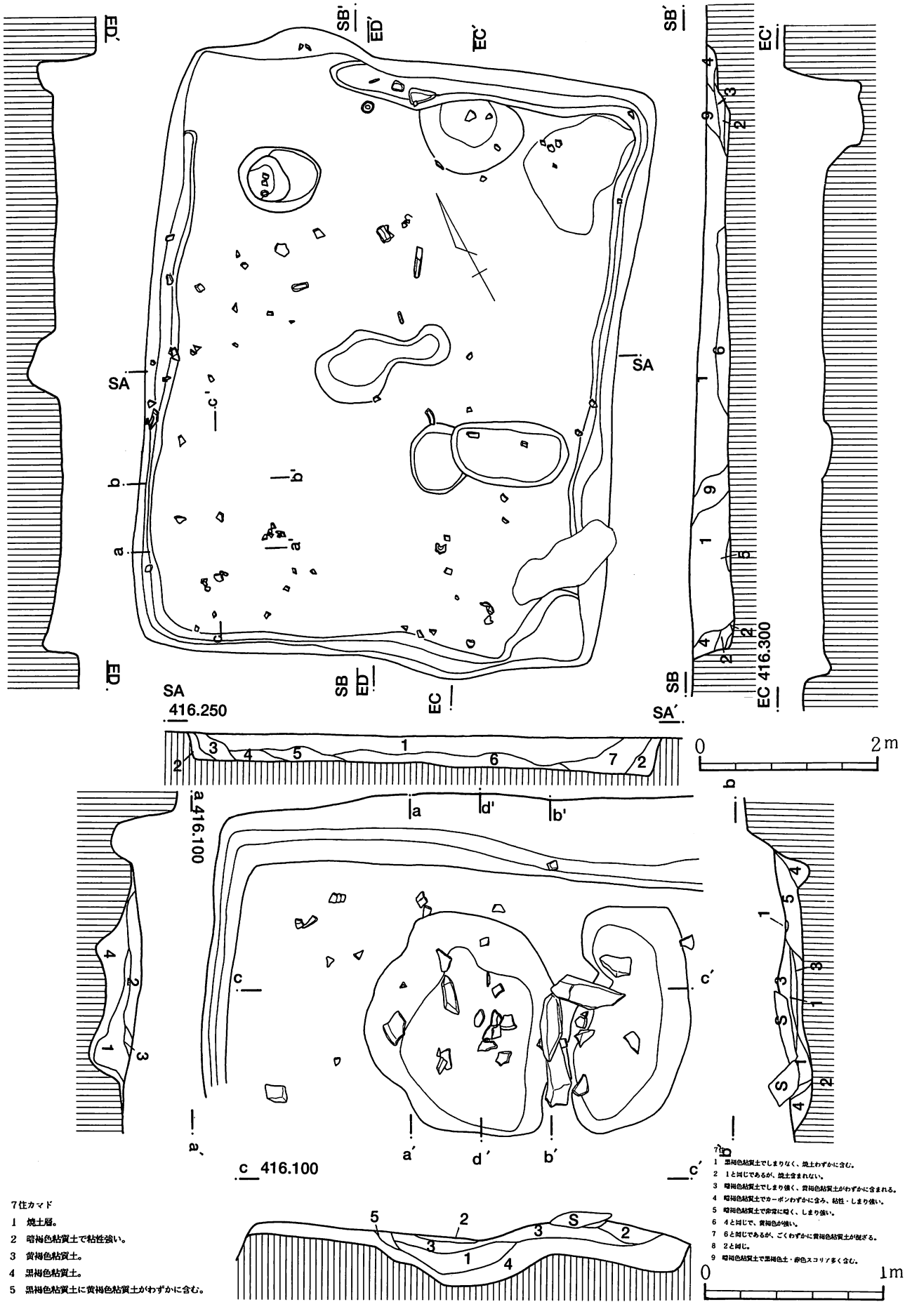
5住カマド

1　黄褐色粘質土と暗褐色粘質土の混土。
2　黄褐色粘質土で1より多く暗褐色粘質土含む。
3　焼土が主体で、黄褐色粘質土が含まれる。
4　焼土層。
5　黒褐色粘質土で赤色スコリア多く含む。
6　黄褐色粘質土。
7　黒褐色粘質土であるが、黄褐色粘質土多く含む。
8　7と同じであるが、黄褐色粘質土わずかに含む。

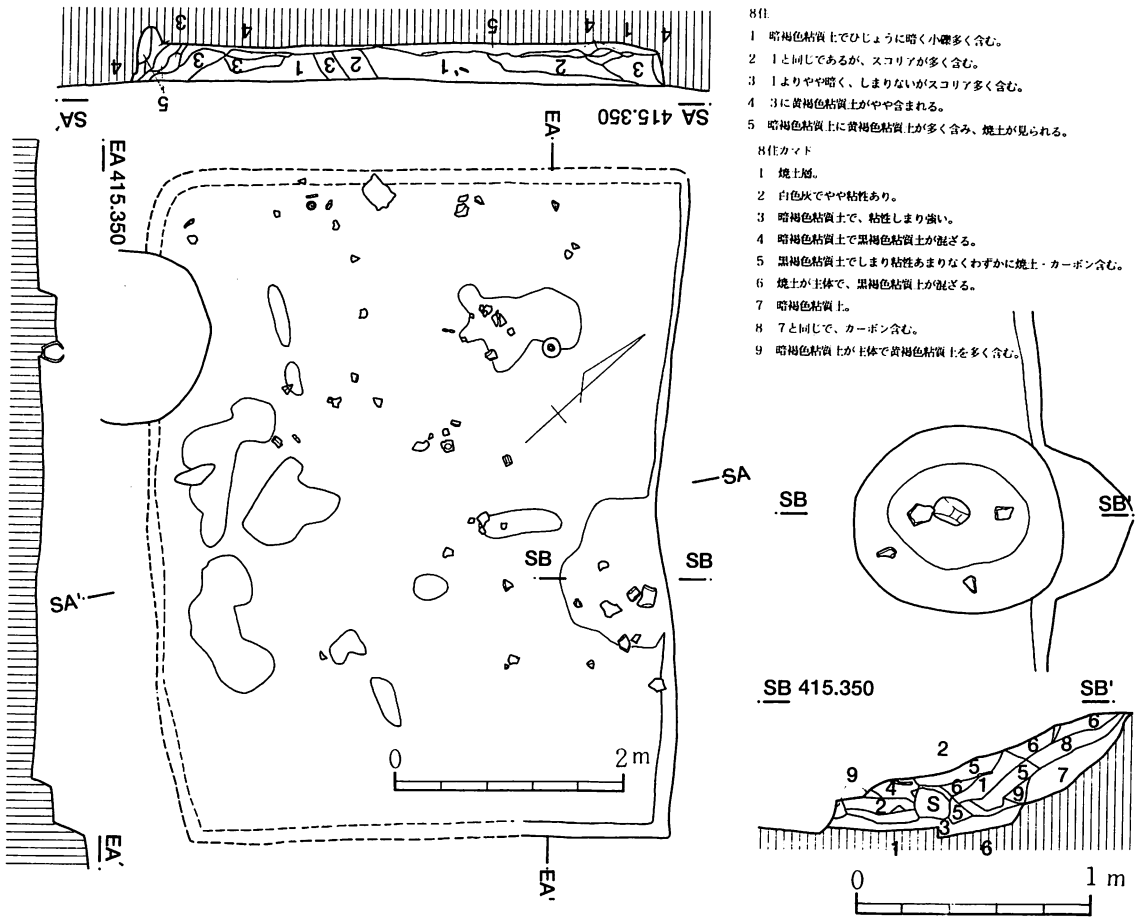
第8図　第5号住居跡・同カマド平面図



第９図　第６号住居跡・同カマド平面図



第10図　第７号住居跡・同カマド平面図

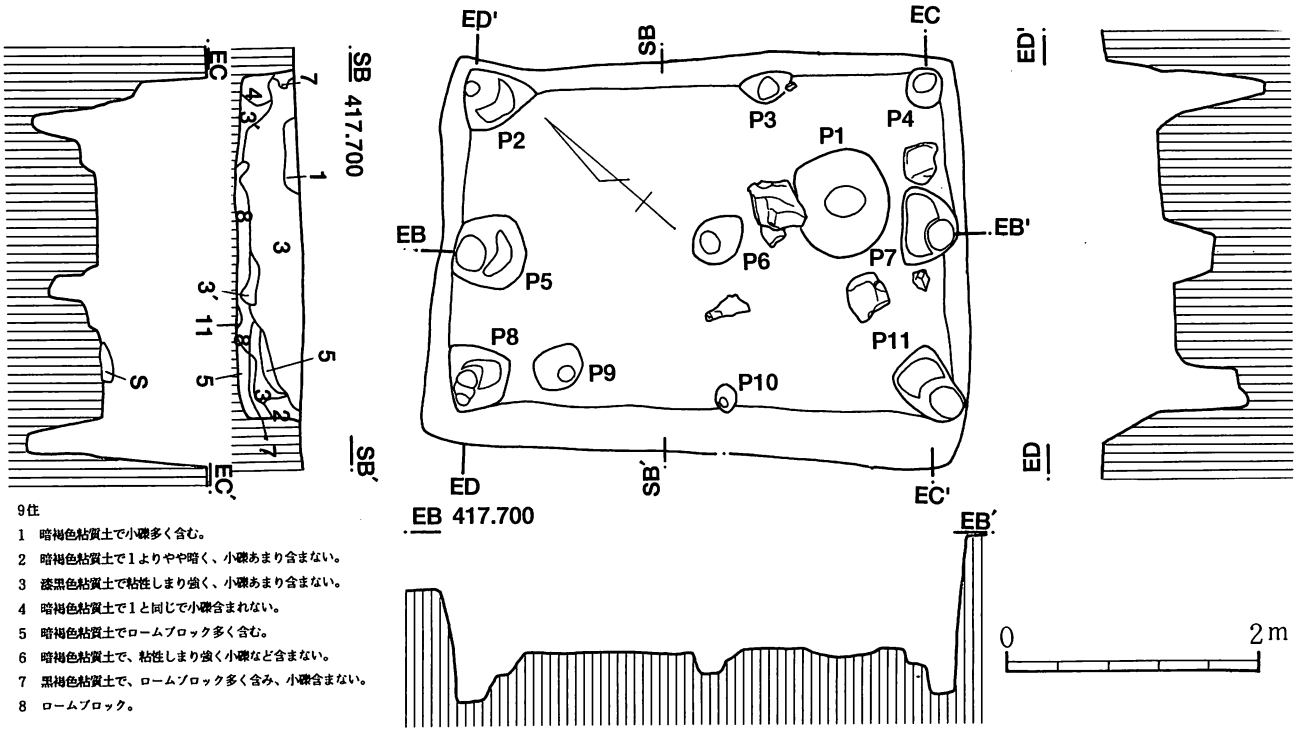


第11図　第８号住居跡・同カマド平面図

0.2mを測る。ピット７は、南東壁中央に位置し、長径0.6m、短径0.45mの不整円形を呈し、深さ0.3mを測る。ピット８は、住居内西側コーナーに位置する。直径0.5mのほぼ円形を呈し、深さ0.4mを測る。ピット９は、直径0.4mの不整円形を呈し、深さ0.5mを測る。ピット10は、南西壁中央に位置し、長径0.2m、短径0.15mの不整円形を呈し、深さ0.25mを測る。ピット11は、南側コーナーに位置し、長径0.6m、短径0.15mの不整円形を呈し、深さ0.25mを測る。本住居跡は、カマドや炉などは検出されておらず、住居跡とは考えにくい。本遺跡のプランが確認できた黒色土を掘り込んでいることから平安時代もしくはそれ以降の所在と考えられるが、出土遺物も皆無の状況であるため時代及び時期の確定は難しい。また、覆土中には、焼土やカーボンなど見られず、倉庫的な遺構の可能性も考えられる。

◎第10号住居跡（第13図）

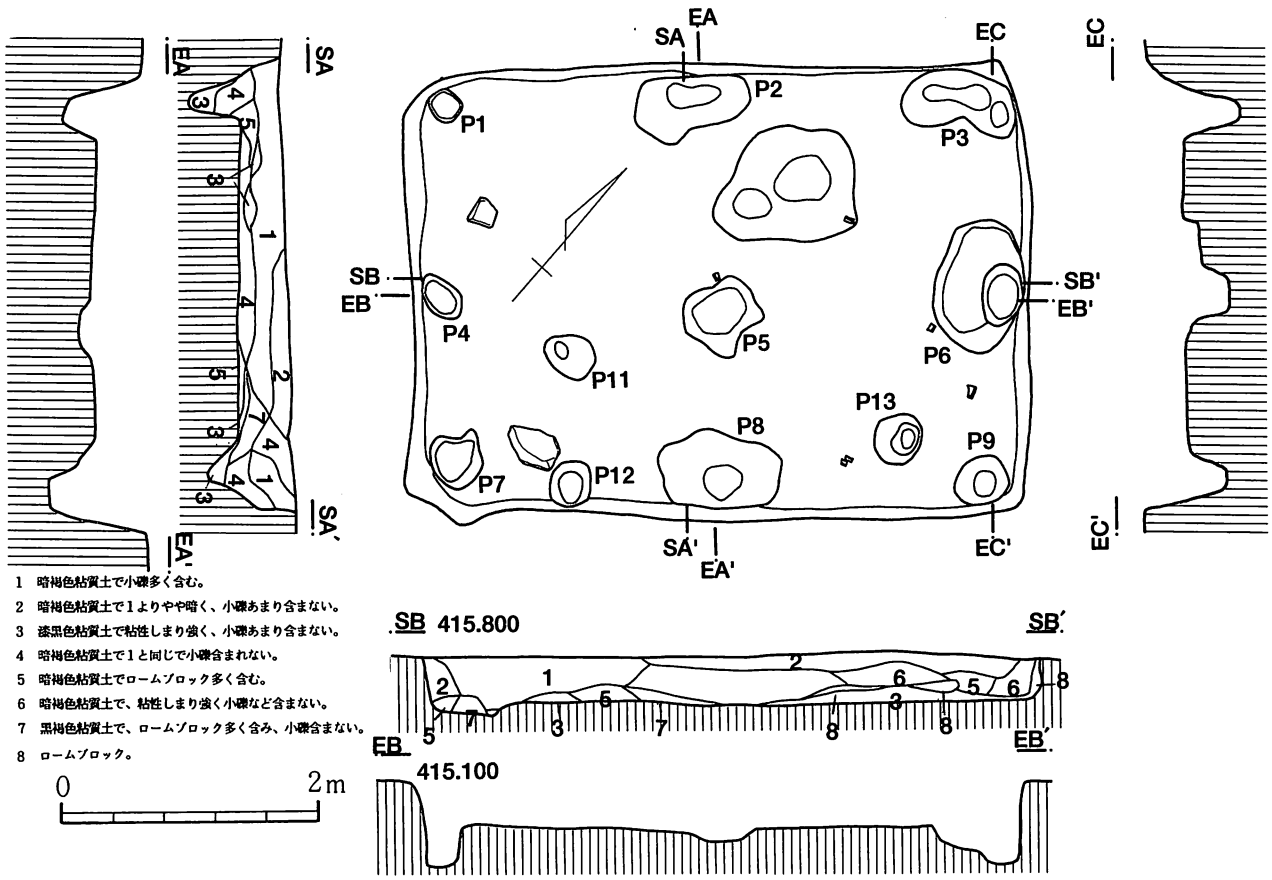
G－22・23グリッドに位置する。長辺4.9m、短辺3.5mの隅丸長方形を呈し、第９号住居跡より一回り大きい。壁高は0.35mでほぼ垂直に立ち上がる。床面は、第９号住居同様踏み固められた痕跡が住居跡全面に認められ、非常に良好である。ピットは13基確認されている。ピット１は、西側コーナーに位置し、直径0.25mの円形を呈し深さ0.5mを測る。ピット２は、北西壁中央に位置し長径0.9m、短径0.45mの楕円形を呈し、深さ0.4mを測る。ピット３は、住居跡北側コーナーに位置し、長径0.9m、短径0.35mの楕円形を呈し、深さ0.55mを測る。ピット４は、北西壁中央に位置し、長径0.45m、短径0.25mの楕円形を呈し、深さ0.3mを測る。ピット５は、住居跡中央部に位置し、不整円形を呈し、深さ0.2mを測る。ピット７は、南側コーナーに位置し直径0.45mの円形を呈する。深さは0.3mを測る。ピット８は、東側壁中央に位置する。長径1.0m、短径0.65mの楕円形を呈し、深さ0.37mを測る。ピット９は、住居跡東側コーナーに位置し、直径0.4mの円形を呈し、深さ0.3mを測る。ピット10は、長



9住

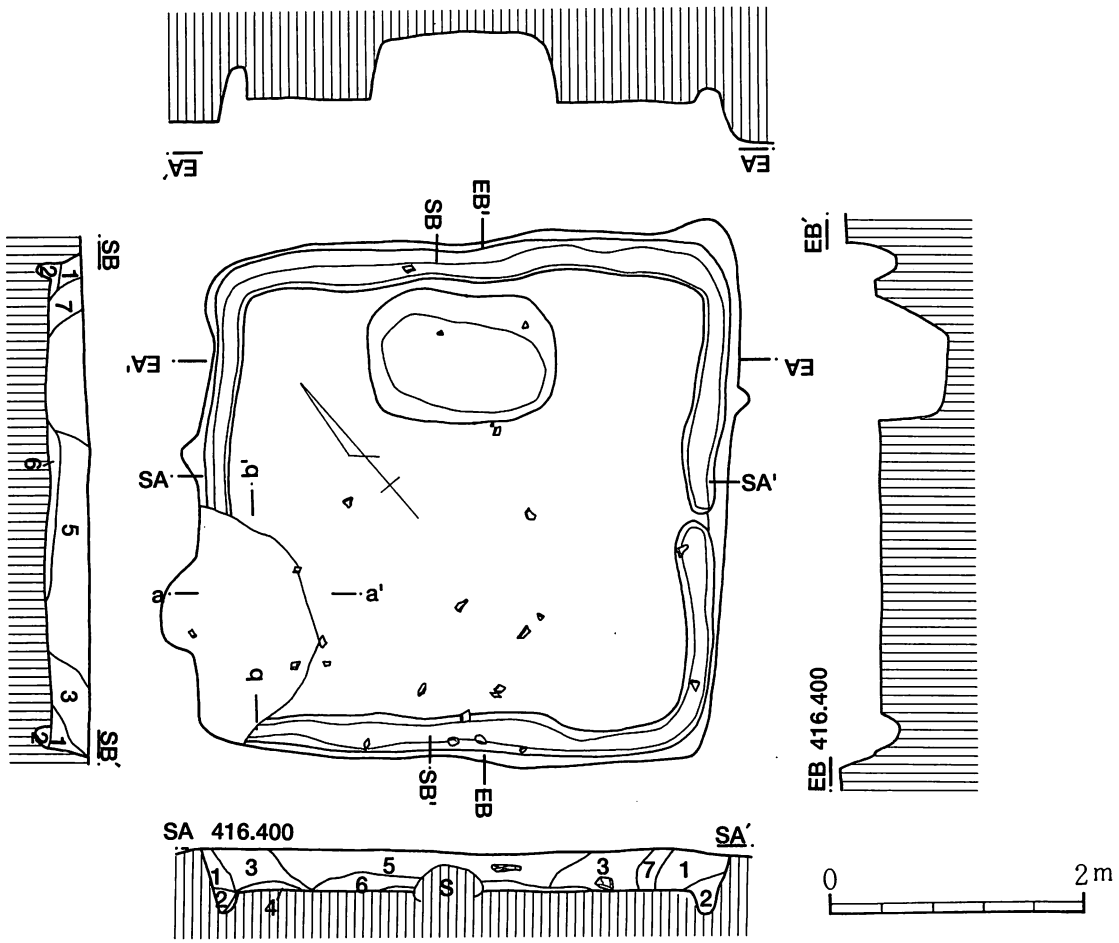
1 暗褐色粘質土で小礫多く含む。
2 暗褐色粘質土で1よりやや暗く、小礫あまり含まない。
3 漆黒色粘質土で粘性しまり強く、小礫あまり含まない。
4 暗褐色粘質土で1と同じで小礫含まれない。
5 暗褐色粘質土でロームブロック多く含む。
6 暗褐色粘質土で、粘性しまり強く小礫など含まない。
7 黒褐色粘質土で、ロームブロック多く含み、小礫含まない。
8 ロームブロック。

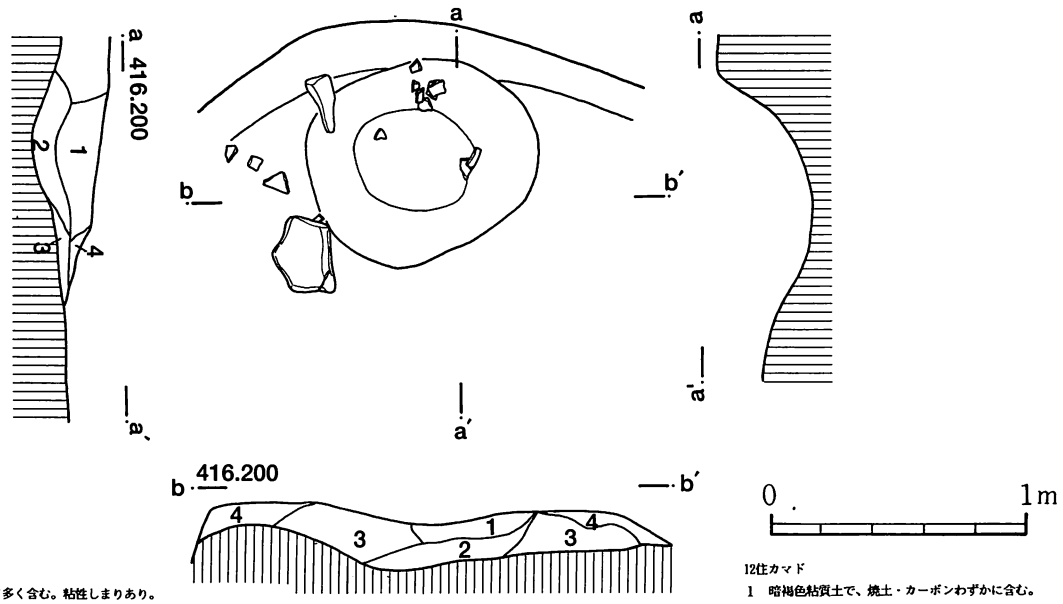
第12図　第９号住居跡平面図



1 暗褐色粘質土で小礫多く含む。
2 暗褐色粘質土で1よりやや暗く、小礫あまり含まない。
3 漆黒色粘質土で粘性しまり強く、小礫あまり含まない。
4 暗褐色粘質土で1と同じで小礫含まれない。
5 暗褐色粘質土でロームブロック多く含む。
6 暗褐色粘質土で、粘性しまり強く小礫など含まない。
7 黒褐色粘質土で、ロームブロック多く含み、小礫含まない。
8 ロームブロック。

第13図　第10号住居跡平面図





12住

1　黒褐色粘質土で、赤色スコリア多く含む。粘性しまりあり。

2　暗褐色粘質土でやや明るい。

3　黒褐色粘質土であるが、やや明るく小礫含み赤色スコリア多く含み粘性しまりあり。

4　暗褐色粘質土でカーボン含み赤色スコリアわずかに含み粘性しまり強い。

5　3と同じ構成であるが、しまりなく小礫少ない。

6　黄褐色粘質土で赤色スコリアわずかに含み、粘性しまり強い。

7　黒褐色粘質土で赤色スコリア多く含むが、粘性しまりなし。

12住カマド

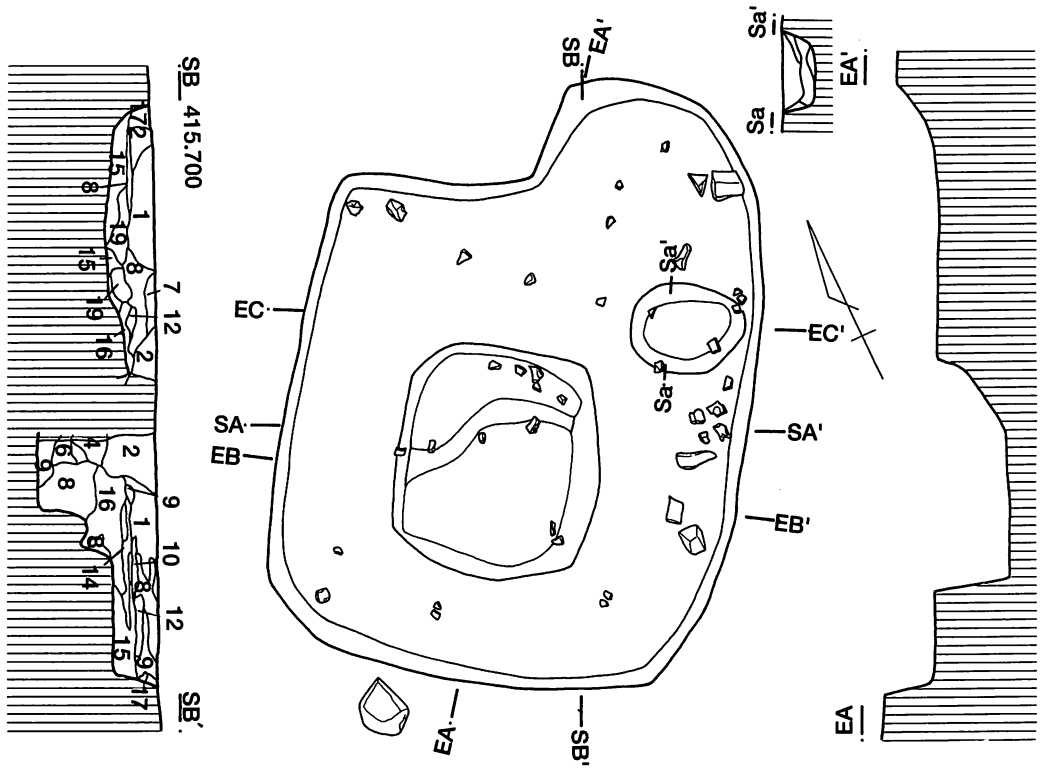
1　暗褐色粘質土で、焼土・カーボンわずかに含む。

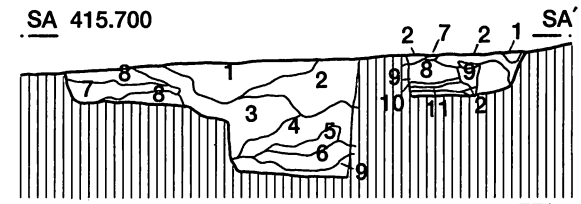
2　黄褐色粘質土で焼土・カーボン多く含む

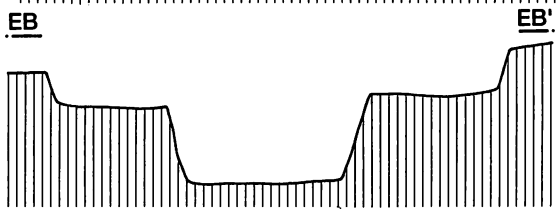
3　黄褐色粘質土。

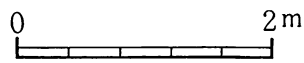
4　黒褐色粘質土。

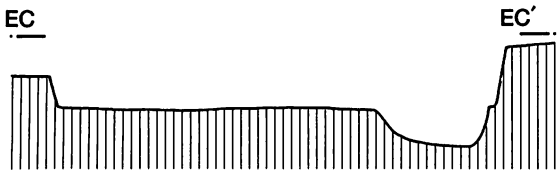
第14図　第12号住居跡・同カマド平面図











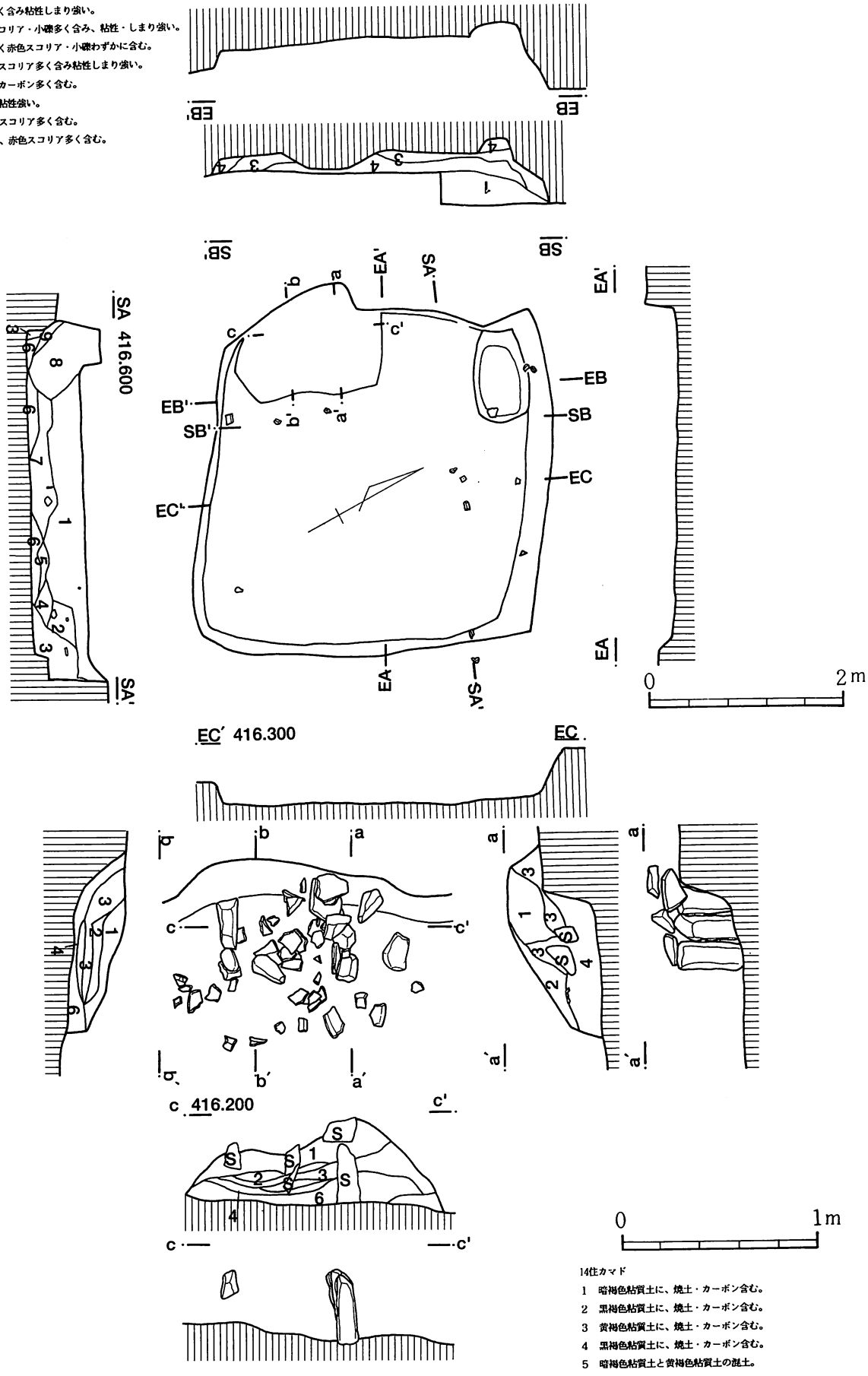
13住

1　暗褐色粘質土で暗く、小礫・赤色スコリアわずかに含む。
2　1と同じであるがカーボン・焼土含み、しまり強い。
3　1よりやや明るくカーボン含む。
4　2より暗くしまり弱い。
5　4よりやや明るい。
6　5に黄褐色粘質土が混ざる。
7　3に黄褐色粘質土で粘質土がわずかに含む。
8　黄褐色粘質土で赤色スコリア多く含み、しまり強い。
9　8に6が少し混ざりしまり弱い。
10　黒褐色粘質土でカーボン含み粘性強い。
11　黄褐色粘質土に焼土が混ざる。
12　黄褐色粘質土。
13　黒褐色粘質土でやや暗い。
14　13と同じであるが、粘性強い。
15　暗褐色粘質土で明るく赤色スコリアわずかに含みしまり強い。
16　15に8が混ざる。
17　16より明るくしまり弱い。
18　焼土に10が混ざる。
19　10に11が混ざる。

第15図　第13号住居跡・同カマド平面図

14住

1　暗褐色粘質土で小礫多く含み粘性しまり強い。
2　暗褐色粘質土で赤色スコリア・小礫多く含み、粘性・しまり強い。
3　暗褐色粘質土でやや暗く赤色スコリア・小礫わずかに含む。
4　黒褐色粘質土で、赤色スコリア多く含み粘性しまり強い。
5　暗褐色粘質土で焼土・カーボン多く含む。
6　黄褐色粘質土でしまり粘性強い。
7　3と同じ機成で、赤色スコリア多く含む。
8　1と同じ機成であるが、赤色スコリア多く含む。



14住カマド

1　暗褐色粘質土に、焼土・カーボン含む。
2　黒褐色粘質土に、焼土・カーボン含む。
3　黄褐色粘質土に、焼土・カーボン含む。
4　黒褐色粘質土に、焼土・カーボン含む。
5　暗褐色粘質土と黄褐色粘質土の混土。

第16図　第14号住居跡・同カマド平面図

径1.2m、短径1.0mの不整円形を呈する。深さ0.2mを測る。ピット11は、長径0.4m、短径0.35mの楕円形を呈し、深さ0.25mを測る。ピット12は、直径0.35mの円形を呈し、深さ0.4mを測る。ピット13は長径0.45m、短径0.4mほぼ円形を呈し、深さ0.36mを測る。本住居跡も、第９号住居跡と同様に出土遺物や炉・カマドといった施設は全く認められず、住居跡の可能性は低いと思われる。

◎第12号住居跡（第14図）

I－18・19、J－18・19グリッドに位置する。一辺が4.2mの隅丸正方形を呈する。住居内壁際には周溝が南東壁中央部で途切れるほかは全周する。周溝の規模は、幅0.25m、深さ0.1mを測る。壁は、0.3m程の高さで立ち上がる。床面は、全体的に踏み固められており、良好である。カマドは西側のコーナー付近に構築されており、残存状態は良くない。また、住居内には長径1.5m、短径1.0m、深さ0.5mの楕円形を呈する土坑が検出されている。

◎第13号住居跡（第15図）

I－22、J－22グリッドに位置する。長辺3.8m、短辺3.6mの不定形を呈する。床面は、良好な安定した床面は確認できなかった。壁高は、約0.25m程で緩やかに立ち上がる。カマドは、検出されていないものの、住居跡北東コーナー付近に、焼土・カーボンが散在していることから、おそらく北側壁付近に構築されていたと思われる。住居跡中央には本住居跡に伴うものかは判断できないが、長辺1.8m、短辺1.7mを測る土坑が検出されている。土層観察からすると、住居跡が存在していた後に、土坑を構築したとおもわれる。

◎第14号住居跡（第16図）

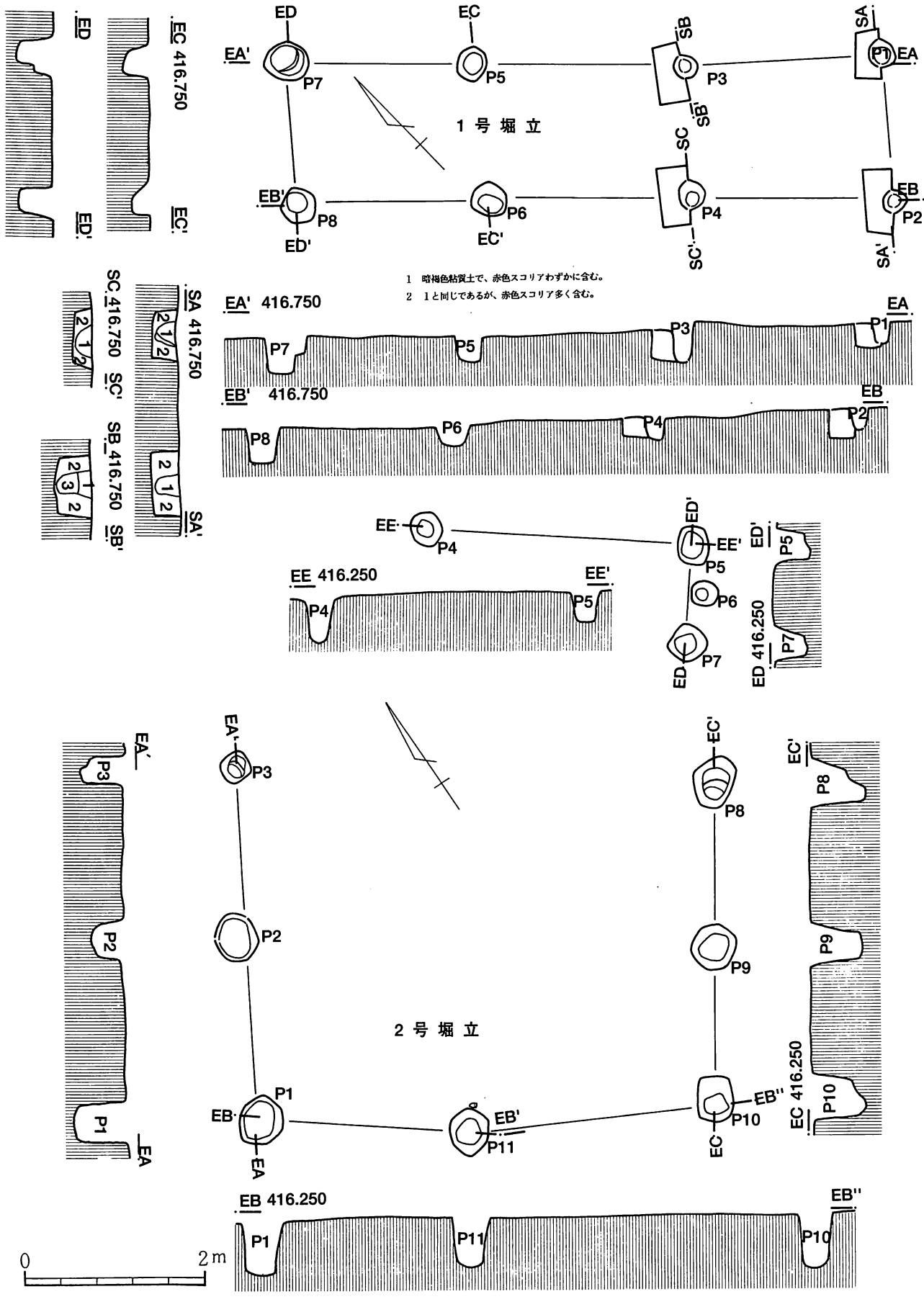
J－20・21グリッドに位置する。住居跡の規模は、一辺が3.6mの隅丸正方形を呈する。壁は約0.2m程で垂直に立ち上がる。床面の状態は、全体的に軟弱で張り床などの踏み固められた状況は検出できなかった。カマドは、住居跡西側壁に構築されており、袖石は右側についてしっかり残存しているが、左側については残存状態は良くない。住居跡北側コーナーに長径0.95m、短径0.5mの楕円形を呈し深さ0.2mを呈する土坑が検出されている。

第２節　掘立柱建物跡・柵列

本遺跡から、掘立柱建物跡及び柵列と思われる遺構が８棟検出されている。ほとんどの遺構から出土遺物は検出されておらず、詳細な遺構の性格及び時代・時期などは不明であるが、黒色土を掘り込んでおり、本遺跡の黒色土を掘り込んでいる遺構は、主に平安時代の住居跡が検出されていることから掘立柱建物跡もおそらく概期の遺構と考えられる。以下、各遺構の概要を説明する。

◎第１号掘立柱建物跡（第17図）

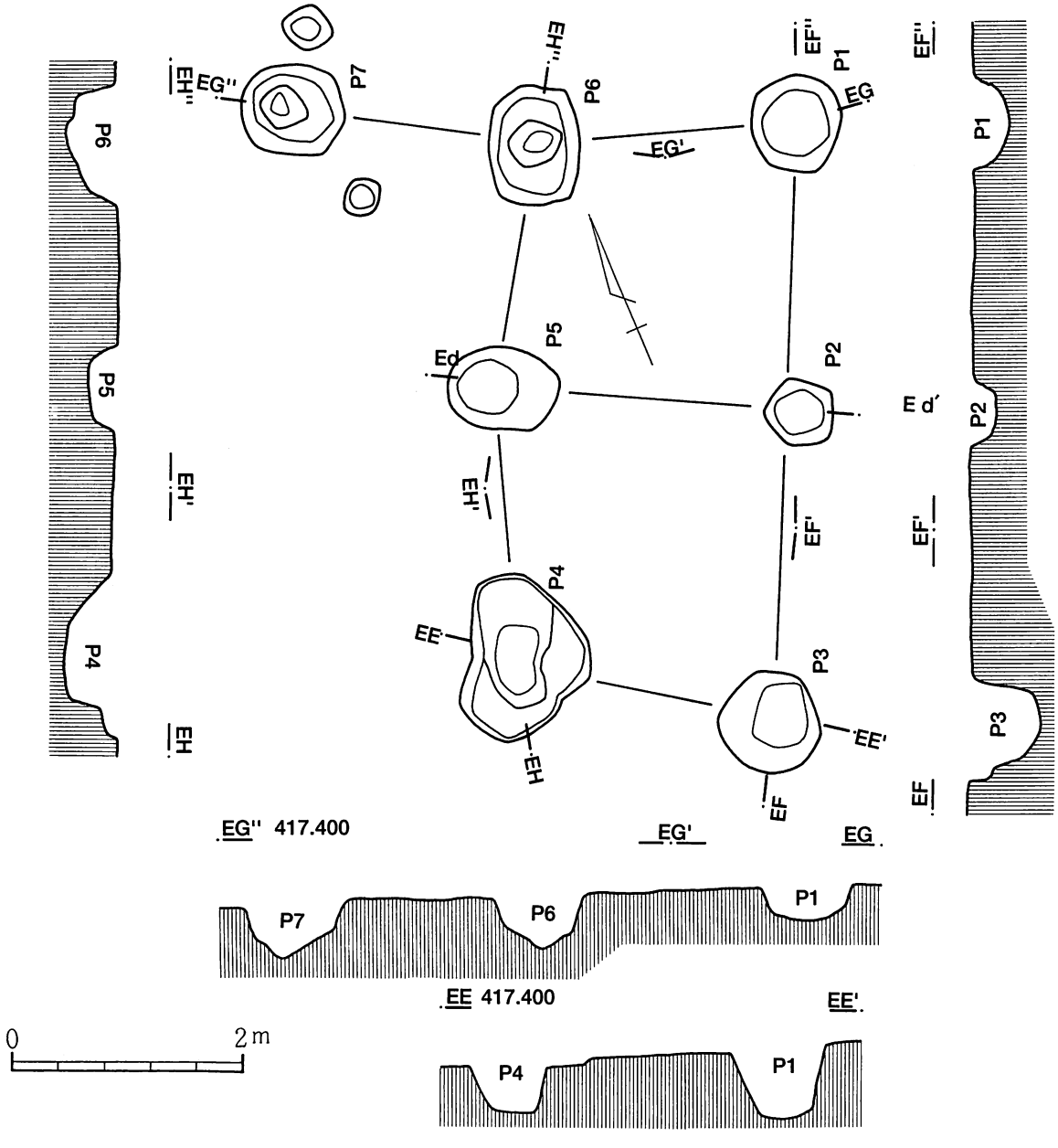
G－３・４、H－３・４グリッドに位置する。長軸は北西～南東に6.7m、短軸は北東～南西に1.6mを測る。各ピット間の距離は、長軸方向のピット５と７が2.1m、ピット１と３、ピット６と８が2.2m、ピット２と４、ピット４と６が2.25m、ピット３と５が2.4mを測る。短軸方向のピット間の距離は、ピット３と４が1.5m、ピット５と６、ピット７と８が1.6m、ピット１と２が1.65mを測る。各柱穴の規模は、ピット１が直径0.25m、深さ0.25mを測る。ピット２は、直径0.25m、深さ0.35m。ピット３は、直径0.25m、深さ0.4m。ピット４は、直径0.25m、深さ0.23m。ピット５は、長径0.35m、短径0.3m、深さ0.28m。ピット６は、長径0.4m、短径0.35m、深さ0.2m。ピット７は、直径0.45m、深さ0.4m。ピット８は、長径0.45m、短径0.4m、深さ0.4mを測る。ピットの平面形は、円形もしくは楕円形を呈する。遺構は、黒色土を掘り込んでいるため平安時代もしくはそれ以降の所産と考えられる。建物内からの出土遺物は全く見られなかった。



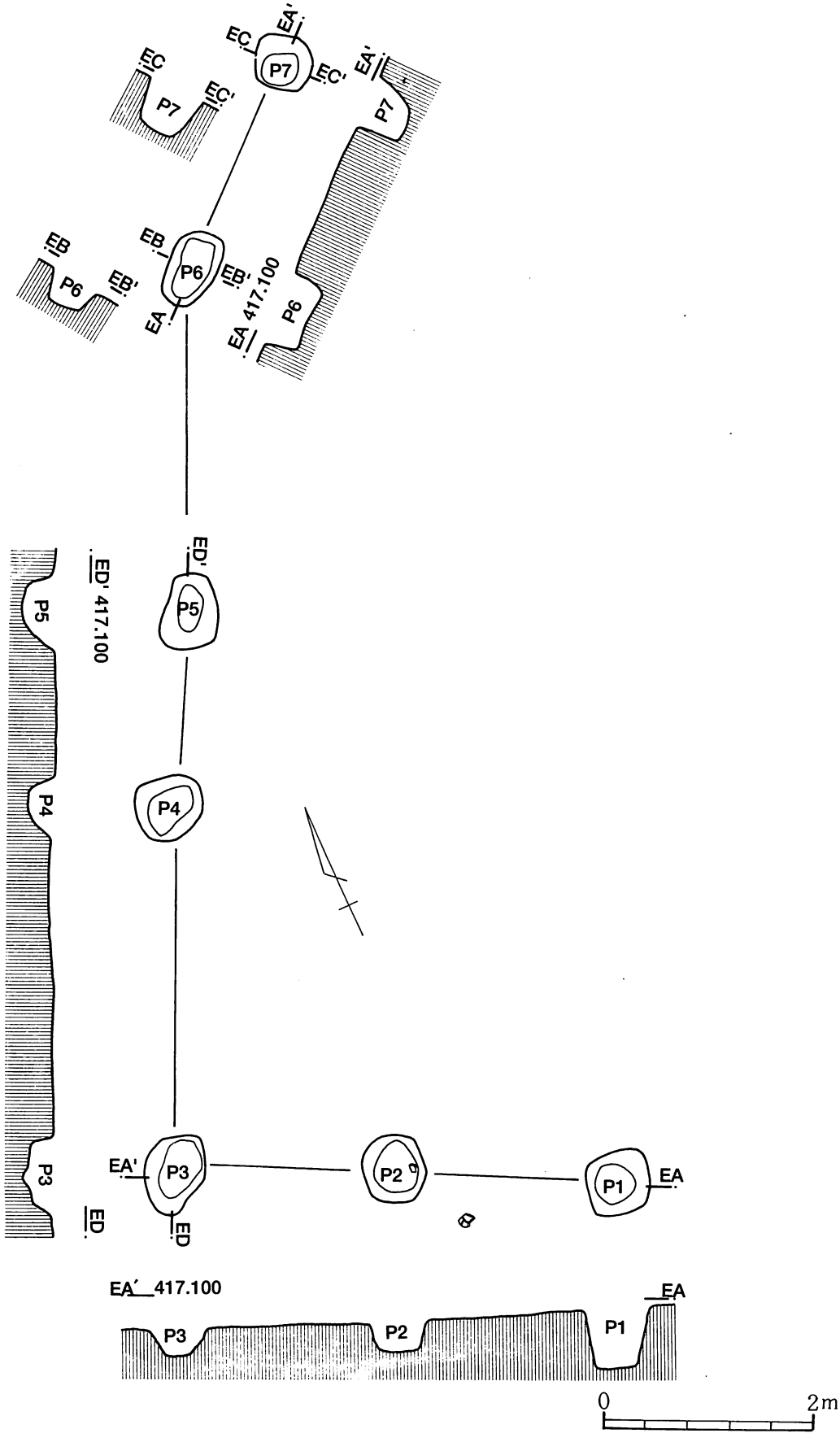
第17図　第１号・２号掘立柱建物跡

◎第２号掘立柱建物跡（第17図）

F－５・６・７、G－５・６グリッドに位置する。長軸は北東～南西方向に6.65m、短軸は南東～北西方向に5.3mを測る。各ピット間の距離は、ピット１と２が2.0m、ピット２と３が1.9m、ピット４と５が3.0m、ピット５と７が1.1m、ピット８と９が1.8m、ピット９と10が1.75m、ピット10と11が2.8m、ピット11と１が2.35mを測る。各柱穴の規模は、ピット１が長径0.5m、短径0.45m、深さ0.6m。ピット２はピット北側が試掘調査時に削平してしまったため、不明であるが、長径0.55m、短径0.45m、深さ0.34m。ピット３は直径0.35m、深さ0.47m。ピット４は長径0.38m、短径0.35m、深さ0.45m。ピット５は長径0.45m、短径0.35m、深さ0.38m。ピット６は直径0.3m、深さ0.37m。ピット７は直径0.4m、深さ0.36m。ピット８は長径0.58m、短径0.45m、深さ0.60m。ピット９は直径0.5m、深さ0.68m。ピット10は長径0.6m、短径0.5m、深さ0.6m。ピット11は長径0.5m、短径0.4m、深さ0.5mを測り、各ピットの平面形は円形もしくは楕円形を呈する。建物内からの出土遺物は全く見られず、黒色土を掘り込んでいるため平安時代もしくはそれ以降に位置づけられると思われる。



第18図　第３号掘立柱建物跡



第19図　第４号掘立柱建物跡・柵列

◎第３号掘立柱建物跡（第18図）

I－９・10、J－９・10グリッドに位置する。長軸は北東～南西方向に5.25m、短軸は南東～北西方向に4.5mを測る方形を呈すると思われる。現存でピットは７本確認されているが、西側に２本あったものと思われ合計９本存在していたものと思われる。各ピット間の距離は、ピット１と２が2.5m、ピット２と３が2.7m、ピット４と５が2.4m、ピット５と６が2.15m、ピット１と６が2.3m、ピット２と５が2.75m、ピット３と４が2.4m、ピット６と７が2.75mを測る。各ピットの規模は、ピット１が長径0.85m、短径0.80m、深さ0.35m。ピット２が直径0.6m、深さ0.25m。ピット３が長径0.9m、短径0.85m、深さ0.65m。ピット４が長径1.45m、短径1.1m、深さ0.50m。ピット５は長径0.95m、短径0.70m、深さ0.28m。ピット６は長径1.05m、短径0.8m、深さ0.38mでピット内部には長径0.5m、短径0.4m、深さ0.1mを測る小ピットが見られる。各ピットの平面形は円形または楕円形を呈する。本遺構も黒色土を掘り込んでいるため、平安時代もしくはそれ以降に属する遺構と思われる。建物内からの出土遺物は全く見られない。

◎第４号掘立柱建物跡（第19図）

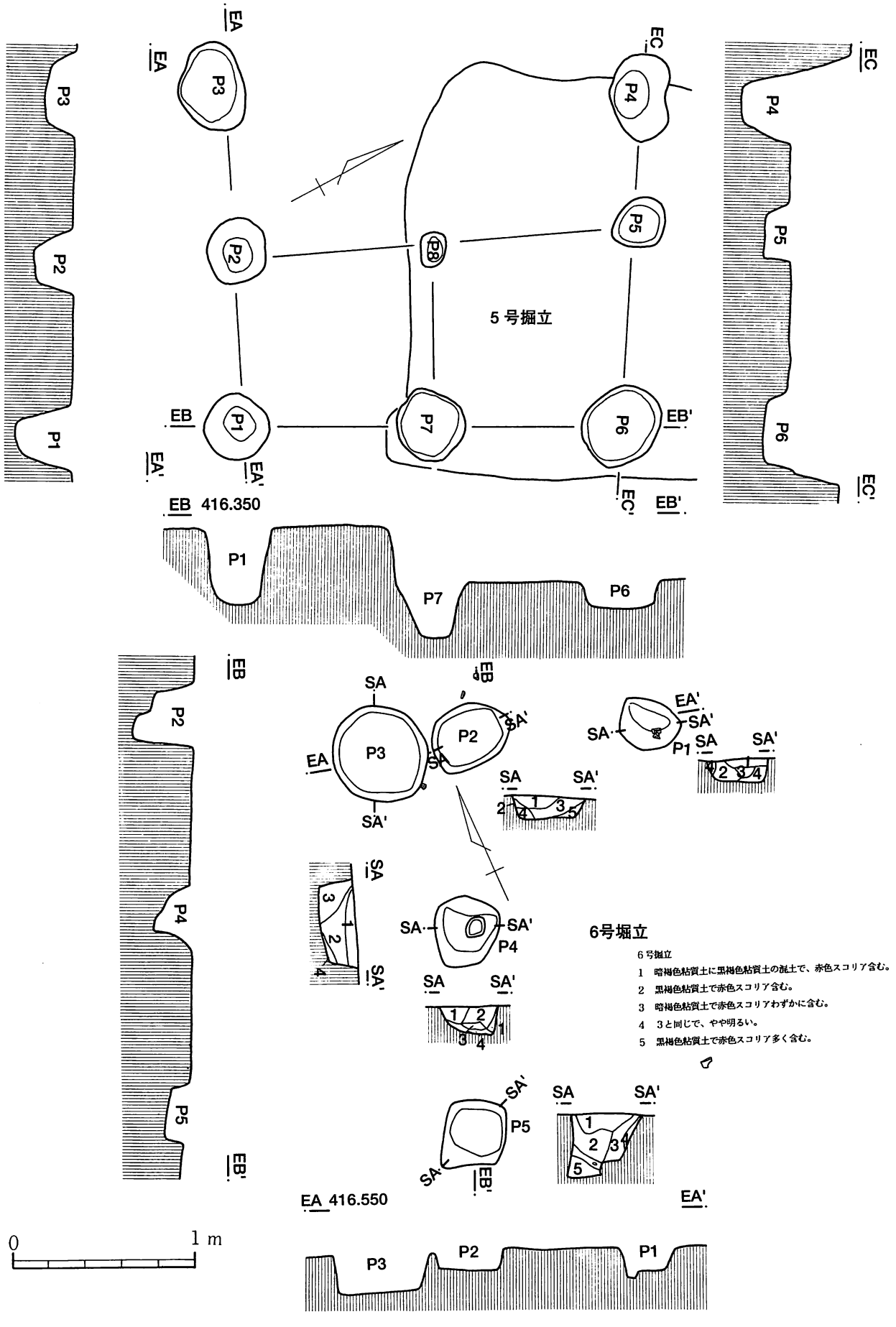
I－12・13・14、J－12グリッドに位置する。掘立柱建物跡としているが、本遺構はL字状に並ぶ柵列である。長軸は北東～南西方向に11.2m、短軸は南東～北西方向に4.3mを測る。各柱穴間は、ピット１と２が2.2m。ピット２と３が2.1m。ピット３と４が3.6m。ピット４と５が2.0m。ピット５と６が3.3m。ピット６と７が2.2mを測る。各柱穴の規模は、ピット１は長径0.75m、短径0.6m、深さ0.7m。ピット２は長径0.65m、短径0.6m、深さ0.3m。ピット３は長径0.8m、短径0.6m、深さ0.25m。ピット４は長径0.7m、短径0.6m、深さ0.4m。ピット５は長径0.75m、短径0.5m、深さ0.35m。ピット６は長径0.75m、短径0.5m、深さ0.42m。ピット７は長径0.6m、短径0.55m、深さ0.45mを測る。各ピットの形態は、楕円形及び円形を呈する。前にも述べたが掘立柱建物跡として扱っているが、L字状に成っているためおそらく柱穴列と考えられる。時期は、黒色土を掘り込んでいるため平安時代もしくはそれ以降の所産と考えられる。

◎第５号掘立柱建物跡（第20図）

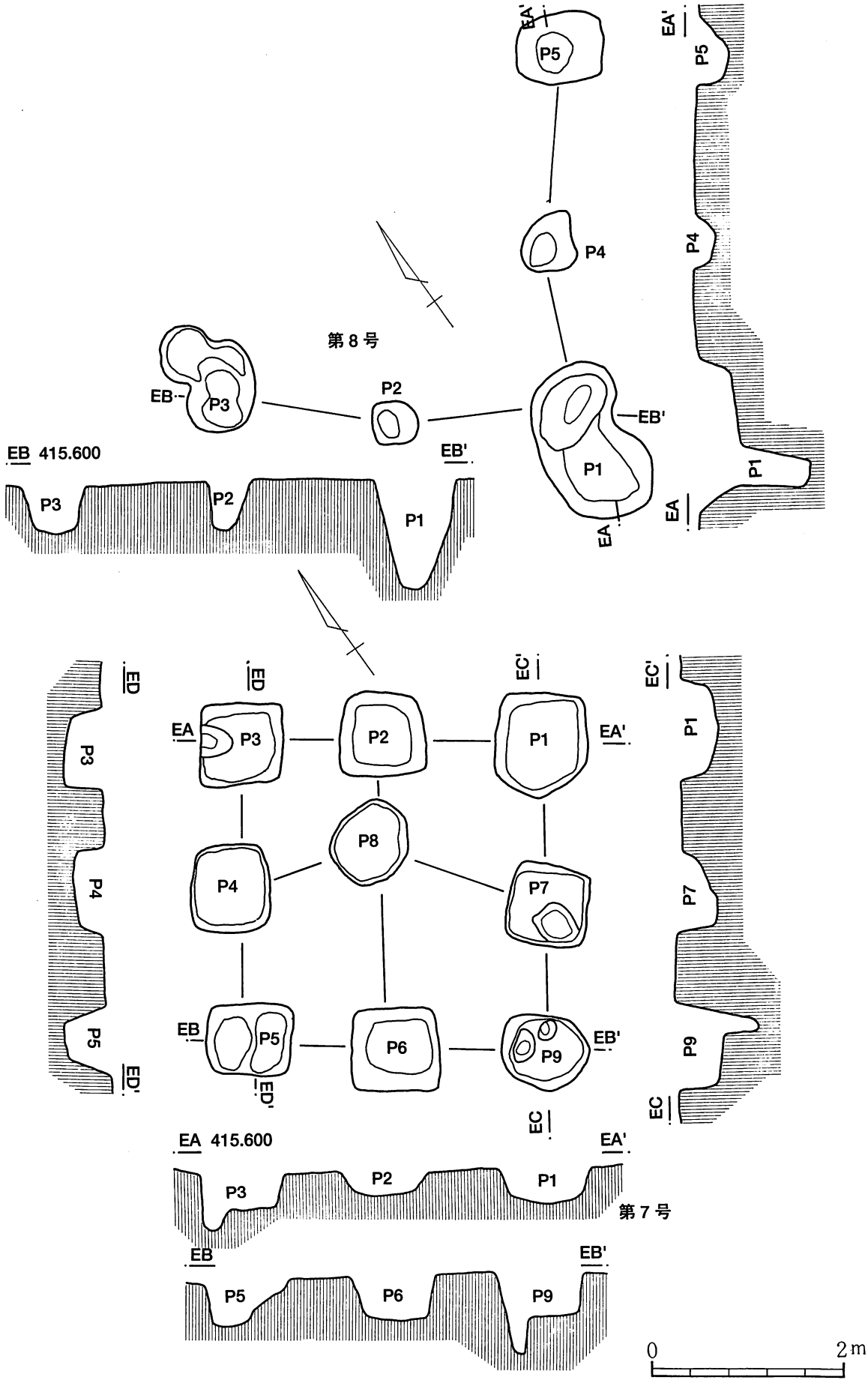
F－12・13グリッドに位置する。長軸が北東～南西4.3m、短軸が南東～北西に3.7mを測る。ピットは８本確認されているが、中心部にあるピット８は他の柱穴に比べて小型である。各ピット間の距離は、ピット１と２が1.9m。ピット２と３が2.0m。ピット４と５が1.4m。ピット５と６が2.3m。ピット６と７が2.3m。ピット７と１が2.1m。ピット２と８が2.2m。ピット８と５が2.3m。ピット７と８が2.0mを測る。各ピットの規模は、ピット１が直径0.7m、深さ0.64m。ピット２が直径0.7m、深さ0.46m。ピット３が長径0.95m、短径0.70m、深さ0.35m。ピット４が長径1.0m、短径0.75m、深さ0.5m。ピット５が長径0.65m、短径0.55m、深さ0.4m。ピット６が長径0.95m、短径0.8m、深さ0.45m。ピット７が長径0.8m、短径0.75m、深さ0.7m。ピット８が長径0.4m、短径0.3m、深さ0.25mを測る。本遺構は、５号住居跡と重複している。５号住居跡の張り床が本遺構のピット部分には検出されていないため５号住居跡（９世紀第２四半期）より新しいものと思われる。

◎第６号掘立柱建物跡（第20図）

H－19、I－19グリッドに位置する。本遺構も掘立柱建物跡としているが、ピットがT字状を呈しており柵列の可能性が大きい。各ピット間の距離は、ピット１と２が2.0m、ピット２と３が2.0m、ピット２と４が2.1m、ピット４と５が2.25mを測る。各ピットの規模は、ピット１が長径0.7m、短径0.55m、深さ0.4m。ピット２は長径0.9m、短径0.7m、深さ0.26m。ピット３は長径1.1m、短径1.0m、深さ0.47m。ピット４は長径0.8m、短径0.7m、深さ0.4m。ピット５は長径0.95m、短径0.7m、深さ0.7mを測る。時期は、黒色土を掘り込んでいるため平安時代もしくはそれ以降に属すると思われる。



第20図　第５号・６号掘立柱建物跡・柵列



第21図　第７号・第８号掘立柱建物跡・柵列

◎第７号掘立柱建物跡（第21図）

H－20・21グリッドに位置する。本遺構のピット数は９基確認されている。ほぼ一辺が3.3m程の方形を呈する建物である。各ピット間の距離は、ピット１と２が1.75m。ピット２と３が1.5m。ピット３と４が1.5m。ピット４と５が1.5m。ピット５と６が1.5m。ピット６と９が1.6m。ピット９と７が1.5m。ピット７と１が1.75m。ピット２と８が1.2m。ピット８と６が2.2m。ピット４と８が1.5m。ピット８と７が2.0mを測る。各ピットの規模は、ピット１が長径1.1m、短径0.95m、深さ0.4m。ピット２が長径0.9m、短径0.85m、深さ0.35m。ピット３は長径0.9m、短径0.85m、深さ0.4m。ピット４は長径0.95m、短径0.85m、深さ0.3m。ピット５は長径0.9m、短径0.7m、深さ0.55m。ピット６は長径0.95m、短径0.85m、深さ0.6m、ピット７は一辺が0.85m、深さ0.45m。ピット８は長径0.9m、短径0.75m、深さ0.12m。ピット９は長径0.95m、短径0.8m、深さ0.5mを測りピット内には２基の小ピットが見られる。本遺構も、出土遺物は全く見られず黒色土を掘り込んでいるため平安時代もしくはそれ以降の所産と思われる。

◎第８号掘立柱建物跡（第21図）

H－21・22、I－21・22グリッドに位置する。本遺構も掘立柱建物跡として報告しているが、逆L字形を呈する柱穴列と考えられる。北東～南西方向に4.3m、南東～北西に3.8mを測る。各柱穴間の距離は、ピット１と２が2.0m。ピット２と３が1.8m。ピット１と４が2.2m。ピット４と５が2.1mを測る。各柱穴の規模は、ピット１が長径1.0m、短径0.65m、深さ1.18m。ピット２が直径0.45m、深さ0.54m。ピット３が長径0.8m、短径0.7m、深さ0.5m。ピット４が長径0.6m、短径0.55m、深さ0.25m。ピット５が長径0.95m、短径0.7m、深さ0.3mを測る。本遺構も、遺物の出土は見られなかった。

第３節　土　　坑（第22図～第28図）

本遺跡から検出された土坑は、合計63基確認されている。この中には、縄文時代と考えられる陥し穴も見られる。また、黒色土を掘り込むおそらく平安時代のもの及び、それ以降と考えられる土坑や、ローム層を掘り込んでいる縄文時代前期～後期と考えられる土坑もこの中に含まれる。62基以外にも縄文時代前期の集石土坑や近世の墓壙も検出されているが、これらは個別に番号をつけているため含まれない。詳細は「（第１表）土坑一覧表」を参照とされたい。

第４節　集石土坑（第22・第29図）

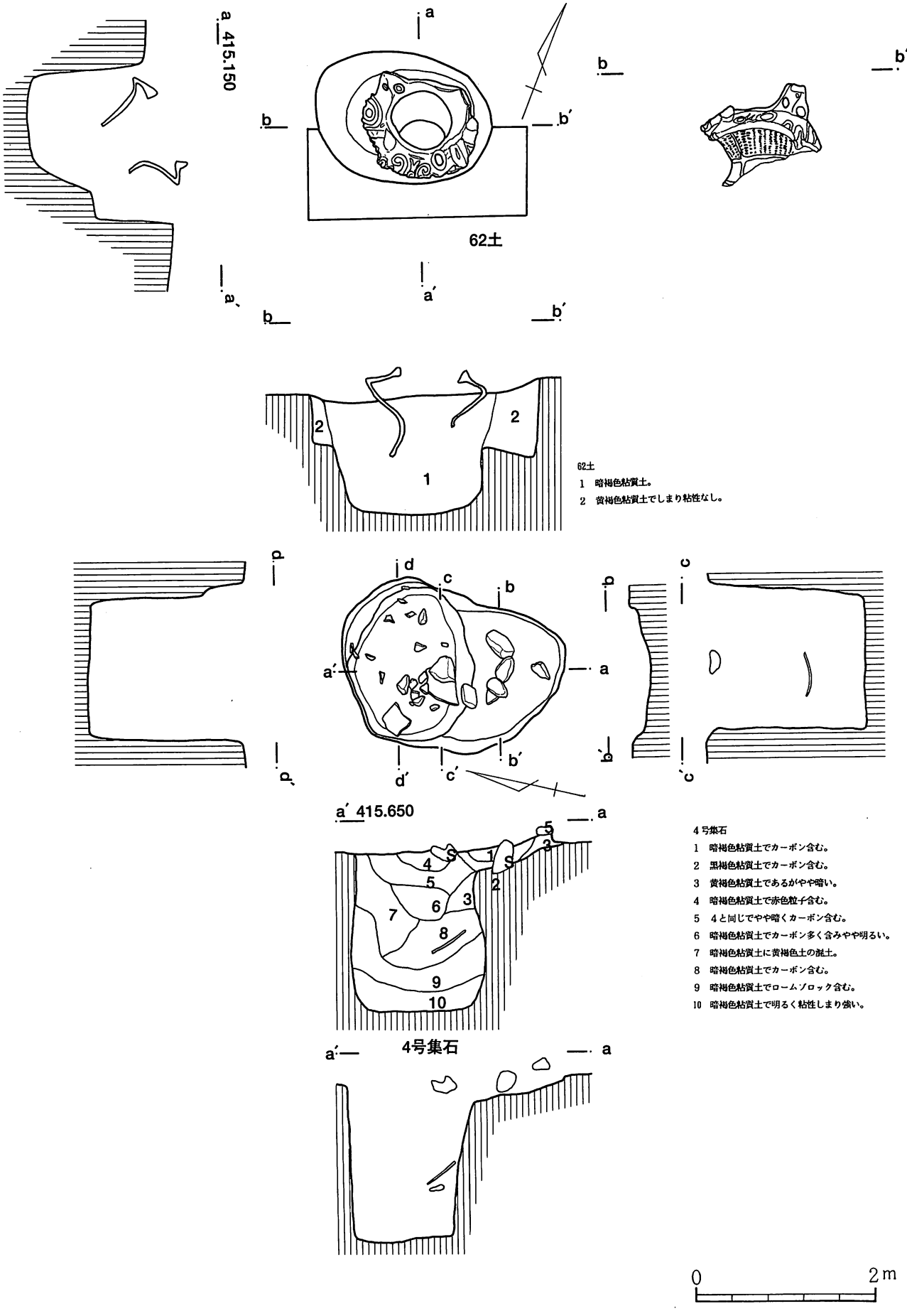
本遺跡から検出された集石土坑は４基確認されている。そのうち、第３号集石土坑からは、縄文時代前期末諸磯ｃ式の土器片が出土している。また、第４号集石土坑は、プラン確認時に集石土坑と判断したが礫は上面にのみしかみられず、土坑下半から縄文時代前期諸磯ｂ式期の深鉢が出土している。以下、個々の遺構について概要を記す。

◎第１号集石土坑（第29図）

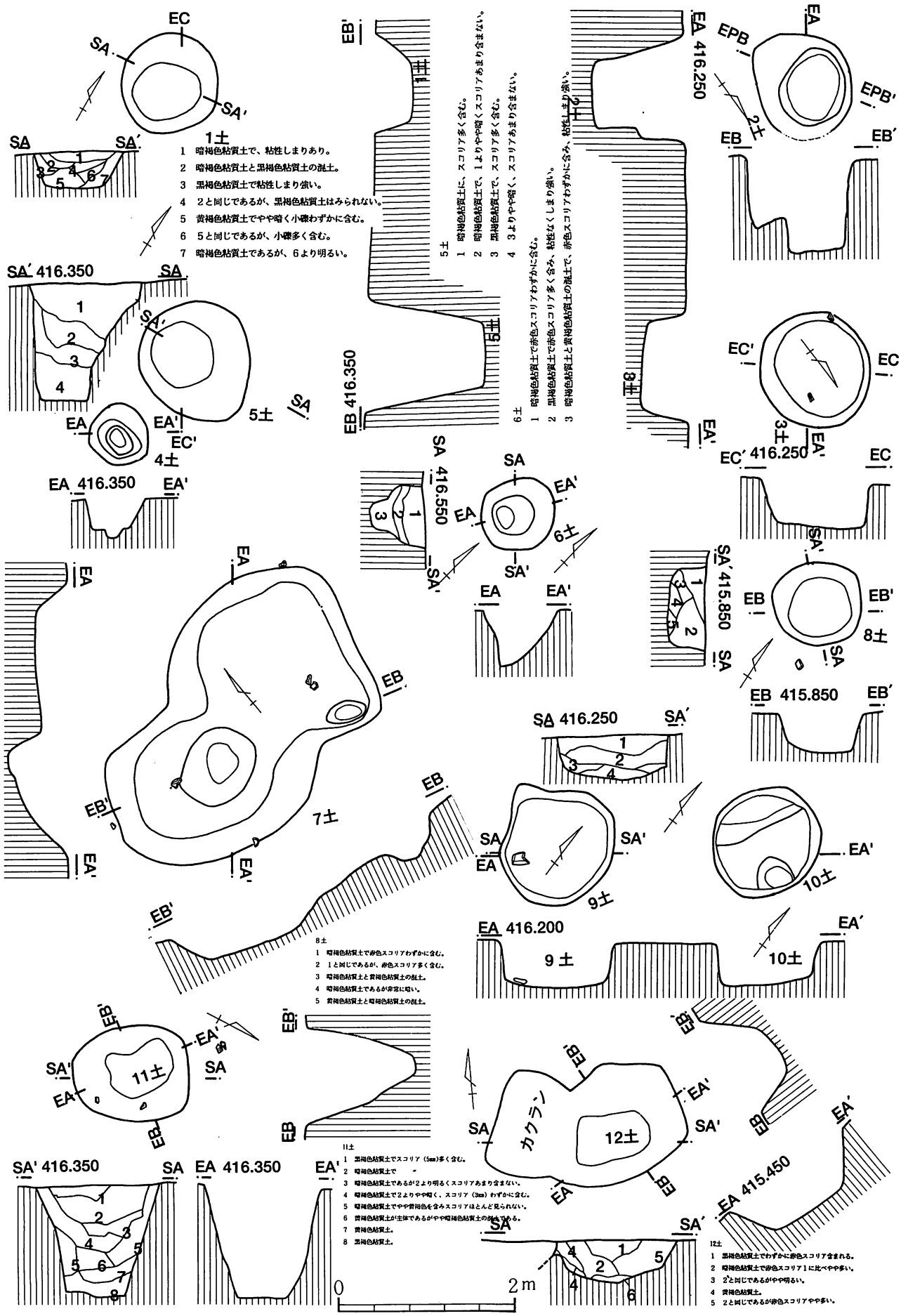
D－７グリッドに位置する。長径0.9m、短径0.85mのほぼ円形を呈し、深さ0.2mを測る。断面は鍋状を呈し、底面は丸形を呈する。礫は、土坑北側部分に集中し、10㎝～20㎝大のものが40点ほど土坑上面から底面に至るまで覆土中から検出されている。覆土は、暗褐色粘質土を呈し、カーボンが多く含まれる。時代・時期はローム層を掘り込んでいるため、縄文時代とおもわれるが、土器片など全く見られないため詳細な時期は不明である。

◎第２号集石土坑（第29図）

H－７グリッドに位置する。長径1.0m、短径0.9mの不整円形を呈し、深さ0.15mを測る。断面は、第１号集石



第22図　第62号土坑・第４号集石土坑平面図


1土
1 暗褐色粘質土で、粘性しまりあり。
2 暗褐色粘質土と黒褐色粘質土の混土。
3 黒褐色粘質土で粘性しまり強い。
4 2と同じであるが、黒褐色粘質土はみられない。
5 黄褐色粘質土でやや暗く小礫わずかに含む。
6 5と同じであるが、小礫多く含む。
7 暗褐色粘質土であるが、6より明るい。
5土
1 暗褐色粘質土に、スコリア多く含む。
2 暗褐色粘質土で、1よりやや暗くスコリアあまり含まない。
3 黒褐色粘質土で、スコリア多く含む。
4 3よりやや暗く、スコリアあまり含まない。
6土
1 暗褐色粘質土で赤色スコリアわずかに含む。
2 黒褐色粘質土で赤色スコリア多く含み、粘性なくしまり強い。
3 暗褐色粘質土と黄褐色粘質土の混土で、赤色スコリアわずかに含み、粘性しまり強い。
8土
1 暗褐色粘質土で赤色スコリアわずかに含む。
2 1と同じであるが、赤色スコリア多く含む。
3 暗褐色粘質土と黄褐色粘質土の混土。
4 暗褐色粘質土であるが非常に暗い。
5 黄褐色粘質土と暗褐色粘質土の混土。
11土
1 黒褐色粘質土でスコリア（5mm）多く含む。
2 暗褐色粘質土で 〃
3 暗褐色粘質土であるが2より明るくスコリアあまり含まない。
4 暗褐色粘質土で2よりやや暗く、スコリア（3mm）わずかに含む。
5 暗褐色粘質土でやや黄褐色を含みスコリアはとんど見られない。
6 黄褐色粘質土が主体であるがやや暗褐色粘質土の混土である。
7 黄褐色粘質土。
8 黒褐色粘質土。
12土
1 黒褐色粘質土でわずかに赤色スコリア含まれる。
2 暗褐色粘質土で赤色スコリア1に比べやや多い。
3 2と同じであるがやや明るい。
4 黄褐色粘質土。
5 2と同じであるが赤色スコリアやや多い。
カクラン
0
2m

第23図　土坑平面図（1）

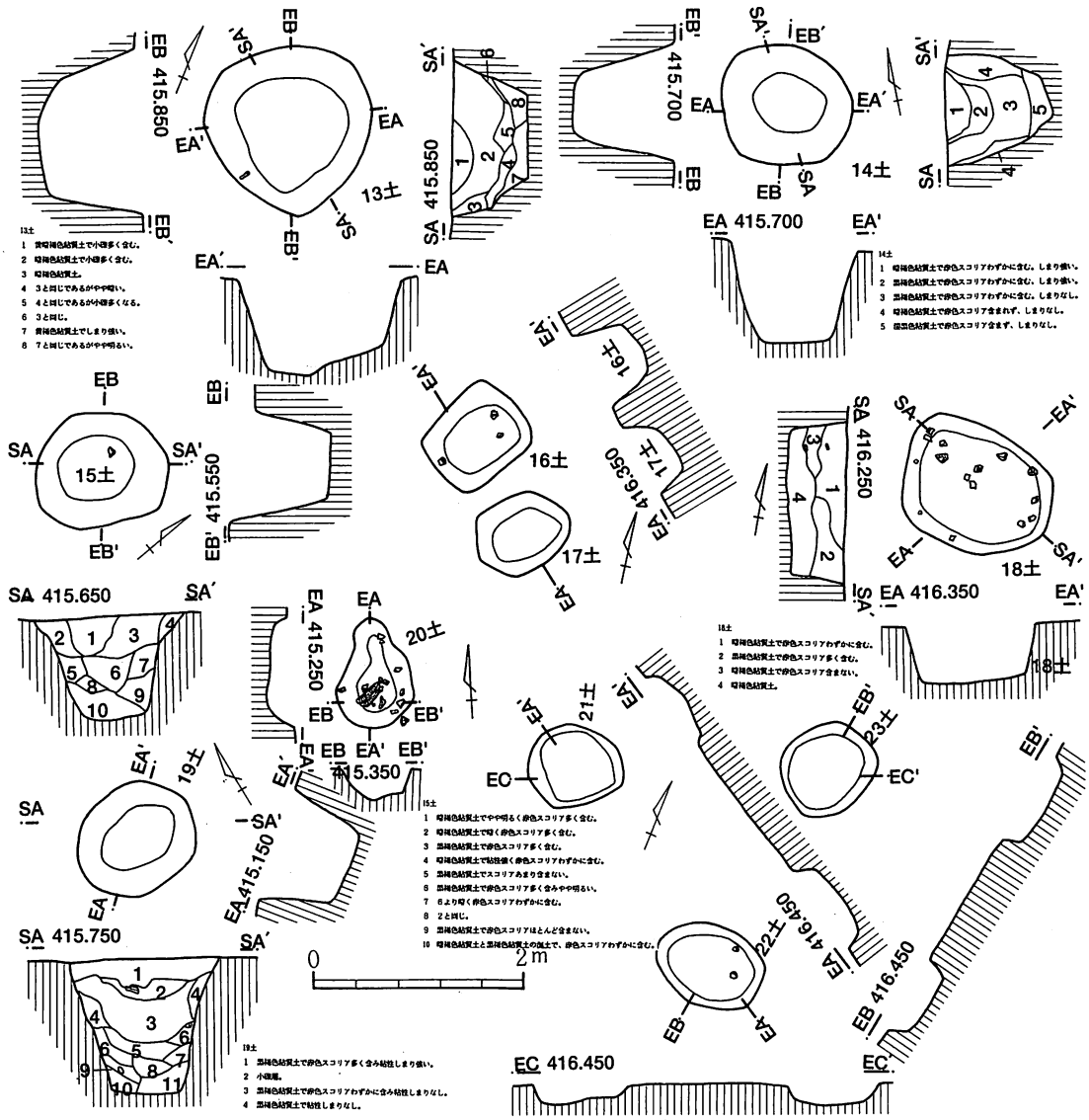
土坑同様鍋状を呈し、底面はやや丸底になる。礫は、ほぼ土坑全面に広がり土坑上面に集中している。礫の大きさは10cm～15cm大の大きさで150点ほど検出されている。覆土中には、カーボンが多く見られる。土器片は１点出土している。

◎第３号集石土坑（第29図）

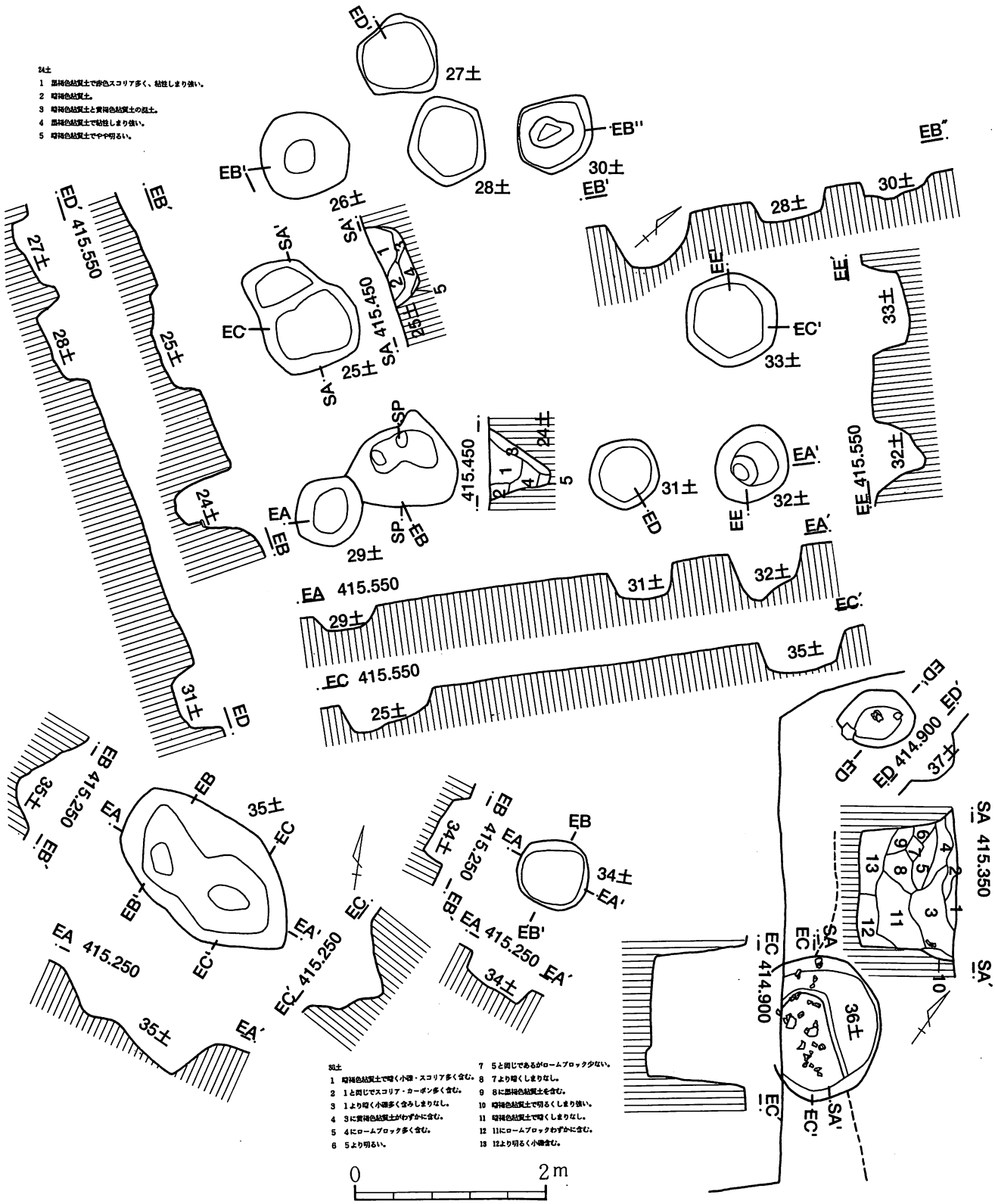
E－９グリッドに位置する。長径1.1m、短径0.8mの楕円形を呈し、深さ0.28mを測る。断面はすり鉢状になり底面は極端に丸形を呈する。礫は、５cm～22cm大のものが、土坑全体を覆い、土坑上面から底面まで145点が出土している。覆土中には、焼土・カーボンが多く含まれており、土器片も土坑覆土中から13点出土している。その中で縄文時代前期末の諸磯c式期の結節状浮線文が施されるものや、円形貼付文が施されるものが中心として細片ながら出土している。

◎第４号集石土坑（第22図）

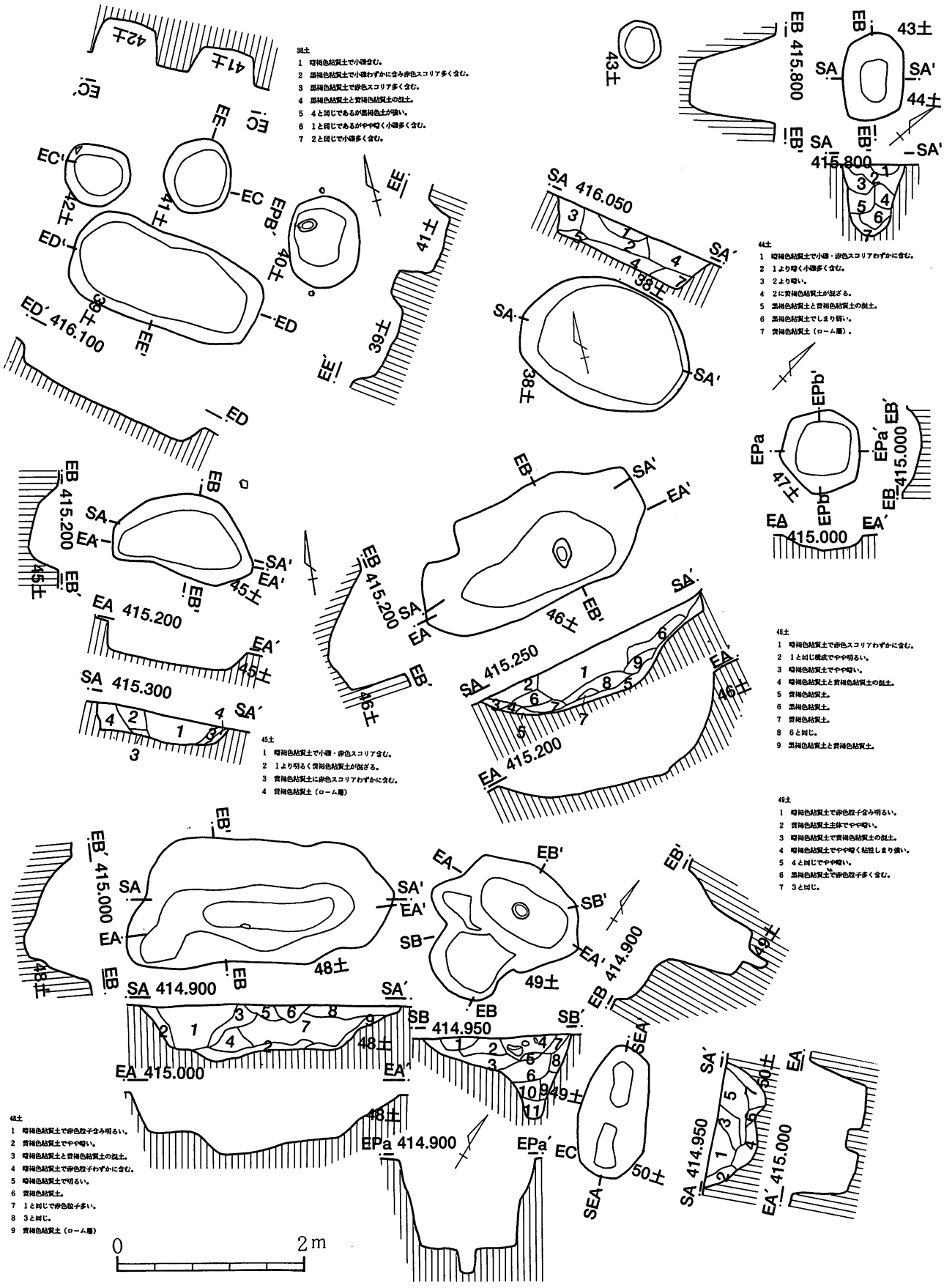
E－５グリッドに位置する。長径1.25m、短径0.82mの東西方向に細長い楕円形を呈し、深さ0.87mを測る。断面形は円筒形を呈し、底面は平底状を呈する。ここでは、集石土坑として報告しているが、礫が土坑上面に15点ほどしか検出されていないため、集石土坑の可能性は低い。本土坑から出土している土器は、諸磯b式期の上半部が出土している。



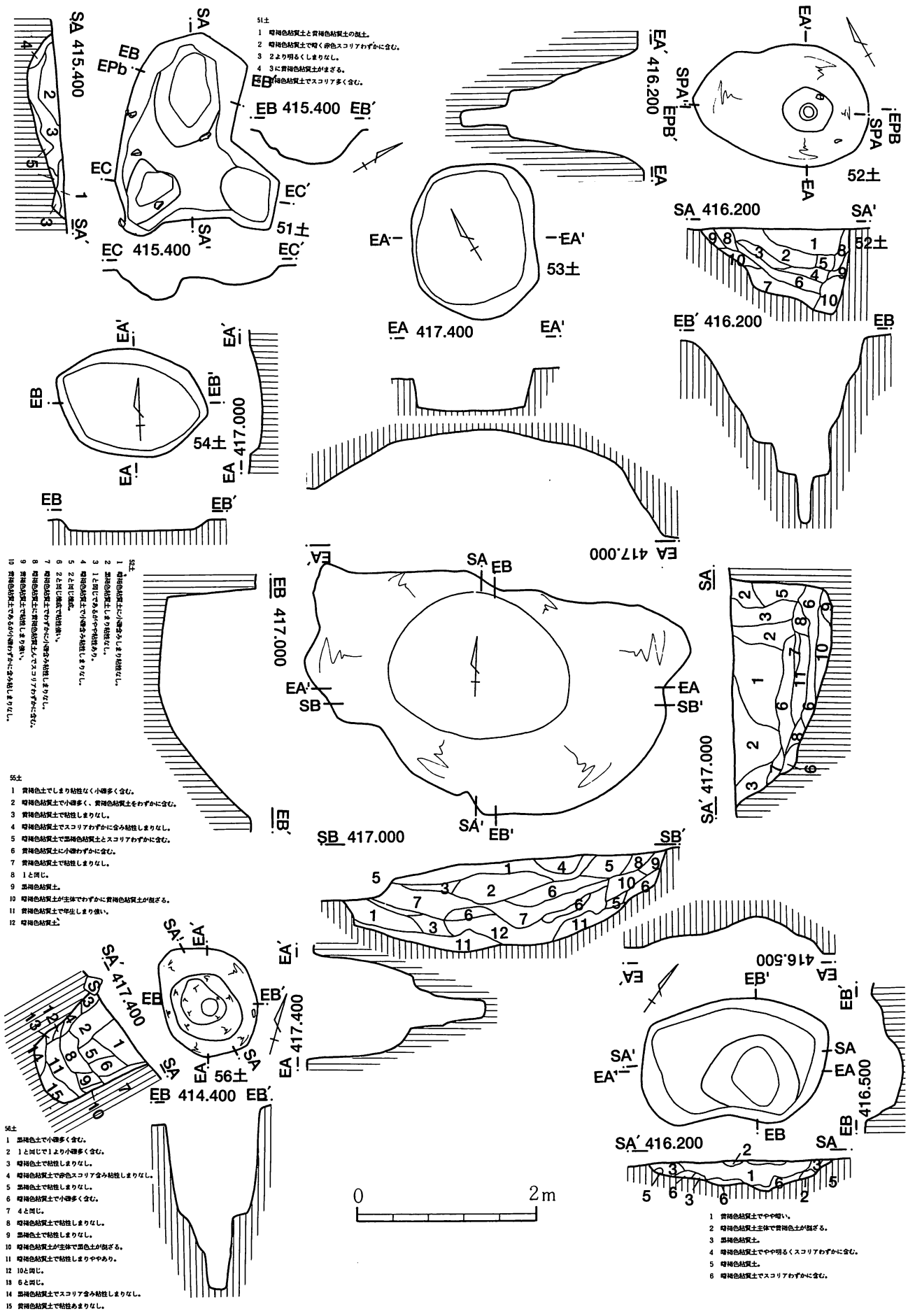
第24図　土坑平面図（2）


24土
1 黒褐色粘質土で赤色スコリア多く、粘性しまり強い。
2 暗褐色粘質土。
3 暗褐色粘質土と黄褐色粘質土の混土。
4 黒褐色粘質土で粘性しまり強い。
5 暗褐色粘質土でやや明るい。
36土
1 暗褐色粘質土で暗く小礫・スコリア多く含む。
2 1と同じでスコリア・カーボン多く含む。
3 1より暗く小礫多く含みしまりなし。
4 3に黄褐色粘質土がわずかに含む。
5 4にロームブロック多く含む。
6 5より明るい。
7 5と同じであるがロームブロック少ない。
8 7より暗くしまりなし。
9 8に黒褐色粘質土を含む。
10 暗褐色粘質土で明るくしまり強い。
11 暗褐色粘質土で暗くしまりなし。
12 11にロームブロックわずかに含む。
13 12より明るく小礫含む。
0
2m

第25図　土坑平面図 (3)


38土
1 暗褐色粘質土で小礫含む。
2 黒褐色粘質土で小礫わずかに含み赤色スコリア多く含む。
3 黒褐色粘質土で赤色スコリア多く含む。
4 黒褐色粘質土と黄褐色粘質土の混土。
5 4と同じであるが黒褐色土が強い。
6 1と同じであるがやや暗く小礫多く含む。
7 2と同じで小礫多く含む。
44土
1 暗褐色粘質土で小礫・赤色スコリアわずかに含む。
2 1より暗く小礫多く含む。
3 2より暗い。
4 2に黄褐色粘質土が混ざる。
5 黒褐色粘質土と黄褐色粘質土の混土。
6 黒褐色粘質土でしまり弱い。
7 黄褐色粘質土（ローム層）。
45土
1 暗褐色粘質土で小礫・赤色スコリア含む。
2 1より明るく黄褐色粘質土が混ざる。
3 黄褐色粘質土に赤色スコリアわずかに含む。
4 黄褐色粘質土（ローム層）
46土
1 暗褐色粘質土で赤色スコリアわずかに含む。
2 1と同じ機成でやや明るい。
3 暗褐色粘質土でやや暗い。
4 暗褐色粘質土と黄褐色粘質土の混土。
5 黄褐色粘質土。
6 黒褐色粘質土。
7 黄褐色粘質土。
8 6と同じ。
9 黒褐色粘質土と黄褐色粘質土。
49土
1 暗褐色粘質土で赤色粒子含み明るい。
2 黄褐色粘質土主体でやや暗い。
3 暗褐色粘質土で黄褐色粘質土の混土。
4 暗褐色粘質土でやや暗く粘性しまり強い。
5 4と同じでやや暗い。
6 黒褐色粘質土で赤色粒子多く含む。
7 3と同じ。
48土
1 暗褐色粘質土で赤色粒子含み明るい。
2 黄褐色粘質土でやや暗い。
3 暗褐色粘質土と黄褐色粘質土の混土。
4 暗褐色粘質土で赤色粒子わずかに含む。
5 暗褐色粘質土で明るい。
6 黄褐色粘質土。
7 1と同じで赤色粒子多い。
8 3と同じ。
9 黄褐色粘質土（ローム層）
0
2m

第26図　土坑平面図 (4)

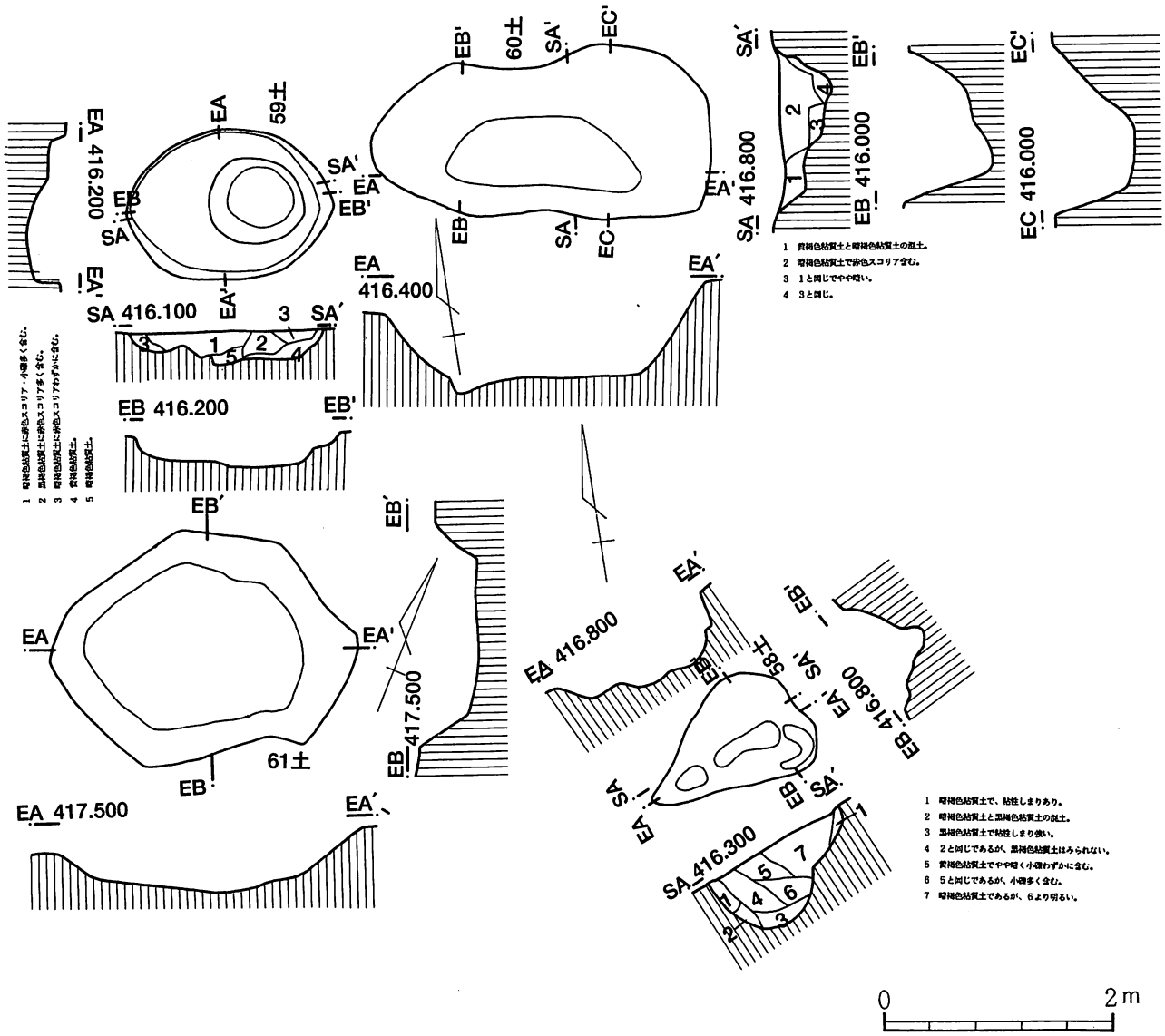

51土
1 暗褐色粘質土と黄褐色粘質土の混土。
2 暗褐色粘質土で暗く赤色スコリアわずかに含む。
3 2より明るくしまりなし。
4 3に黄褐色粘質土がまざる。
5 暗褐色粘質土でスコリア多く含む。
52土
1 黄褐色粘質土でやや暗い。
2 暗褐色粘質土主体で黄褐色土が混ざる。
3 黒褐色粘質土。
4 暗褐色粘質土でやや明るくスコリアわずかに含む。
5 暗褐色粘質土。
6 暗褐色粘質土でスコリアわずかに含む。
53土
54土
1 黒褐色土で小礫多く含む。
2 1と同じで1より小礫多く含む。
3 暗褐色土で粘性しまりなし。
4 暗褐色粘質土で赤色スコリア含み粘性しまりなし。
5 黒褐色土で粘性しまりなし。
6 暗褐色粘質土で小礫多く含む。
7 4と同じ。
8 暗褐色粘質土で粘性しまりなし。
9 黒褐色土で粘性しまりなし。
10 暗褐色粘質土が主体で黒色土が混ざる。
11 暗褐色粘質土で粘性しまりややあり。
12 10と同じ。
13 6と同じ。
14 黒褐色粘質土でスコリア含み粘性しまりなし。
15 黄褐色粘質土で粘性あまりなし。
55土
1 黄褐色土でしまり粘性なく小礫多く含む。
2 暗褐色粘質土で小礫多く、黄褐色粘質土をわずかに含む。
3 黄褐色粘質土で粘性しまりなし。
4 暗褐色粘質土でスコリアわずかに含み粘性しまりなし。
5 暗褐色粘質土で黒褐色粘質土とスコリアわずかに含む。
6 黄褐色粘質土に小礫わずかに含む。
7 黄褐色粘質土で粘性しまりなし。
8 1と同じ。
9 黒褐色粘質土。
10 暗褐色粘質土が主体でわずかに黄褐色粘質土が混ざる。
11 黄褐色粘質土で年生しまり強い。
12 暗褐色粘質土
56土
SA 415.400
EB 415.400
EC 415.400
EA 417.400
SB 417.000
SA' 417.000
EB' 416.200
SA' 416.200
EB' 416.500
SA' 417.400
EB 414.400
0
2m

第27図　土坑平面図 (5)

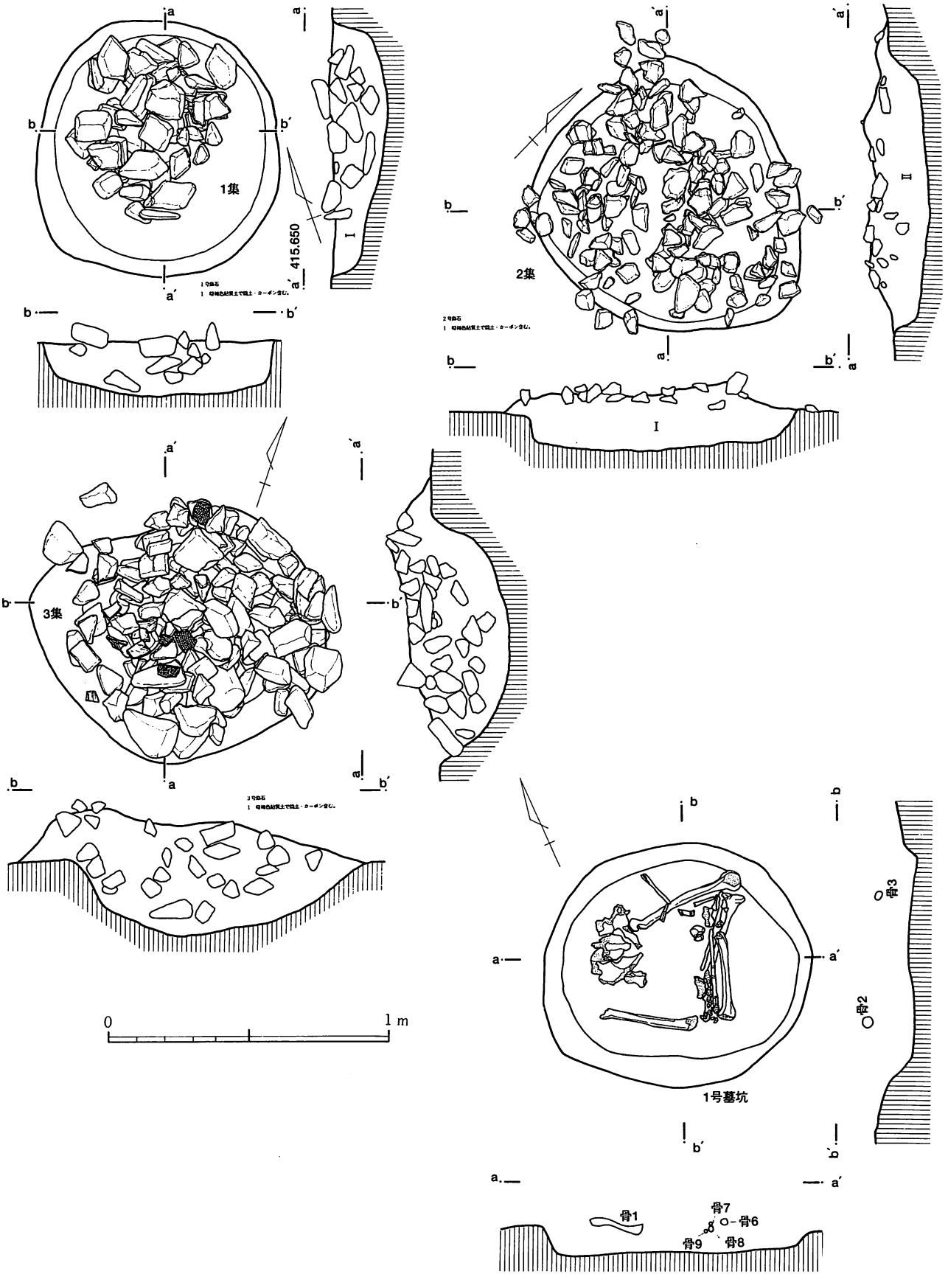
第５節　墓　　壙

◎第１号墓壙（第29図）

Ｂ－９グリッドに位置する。長径0.95m、短径0.9m、深さ0.13mを測る。底部のみを残し上部を削平されているため、上半身を完全に失っており、骨盤から下部が検出されている。埋葬形態は、座棺で両足を組む形で埋葬されており、副葬品は、「寛永通宝」が６枚検出されている。詳しい分析結果は、附編の九鬼Ⅱ遺跡出土の自然化学分析の中の「近世の土坑墓（１号墓坑）より出土した人骨」に記載してある。



第28図　土坑平面図　(6)



第29図　集石土坑・第１号墓坑平面図

第６節　竪穴状遺構

◎第１号竪穴状遺構

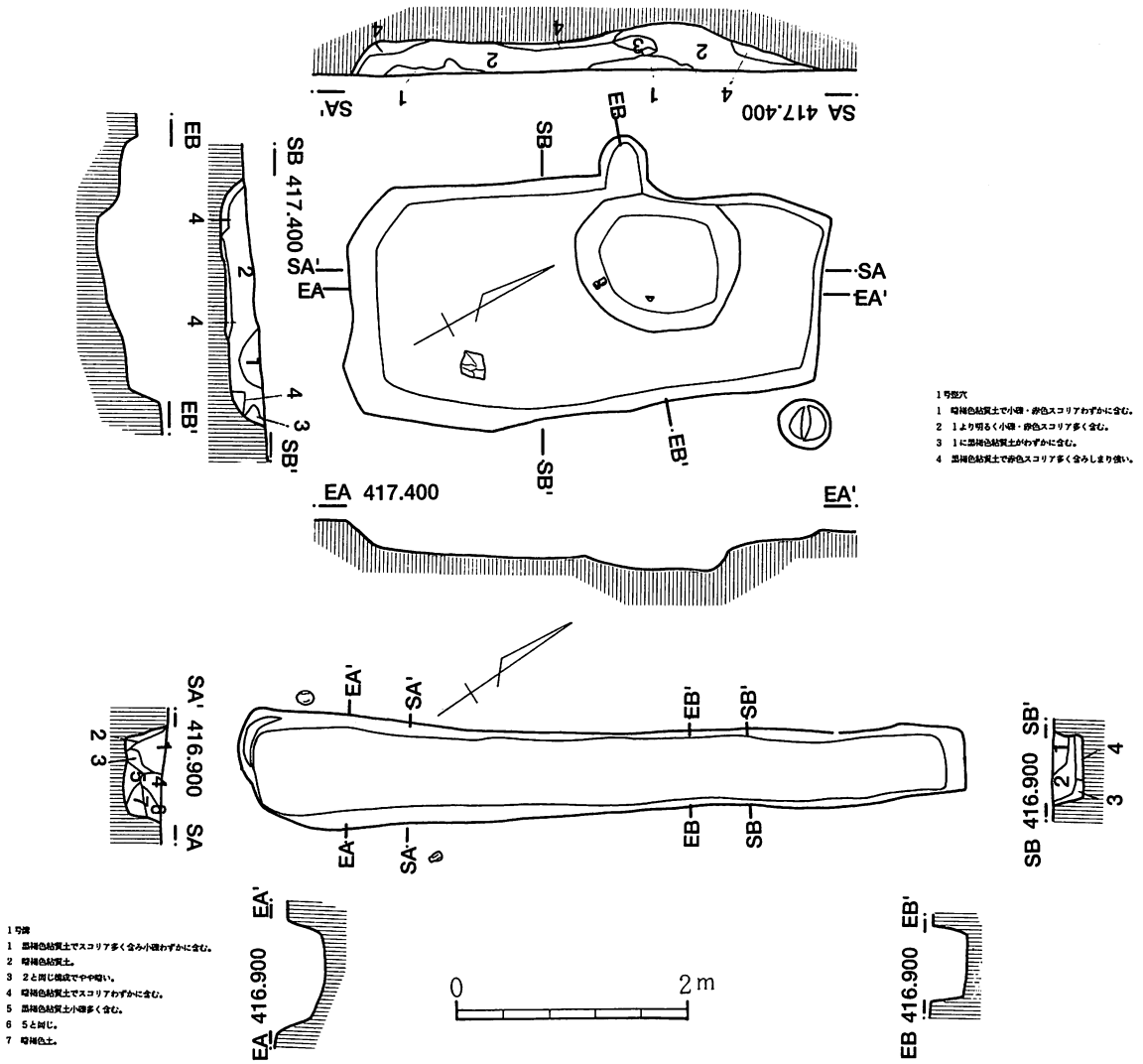
J－９グリッドに位置する。長辺4.2m、短辺2.0mの北東～南西方向に細長い隅丸長方形を呈し、深さ0.3mを測る。壁は0.3m程で緩やかに立ち上がり、床面は、踏み固められたような良好な箇所は認められなかった。住居跡北西壁中央部に、幅0.4m、長さ0.4mの突出部が確認されている。また、本遺構に伴うものかは不明であるが、長径1.4m、短径1.15m、深さ0.2mの土坑が検出されている。遺物は、全く出土していないため、遺構の性格などは不明である。遺構は、黒色土を掘り込んでいるため平安時代及びそれ以降の所産と考えられる。

第７節　溝状遺構

本遺跡から溝状遺構が１基だけ検出されている。

◎第１号溝状遺構（第30図）

J－17、K－17・18グリッドに位置する。北東～南西方向に延び、長さ6.3m、幅0.55～1.0m、深さ0.2～0.35mを測る。溝状遺構の底面は平坦で起伏はほとんど見られない。壁の立ち上がりも緩やかに傾斜しながら立ち上がる。本遺構も、覆土などからの出土遺物は見られなかったが、黒色土を掘り込んでいるため平安時代もしくはそれ以降の所産と考えられる。



第30図　第１号竪穴状遺構・第１号溝状遺構平面図

第１表　土坑一覧表

単位（m）

土坑No.	位　置	形態		規模			土坑底面	備　考
		平面形	断面形	長径	短径	深さ		
1土	E－4	円　形	鍋底状	1.15	1.10	0.40	平　底	
2土	E－2・3	不整円形	円筒状	1.25	1.05	1.10	平　底	小穴1
3土	E－3	円　形	鍋底状	1.30	1.25	0.56	平　底	
4土	F－3	不整円形	鍋底状	0.70	0.65	0.46	丸　底	小穴1
5土	E・F－4	楕円形	円筒状	1.40	1.25	1.30	平　底	
6土	G－3	円　形	すり鉢状	0.85	0.80	0.65	丸　底	
7土	E－1・2	不定形	鍋底状	3.75	1.85	0.40	平　底	
8土	G－2	円　形	鍋底状	1.00	0.90	0.45	丸　底	
9土	E・F－5・6	円　形	鍋底状	1.42	1.30	0.50	平　底	
10土	F－6	円　形	鍋底状	1.30	1.15	0.40	平　底	
11土	H－3	円　形	円筒状	1.65	1.35	1.30	平　底	
12土	D－4	不整円形	鍋底状	2.15	1.50	0.58	平　底	土坑西側撹乱不明
13土	G・H－6	不整円形	鍋底状	1.60	—	0.95	丸　底	
14土	D・E－7	円　形	円筒状	1.55	1.40	1.00	平　底	
15土	C・D－8	楕円形	すり鉢状	1.55	1.30	0.97	平　底	
16土	F－11	楕円形	鍋底状	0.95	0.75	0.55	丸　底	
17土	G－11	楕円形	鍋底状	0.90	0.70	0.35	丸　底	
18土	G・H－11	不整円形	鍋底状	1.55	1.15	0.60	平　底	
19土	D－9	楕円形	鍋底状	1.15	1.00	0.73	平　底	
20土	F－11	瓢箪状	鍋底状	1.00	0.70	0.20	丸　底	
21土	G－8	不整円形	鍋底状	0.93	0.75	0.15	丸　底	
22土	H－8	楕円形	鍋底状	1.05	0.75	0.20	丸　底	
23土	H－9	楕円形	鍋底状	0.95	0.80	0.23	丸　底	
24土	E－15	不整円形	円筒状	1.10	0.85	0.70	平　底	29土と重複
25土	E－15	不整形	鍋底状	1.25	1.00	0.30	丸　底	テラス有り
26土	D－15	円　形	すり鉢状	0.95	0.90	0.55	丸　底	
27土	D－15・16	不整形	鍋底状	0.90	0.85	0.26	丸　底	
28土	D－15・16	不整形	鍋底状	0.90	0.80	0.28	丸　底	
29土	E－15	不整形	鍋底状	0.75	0.70	0.20	平　底	24土と重複
30土	D－16	不整形	鍋底状	0.80	0.75	0.50	丸　底	小穴1
31土	E－16	円　形	鍋底状	0.75	0.70	0.90	丸　底	
32土	E－16	円　形	鍋底状	0.85	0.70	0.55	丸　底	小穴1
33土	E－16	円　形	鍋底状	0.95	—	0.55	丸　底	
34土	F－15	円　形	鍋底状	0.80	0.70	0.45	丸　底	
35土	E・F－15	楕円形	すり鉢状	2.15	1.20	0.55	丸　底	凸凹有り
36土	C・D－16	円　形	円筒状	1.50	1.20	1.00	平　底	南西側不明
37土	C－16・17	楕円形	すり鉢状	0.85	0.60	0.25	丸　底	
38土	H・I－20	楕円形	鍋底状	1.90	1.35	0.43	平　底	
39土	G・H－20	楕円形	鍋底状	2.10	1.00	0.30	平　底	
40土	H－20	楕円形	鍋底状	1.00	0.80	0.24	丸　底	
41土	H－20	楕円形	鍋底状	0.80	0.75	0.35	丸　底	
42土	G－20	円　形	鍋底状	0.70	0.65	0.41	丸　底	
43土	H・I－21	円　形	鍋底状	0.50	0.45	0.30	丸　底	
44土	H－23	楕円形	円筒状	0.95	0.65	0.95	丸　底	
45土	G－16	不整円形	鍋形状	1.55	0.90	0.30	丸　底	
46土	G・H－16	楕円形	すり鉢状	2.70	1.20	0.70	丸　底	小穴1
47土	D・E－16	円　形	すり鉢状	0.95	0.85	0.20	丸　底	
48土	D・E－15	楕円形	すり鉢状	2.90	1.30	0.70	丸　底	凸凹有り
49土	E－15	楕円形	円筒状	1.50	1.05	0.97	平　底	陥し穴　小穴1
50土	E－15	楕円形	鍋形状	1.35	0.75	0.65	平　底	底部中央突出部
51土	G－14	不整形	すり鉢状	2.40	1.20	0.35	丸　底	小穴3
52土	I－6	楕円形	すり鉢状	2.00	1.40	1.60	丸　底	陥し穴　小穴1
53土	I－9	楕円形	鍋形状	1.75	1.40	0.40	平　底	
54土	I－14・15	楕円形	鍋形状	1.80	1.20	0.15	平　底	
55土	J－7	不整形	すり鉢形	4.40	2.45	1.10	平　底	
56土	K－11	円　形	円筒状	1.40	1.05	0.75	丸　底	陥し穴　小穴1
57土	J－11・12	楕円形	すり鉢形	2.20	1.35	0.45	丸　底	小穴1
58土	J－14	不整形	すり鉢形	1.55	1.05	0.55	丸　底	凸凹有り
59土	I－15	楕円形	鍋形状	1.85	1.35	0.35	丸　底	
60土	I－15・16	楕円形	鍋形状	3.05	1.30	0.70	丸　底	
61土	K－13	不整形	鍋形状	2.70	2.10	0.60	丸　底	
62土	D－9	楕円形	鍋形状	1.02	0.71	0.68	丸　底	底部欠損土器正位埋納（井戸尻）

第Ⅳ章　遺　　物

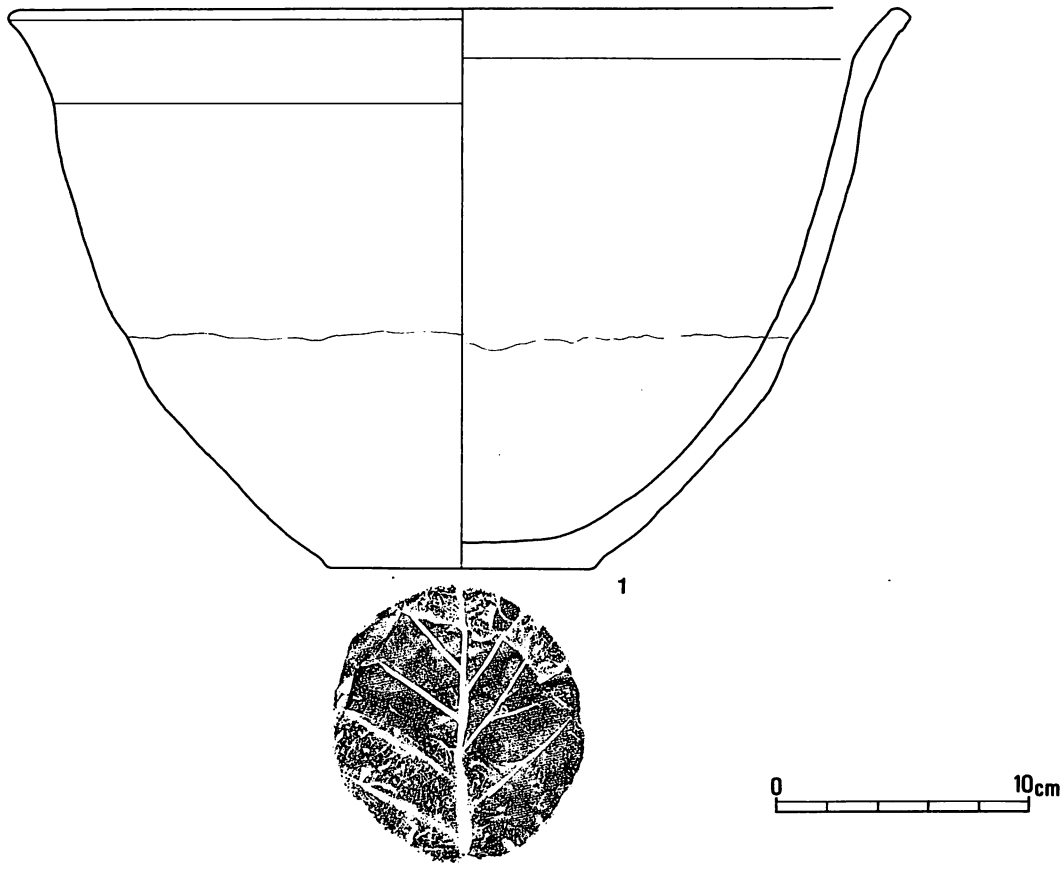
第１節　遺構内出土土器

◎第１号住居跡出土土器（第31図）

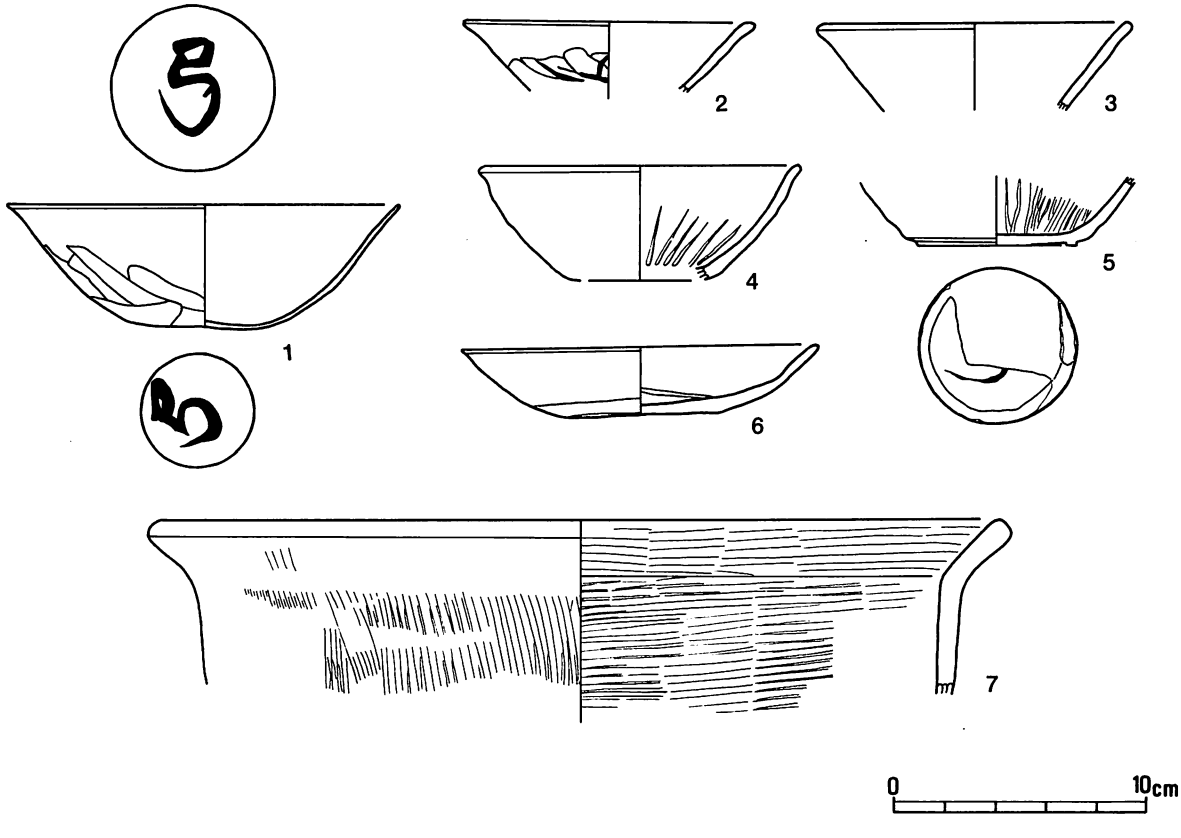
本住居跡から、出土し図示したものは１点である。1・カマド内出土、土師器鉢。口径35.7㎝、器高21.9㎝、底径10.5㎝。色調は、褐色を呈し、胎土は長石、金雲母を含む。器面調整は、内外面撫で調整、底部には木葉痕がみられる。胴部中央には、輪積み痕と思われる痕跡がみられる。出土遺物から、10世紀後半代に位置づけられる。

◎第２・15号住居跡出土土器（第32図）

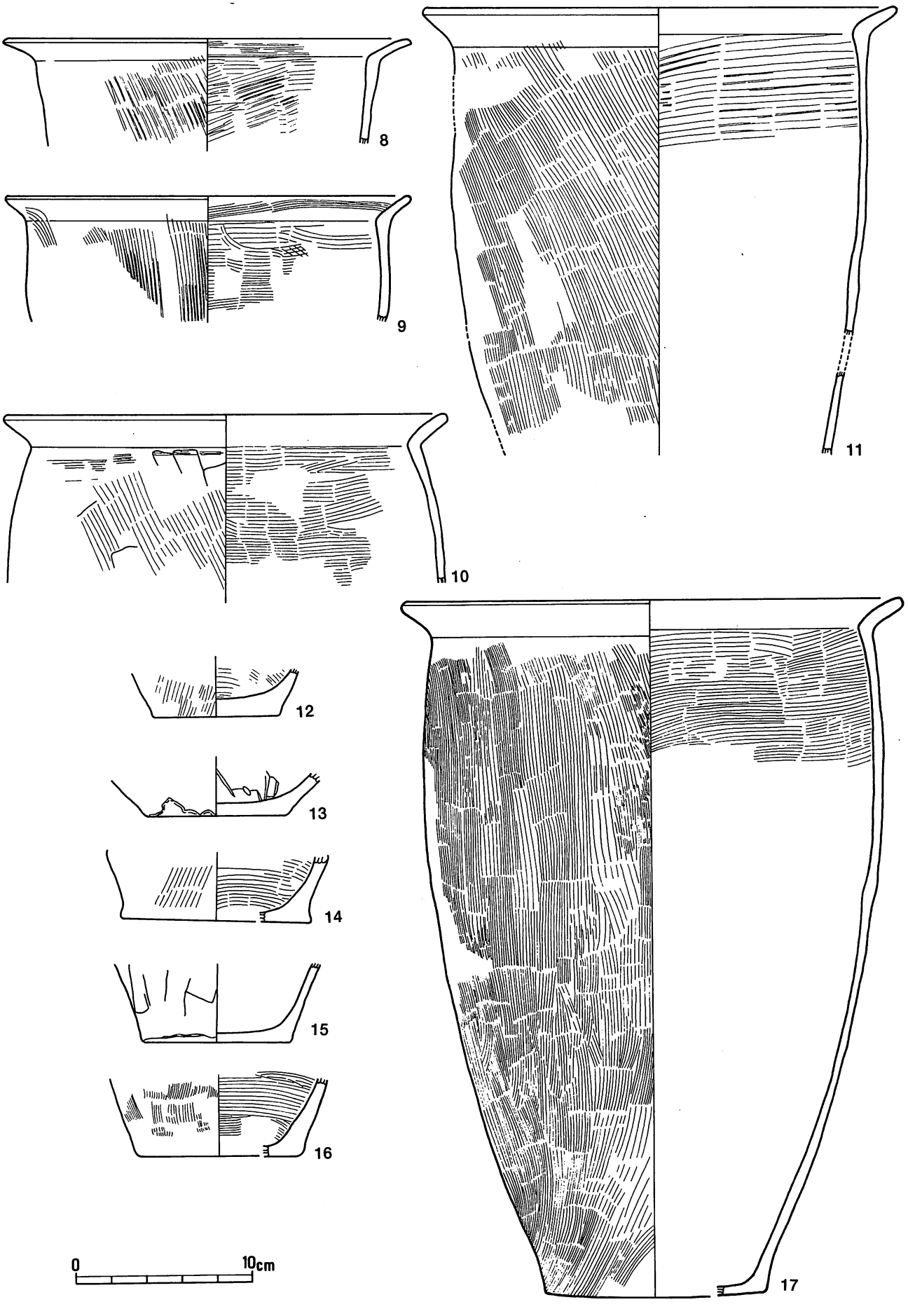
本住居跡から、小破片を除き17点を図示した。１～５が土師器坏。６が土師器皿。７～17が土師器甕である。1・土師器坏。口径15.6㎝、器高4.8㎝、底径4.4㎝を測る。色調は赤褐色を呈し、胎土は長石・赤色粒子を含み緻密である。器面調整は、内面及び外面上半撫で調整、外面下半にはヘラ削りが施される。また、みこみ部及び底部外面の２カ所に『弓』の墨書がみられる。2・土師器坏口縁部破片。推定口径11.6㎝を測る。色調は、明褐色を呈し、胎土は長石・赤色粒子を含む。内面及び外面上半撫で調整、外面下半ヘラ削りが施される。器体部外面には墨書がみられるが、判読不明である。3・土師器坏口縁部破片。推定口径12.4㎝を測る。色調は、明褐色を呈し、胎土は赤色粒子・長石を含む。器面調整は、内外面撫で調整が施される。4・土師器坏。口径12.4㎝、器高4.5㎝、底径4.7㎝を測る。色調は、内面褐色、外面暗褐色を呈する。胎土は、赤色粒子・長石含む。器面調整は、内面暗文、外面には撫で調整が施されるが、本住居跡として載せてある１～３について坏の器形や器面調整から考えると、本来の住居跡カマド内出土遺物より新しい時期と考えられる。これは本住居跡が２軒重複しており、このため、同一図版に載せている。5・土師器削り出し高台坏底部破片。推定底径6.2㎝を測る。色調は、黄褐色を呈し、胎土は緻密である。内面には、放射状暗文が施され、外面下半は回転ヘラ削りが施される。また、底部外面には墨書の一部がみられる。6・土師器皿。口径14.1㎝、器高2.7㎝、底径6.0㎝。色調は、淡褐色を呈し、胎土は緻密である。7・土師器甕。推定口径34.0㎝。色調は、明褐色を呈し、器面調整は内面横ハケ調整、外面縦ハケ調整が施される。8・土師器甕。推定口径23.0㎝。色調は褐色を呈し、胎土は長石・金雲母含む。器体部内面横ハケ、外面縦ハケ調整が施される。9・土師器甕。推定口径23.9㎝を測り、色調は暗褐色を呈する。頸部から胴部にかけて膨らみを持つ。胎土は、長石・金雲母・石英含む。内面横ハケ、外面縦ハケ調整が施される。10・土師器甕。推定口径25.1㎝。口縁部内外面撫で調整。器体部内面横ハケ、外面縦ハケ調整が施される。10も頸部から胴部にかけて大きく膨らみがみられる。11・土師器甕。推定口径26.6㎝を測る。色調は褐色を呈し、胎土は長石・石英・金雲母含み、口縁部内外面撫で調整、器体部内面横ハケ、外面縦ハケ調整される。12・土師器甕底部破片。推定底径7.1㎝を測る。内面横ハケ、外面縦ハケ調整が施される。13・土師器底部破片。推定底径7.8㎝。色調淡褐色を呈し、長石・金雲母含み内面底部にはヘラ削りがみられ、底部外面には木葉痕がみられる。14・土師器甕底部破片。推定口径10.7㎝。色調は、暗褐色を呈し、胎土は、長石・雲母含み、内面横ハケ、外面縦ハケの器面調整が施される。15・土師器甕底部破片。推定底径8.4㎝。色調は内面明褐色、外面暗褐色を呈する。胎土は、長石・石英・金雲母含む。調整は、外面にヘラ削りが施される。16・土師器甕底部破片。推定底径8.9㎝。色調は明褐色を呈し、長石・石英・金雲母含む。内面横ハケ、外面縦ハケが施される。17・土師器甕。口径27.7㎝、器高38.8㎝、底径12.4㎝。色調は褐色を呈し、胎土は長石・金雲母含み、内面横ハケ、外面縦ハケ調整が施される。７～10の甕については、胴部から口縁部にかけての形態から９世紀中頃と思われる。また、本住居跡から、土錘が５点出土、混入品と思われる縄文時代の打製石斧や、石錘などが出土している。



第31図　第１号住居跡出土土器



第32図　第２・15号住居跡出土土器　(1)

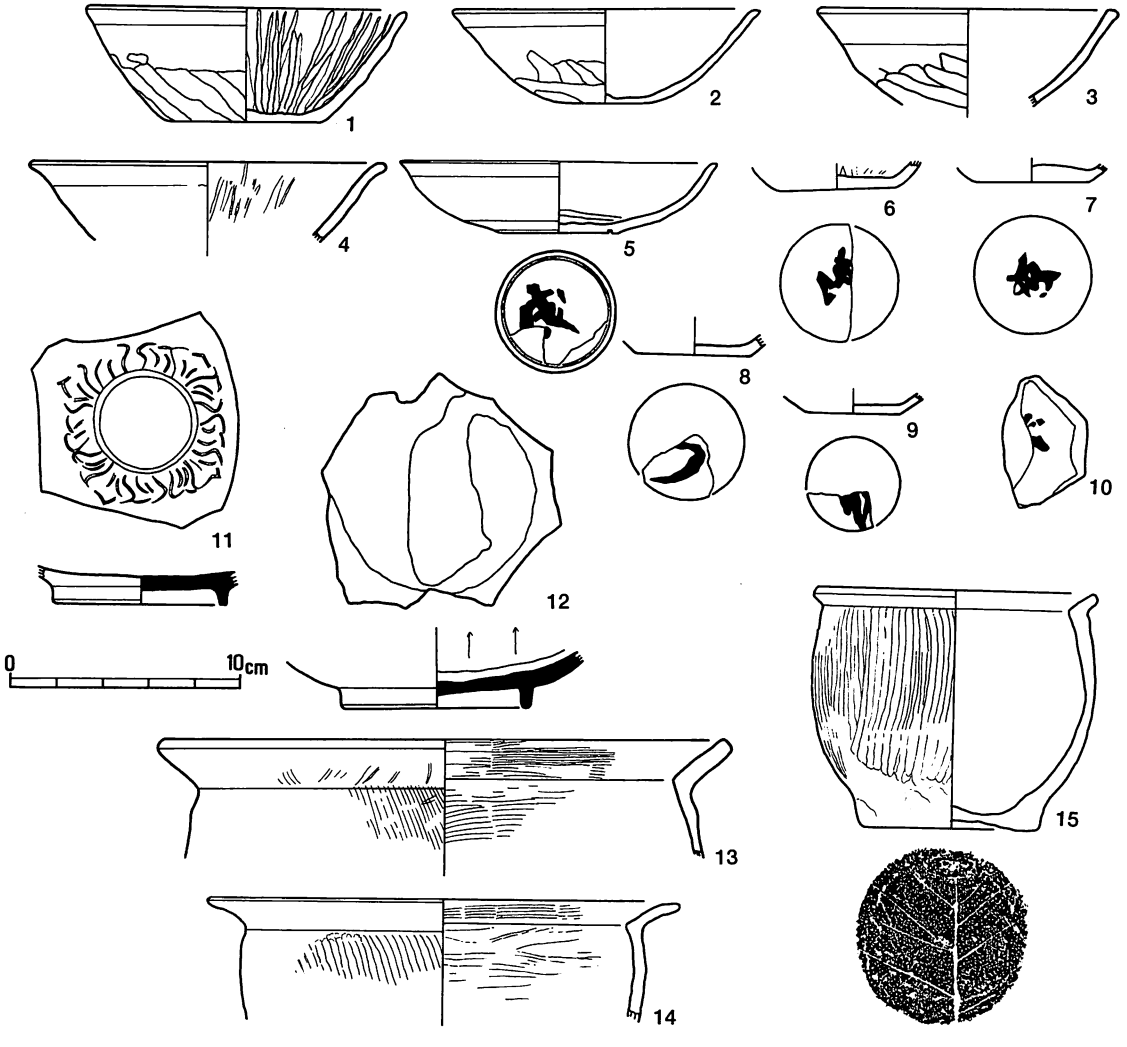


第33図　第２・15号住居跡出土土器 (2)

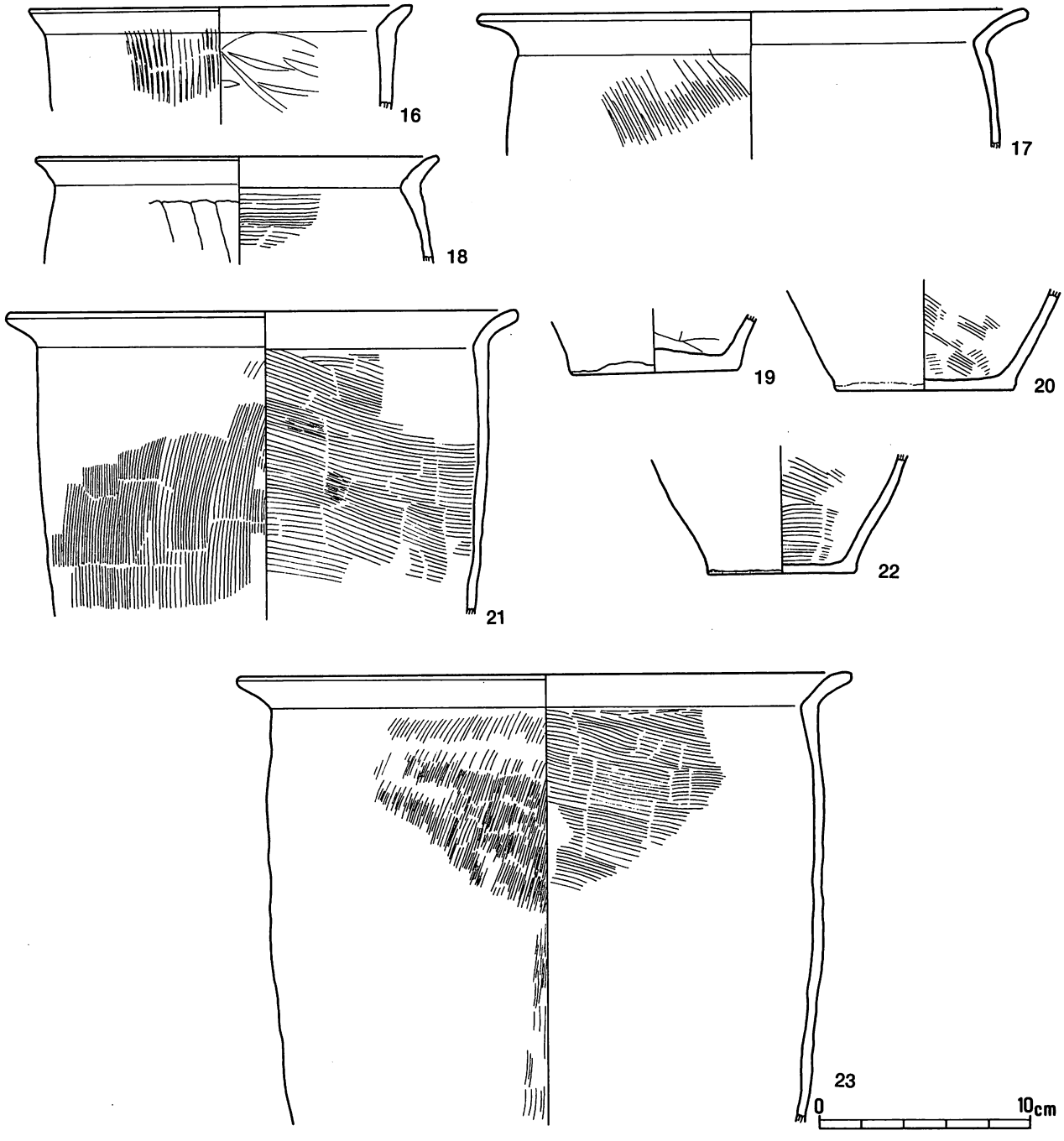
◎第３号住居跡出土土器（第34図・第35図）

土師器坏や皿、甕、小型甕、灰釉陶器、緑釉陶器など15点図示した。

1・土師器坏。口径13.9cm、器高5.0cm、底径6.2cm。色調は、明褐色を呈し、胎土は長石・金雲母含む。器面調整は、内面には放射状暗文、外面上半撫で、外面下半ヘラ削りが施される。ひじょうに丁寧な作りである。2・土師器坏。口径13.4cm、器高4.1cm、底径4.2cm。みこみ部から口縁にかけて緩やかに立ち上がる。色調は、赤褐色を呈し、胎土は赤色粒子、長石含み緻密である。器体部内面及び外面上半横撫で、器体部外面下半にはヘラ削りが施される。3・土師器坏上半部破片。推定口径13.0cm、色調は、内面黒色処理され外面褐色、胎土は砂粒含みやや粗い。内面及び外面上半横撫で、外面下半ヘラ削りが施される。口縁から胴部にかけてやや膨らみを持つ。4・土師器坏口縁部破片。推定口径15.4cm。口縁端部がやや外反し開く。色調は、内面黒褐色、外面褐色を呈する。胎土は、赤色粒子含み緻密。内面には放射状暗文、外面は撫で調整が施される。5・土師器皿。口径13.8cm、器高3.1cm、底径5.2cm。色調は内面暗褐色、外面黄褐色を呈する。胎土は赤色粒子含み緻密。内外面横撫で。底部外面には『成』の墨書が記される。6・土師器坏底部破片。推定底径5.0cm。色調は明褐色を呈する。胎土は赤色粒子を含み緻密。底部外面には墨書が記されるが異体字？と思われ判読不明である。7・土師器坏底部破片。底径4.9cm。色調は明褐色、胎土は赤色粒子含み緻密で底部外面には『成』の墨書が記される。8・土師器底部破片。推定底径5.0cm。色調は褐色を呈し、胎土は緻密である。底部外面には、墨書がみられるが判読不明である。9・土師器坏底部破片。色調は淡褐色を呈し、胎土は赤色粒子含み緻密。底部外面には墨書がみられるが、判読不明。10・土師器坏底部小破片。色調は明褐色、底部外面には墨書がみられる。『成』？。11・緑釉陶器底部破片。底径7.6cm。全面に釉薬が施され、みこみ部には花弁の陰刻文様が施される。12・灰釉陶器底部破片で底径

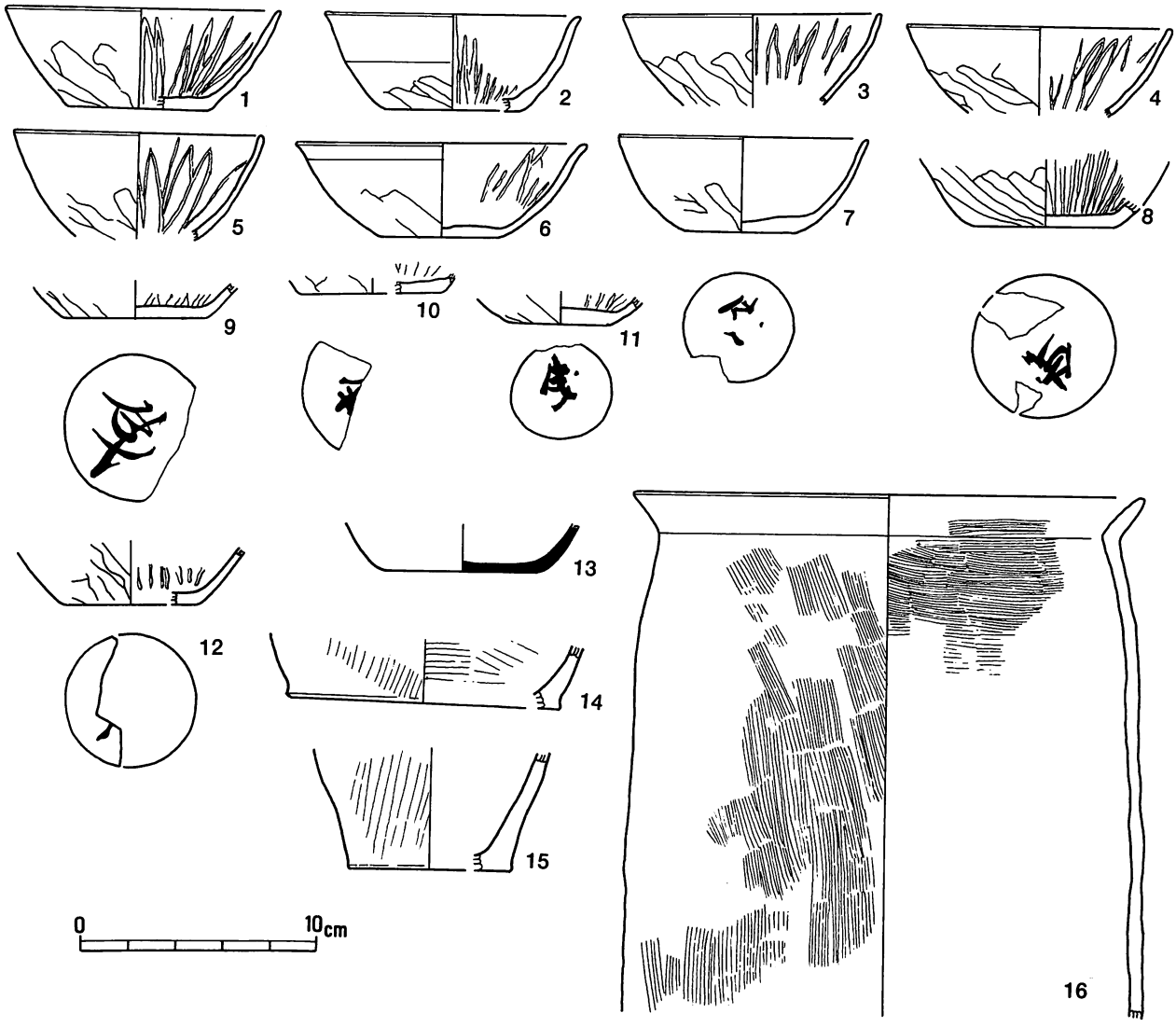


第34図　第３号住居跡出土土器（1）

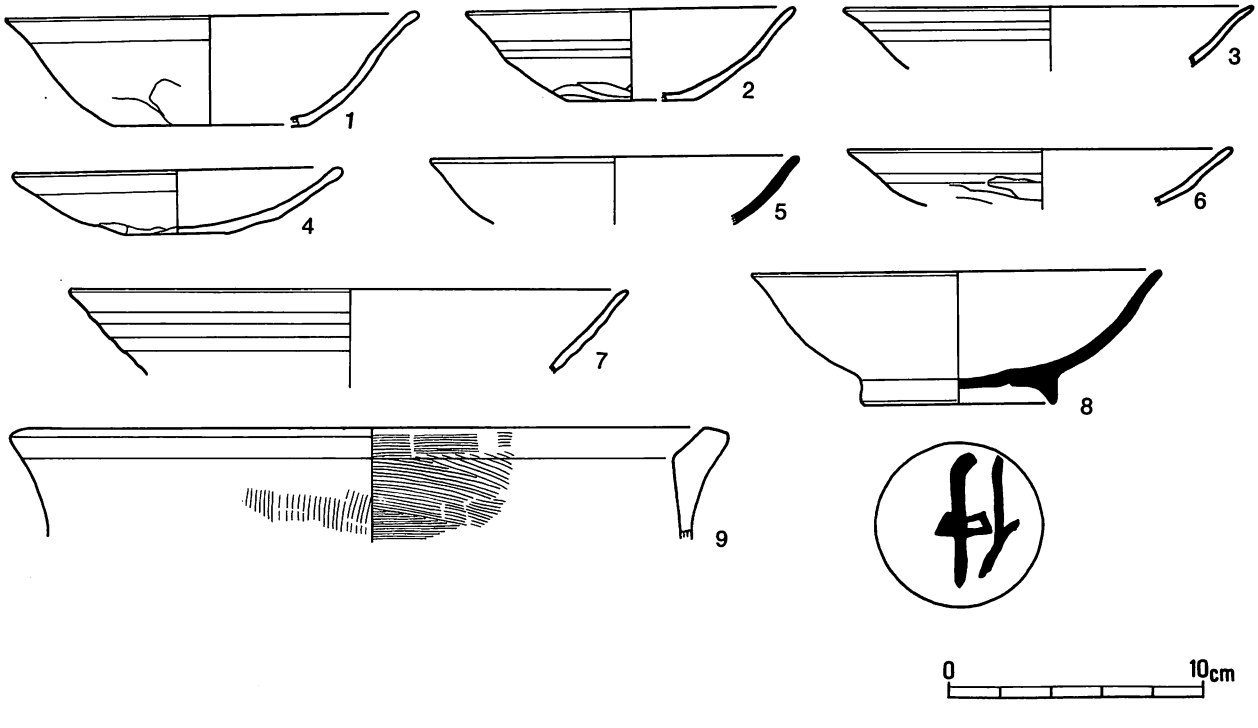


第35図　第３号住居跡出土土器　(2)

8.3㎝。色調は、灰褐色を呈し、胎土は緻密である。みこみ部には、渦巻き状に釉薬が施される。13・土師器甕口縁部破片。推定口径24.9㎝。頸部が強く屈曲し開く。色調は褐色を呈し、内面横ハケ、外面縦ハケの器面調整を行う。胎土は、長石・金雲母含む。14・土師器甕口縁部破片。推定口径20.4㎝。頸部が強く屈曲し外反する。内面横ハケ、外面縦ハケ調整が施される。胎土は、長石、金雲母含み良好である。15・土師器小型甕。口径12.3㎝、器高10.3㎝、底径7.8㎝を測る。口縁部は短く、くの字に屈曲し、胴部中央から肩部にかけて膨らむ。内面には撫で調整、外面には縦ハケの器面調整が施される。また、底部外面には木葉痕がみられる。16・土師器甕口縁部破片。推定口径18.0㎝。色調は、褐色を呈し、外面には縦方向のハケ調整が施される。17・土師器甕口縁部破片。推定口径26.0㎝。色調は、赤褐色を呈し、外面には縦ハケの器面調整が施される。胎土は、長石・金雲母含む。18・土師器甕口縁部破片。推定口径19.0㎝。内面横ハケ調整が施され、色調は茶褐色を呈する。胎土は、長石・金雲母含みやや粗い。頸部がくの字状に屈曲する。19・土師器甕底部破片。推定底径7.8㎝。底部には木葉痕がみられる。20・土師器甕底部破片。推定底径8.2㎝。色調は明褐色を呈し、胎土は金雲母含み粗い。内面横ハケ調整を施し、底部付近には折り返しがみられ、底部には木葉痕がみられる。21・土師器甕胴部上半破片。推



第36図　第５号住居跡出土土器



第37図　第６号住居跡出土土器

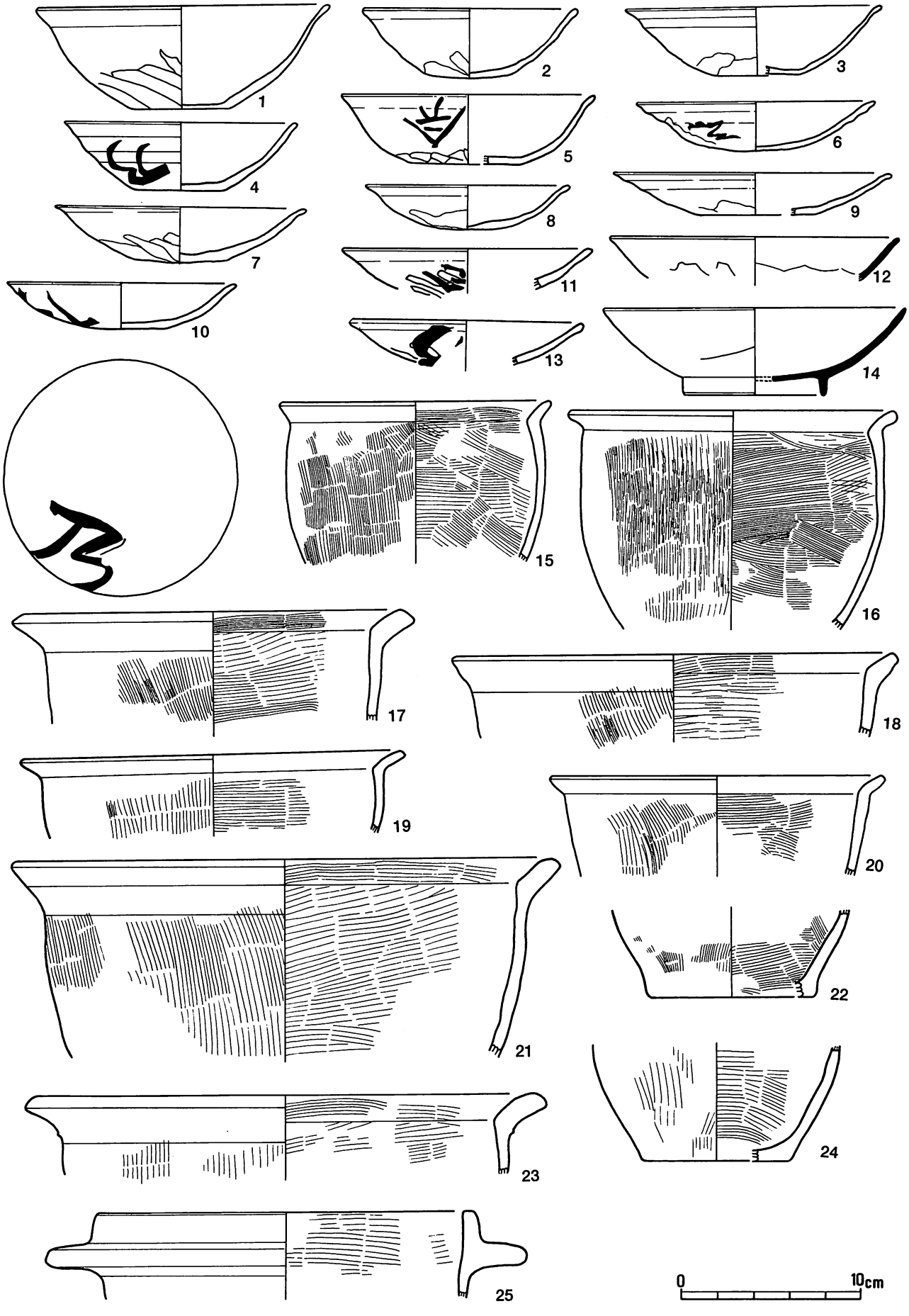
定口径24.2cm。内面横ハケ、外面縦ハケ調整が施され、色調は褐色を呈する。胎土は、金雲母・長石を含みやや粗い。22・土師器甕底部破片。推定底径7.0cm。内面横ハケ調整が施され、金雲母含み良好である。底部には木葉痕がみられる。23・土師器甕口縁部破片。推定口径29.2cm。色調は、暗褐色を呈し、内面横ハケ、外面縦ハケ調整が施される。頸部は、くの字に強く屈曲している。また、本住居跡から、鉄斧（第59図・1）が出土している。本住居跡は、坏・甕の形態から9世紀後半代に位置づけられる。

◎第5号住居跡出土土器（第36図）

本住居跡から、土師器坏・甕・須恵器が出土しており、図示できるもの16ほど図示した。1・土師器坏。推定口径11.7cm、器高4.2cm、推定底径6.0cm。内面には花弁状暗文が施され、外面下半ヘラ削りで、器面調整が施される。2・土師器坏。推定口径10.9cm、器高4.0cm、推定底径5.8cm。色調は明褐色を呈し、胎土は赤色粒子を含み緻密である。内面には放射状暗文、外面下半にはヘラ削りが施される。3・土師器坏。推定口径10.9cm。色調は、明褐色を呈し、外面下半ヘラ削り、内面花弁状暗文が施される。4・土師器坏。推定口径11.2cm。色調は、明褐色を呈し、胎土は赤色粒子含むが良好である。内面には花弁状暗文、内面下半にはヘラ削りが施される。5・土師器坏。推定口径10.6cm。胎土は緻密で、色調は明褐色を呈し、内面には花弁状暗文、外面下半にはヘラ削りが施される。6・土師器坏。口径12.4cm、器高3.9cm、底径5.0cm。内面には、花弁状暗文が施されるが、摩滅のため明瞭ではない。7・土師器坏。口径10.5cm、器高3.9cm、底径5.0cm。色調は明褐色、胎土は緻密で、内面には撫で調整、外面下半にはヘラ削りが施される。底部には、墨書がみられ一部不明であるが、『成』の文字が記されている。8・土師器坏底部破片。推定底径6.0cm。内面には放射状暗文がみられ、外面下半にはヘラ削りが緻密に施される。底部外面には『成』の墨書が記される。9・土師器坏底部破片。推定底径6.0cm。非常に緻密な作りで、内面には暗文が施されており、底部外面には墨書による『成』が記されており、他の土師器に記されている書体とはだいぶ異なる。10・土師器坏底部破片。推定底径6.0cm。小破片ではあるが、『成』と思われる墨書が記されている。11・土師器坏底部破片。底径4.2cm。底部外面に、墨書の『成』が記されている。12・土師器坏底部破片。推定底径5.6cm。内面には放射状暗文、外面下半にはヘラ削りが施される。底部外面には、墨書がわずかにみられるが、判読不明である。13・須恵器坏底部破片。底径6.5cm。器体部内外面撫で調整。14・土師器甕底部破片。推定底径11.7cm。内面横ハケ、外面縦ハケの器面調整が施され、色調は暗褐色、胎土は長石、石英、金雲母含む。15・土師器甕底部破片。推定底径7.0cm。色調は褐色を呈し、胎土は、長石・金雲母含みやや粗い。外面縦方向のハケ調整が施される。16・土師器甕。推定口径20.8cm。内面横方向のハケ調整、外面縦方向のハケ調整が施される。色調暗褐色、胎土は石英・金雲母含みやや粗い。本住居跡は、9世紀第2四半期に位置づけられると思われる。

◎第6号住居跡出土土器（第37図）

本住居跡は、遺物の出土量は比較的少ないが、良好な資料が出土しており、9点ほど図示した。1・土師器坏。推定口径16.1cm、器高4.3cm、推定底径7.7cm。色調は明赤褐色を呈し、内面横撫で、外面上半撫で調整、外面下半にはヘラ削りが施される。胎土は、長石・赤色粒子含み緻密である。胴部はやや膨らみを持つ。2・土師器坏。推定口径13.1cm、器高5.0cm、底径3.5cm。色調は淡褐色を呈し、胎土は緻密、胴部中程に膨らみを持ち、口唇端部が玉縁状を呈する。内面撫で調整、外面下半にはヘラ削りが施される。3・土師器坏口縁部破片。推定口径16.1cm。内外面横撫での調整が行われ口唇部が玉縁を呈する。4・土師器皿。口径13.1cm、器高2.5cm、底径4.0cm。色調明赤褐色を呈し、胎土は長石・赤色粒子含むが緻密で、内面及び外面上半は横撫で調整が施される。口唇部が、前述した坏と同じように玉縁状を呈する。5・須恵器坏口縁部破片。推定口径14.6cm。色調は灰褐色を呈し、胎土は緻密で、口唇端部が外反し開く。6・土師器皿口縁部破片。推定口径15.1cm。色調は暗褐色を呈し、胎土は赤色粒子含み緻密。胴部中程にわずかな凹みがみられる。7・土師器口縁部破片。推定口径22.0cm。色調は内面黒褐色、外面明褐色を呈する。胎土は、赤色粒子含み緻密である。8・灰釉陶器。付高台。推定口径16.0cm、



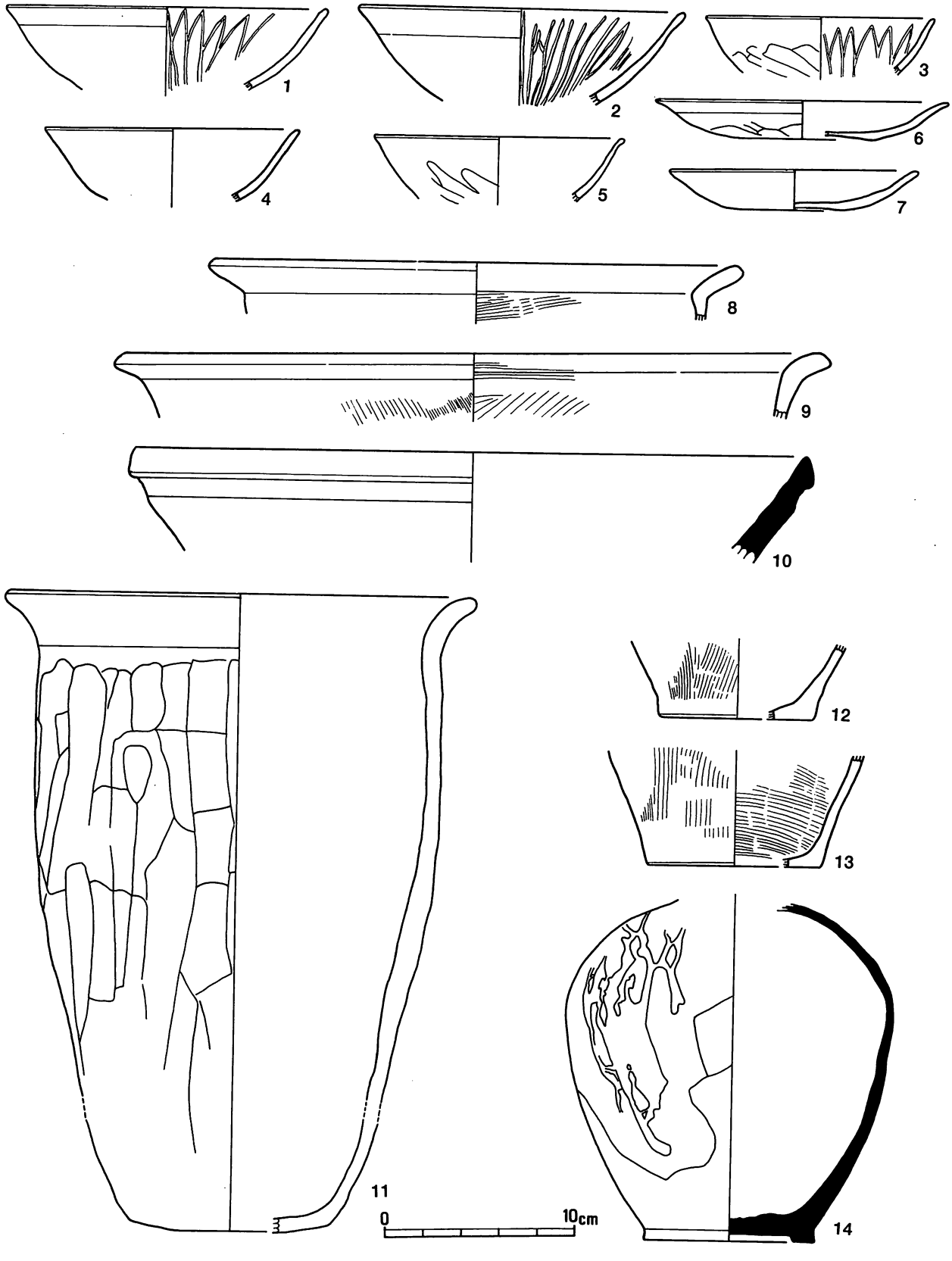
第38図　第７号住居跡出土土器

器高5.2cm、底径5.7cm。色調は、灰褐色を呈し胎土は緻密である。底部外面には『仲』の墨書が記される。9・土師器甕口縁部破片。推定口径28.3cm。色調は、暗褐色を呈し、胎土は長石・石英・金雲母含む。内面横ハケ、外面縦ハケ調整が施される。石器（砥石？）が2点出土している（第57図4・5）。

◎第7号住居跡出土土器（第38図）

本住居跡からは土師器坏、甕、羽釜、墨書土器、石器など豊富に出土している。

1・土師器坏。口径16.4cm、器高5.7cm、底径5.4cm。口唇端部が玉縁状になる。色調は淡褐色を呈し、胎土は赤色粒子含み緻密。器面調整は、内外面上半横撫で、外面下半ヘラ削りを施す。2・土師器坏。口径12.1cm、器高3.9cm、底径3.9cm。口唇端部がやや玉縁状になる。色調は明褐色を呈し、胎土は緻密、内面及び外面上半横撫で、外面下半ヘラ削りが施される。3・土師器坏。口径14.2cm、器高3.8cm、底径4.8cm。色調は、淡褐色を呈し、胎土は赤色粒子含み緻密、器面調整は内面及び外面上半横撫で、外面下半ヘラ削りが施される。4・土師器坏。口径13.0cm、器高3.8cm、底径5.0cm。色調は、明褐色を呈し、内外面上半横撫で、外面下半ヘラ削りが施される。胎土は、赤色粒子含み緻密。また、胴部外面には墨書『乃』が記される。5・土師器坏。推定口径14.2cm、器高3.8cm、推定底径6.2cm。色調は、赤褐色を呈し、胎土は、赤色粒子含み緻密。胴部外面に墨書が記されるが、異体字と思われる文字が記される。6・土師器皿。口径13.3cm、器高2.8cm。内外面上半横撫で、外面下半ヘラ削りが施される。胴部外面には、墨書がみられるが、異体字と思われる文字が記される。7・土師器坏or皿。口径14.0cm、器高3.0cm、底径5.4cm。色調は、明褐色を呈し、胎土は長石、赤色粒子含む。内外面上半撫で調整、外面下半ヘラ削りが施される。8・土師器皿。推定口径11.5cm、器高3.8cm、推定底径2.4cm。色調は、淡褐色。胎土は緻密。内面横撫で、外面下半ヘラ削りが施される。9・土師器皿。推定口径15.5cm、器高2.4cm、底径6.2cm。色調は、明褐色。胎土は、長石、赤色粒子含み緻密。内外面上半横撫で、外面下半ヘラ削りが施される。10・土師器皿。口径12.8cm、器高2.6cm、底径4.0cm。色調は、明褐色を呈し、胎土は、赤色粒子含みやや粗い。内外面横撫での器面調整が施される。器体部外面に『乃』の墨書が記される。11・土師器皿。推定口径14.0cm。内外面上半横撫で、外面下半ヘラ削りが施される。器体部外面には、墨書の一部がみられるが、判読不明である。12・灰釉陶器。推定口径16.1cm。色調は、灰褐色を呈し、胎土は緻密である。13・土師器皿。推定口径13.1cm。色調は、明褐色を呈し、胎土は石英・赤色粒子含み緻密。胴部外面に『乃』と思われる墨書の一部がみられる。14・灰釉陶器。口径16.3cm、器高4.8cm、底径8.0cm。色調は、灰褐色を呈し、胎土は緻密である。15・土師器小型甕。推定口径15.1cm。口縁部は短く、頸部が強くくの字状に屈曲する。色調は明褐色。胎土は、金雲母、長石、石英含む。内面横ハケ、外面縦ハケ調整が施される。16・土師器小型甕。推定口径18.2cm。色調は赤褐色を呈し、胎土は長石、石英、金雲母含む。器面調整は、内面横ハケ、外面縦ハケ調整が施される。17・土師器甕。推定口径22.3cm。口縁部が体部より厚くなり、厚口口縁を呈する。器面調整は、内面横ハケ、外面縦ハケが施される。色調は、明褐色、胎土は長石、石英、金雲母含む。18・土師器甕。推定口径24.7cm。内面横ハケ、外面縦ハケの器面調整が行われ、色調は、褐色を呈し、胎土は長石、石英、金雲母含む。19・土師器甕。指定口径21.5cm。内面横ハケ、外面縦ハケ調整が行われる。色調は内面赤褐色、外面灰褐色を呈する。胎土は、長石、石英、金雲母含む。20・土師器甕。推定口径18.5cm。内面横ハケ、外面縦ハケの器面調整が行われ、胎土は長石、金雲母含む。色調は茶褐色を呈する。21・推定口径30.6cm。口縁部が、体部より厚くなり、厚口口縁になる。色調は赤褐色。胎土は長石、金雲母含む。内面横ハケ、外面縦ハケ調整が行われる。22・土師器甕底部破片。推定底径9.0cm。内面横ハケ、外面縦ハケの器面調整が行われる。色調赤褐色、胎土は金雲母、長石、石英含む。23・土師器甕。推定口径29.0cm。内面横ハケ、外面縦ハケの器面調整が行われ、色調は明褐色、胎土は長石、石英、赤色粒子含む。21同様口縁部が厚口口縁になる。24・土師器甕底部破片。推定底径8.1cm。内面横ハケ、外面縦ハケ調整が行われる。色調は、褐色。胎土は、金雲母含む。25・土師器羽釜。推定口径20.8cm、鍔径26.8cmを測る。内面横ハケ調整が施される。内面明褐色、外面暗褐色を呈し、胎土は金雲母多く含む。出土遺物から、10世紀第4四半期に位置づけられる。



第39図　第８号住居跡出土土器

◎第８号住居跡出土土器（第39図）

本住居跡から出土した遺物14点を図示した。

1・土師器坏口縁部破片。推定口径16.9㎝。色調は明褐色を呈し、胎土は赤色粒子含み緻密で、内面には花弁状暗文が施される。2・土師器坏口縁部破片。推定口径17.1㎝。口縁端部が玉縁状を呈する。色調は褐色を呈し、胎土は緻密で赤色粒子含む。内面には放射状暗文、外面は撫で調整が施される。3・土師器坏口縁部破片12.0㎝。色調は暗褐色を呈し、内面は花弁状暗文、外面上半横撫で、外面下半ヘラ削りが施される。胎土は緻密。4・土師器坏口縁部破片。推定口径13.2㎝。内外面撫で調整が施され、色調は明褐色を呈し、胎土は赤色粒子含み緻密。5・土師器坏口縁部破片。推定口径13.1㎝。内外面上半横撫で、外面下半にはヘラ削りが施される。色調は明褐色を呈し、胎土は緻密で赤色粒子含む。6・土師器皿口縁部破片。推定口径15.2㎝、器高2.0㎝、推定底径7.0㎝。色調は赤褐色を呈し、胎土は赤色粒子含み緻密で、内外面上半横撫で、外面下半ヘラ削りが施される。7・土師器皿。推定口径12.9㎝、器高2.0㎝、底径4.2㎝。内外面横撫で、色調は明褐色、胎土は緻密。8・土師器甕。口径27.0㎝。色調は明褐色を呈し、胎土は長石、雲母含みやや良である。内面ハケ調整が施される。9・土師器甕口縁部破片。推定口径36.0㎝、内面横ハケ、外面縦ハケ調整が施され、色調は明褐色を呈する。10・須恵器甕口縁部破片。推定口径34.9㎝。色調は灰褐色、胎土は緻密。11・土師器甕推定口径23.8㎝、器高32.8㎝、推定底径10.2㎝。いわゆる『甲斐型』といわれるものとは異なり、「堀之内原type」といわれるもので、胎土は、赤色粒子多く含みやや粗い。色調は、赤褐色を呈し器面調整は『甲斐型』特有のハケ調整はみられず、口縁部は横撫で調整が施され、胴部外面にはヘラ削りが施される。頸部は、緩やかに外反する。12・土師器甕底部破片。推定底径7.8㎝。色調は明褐色、胎土は長石、石英、金雲母含み、器面調整は縦ハケ調整が施される。13・土師器甕底部破片。推定底径8.9㎝。色調は内面暗褐色、外面明褐色を呈し、器面調整は内面横ハケ、外面縦ハケ。14・灰釉陶器、長頸壺。現存では、胴部しか存在しておらず、頸部から口縁部にかけて欠損している。推定底径8.9㎝。肩部から胴部下半にかけて自然釉がみられる。胎土は、緻密。なお、本住居跡から鉄製品が出土している（第59図）。出土遺物から、９世紀後半代に位置づけられる。

◎第12号住居跡出土土器（第40図）

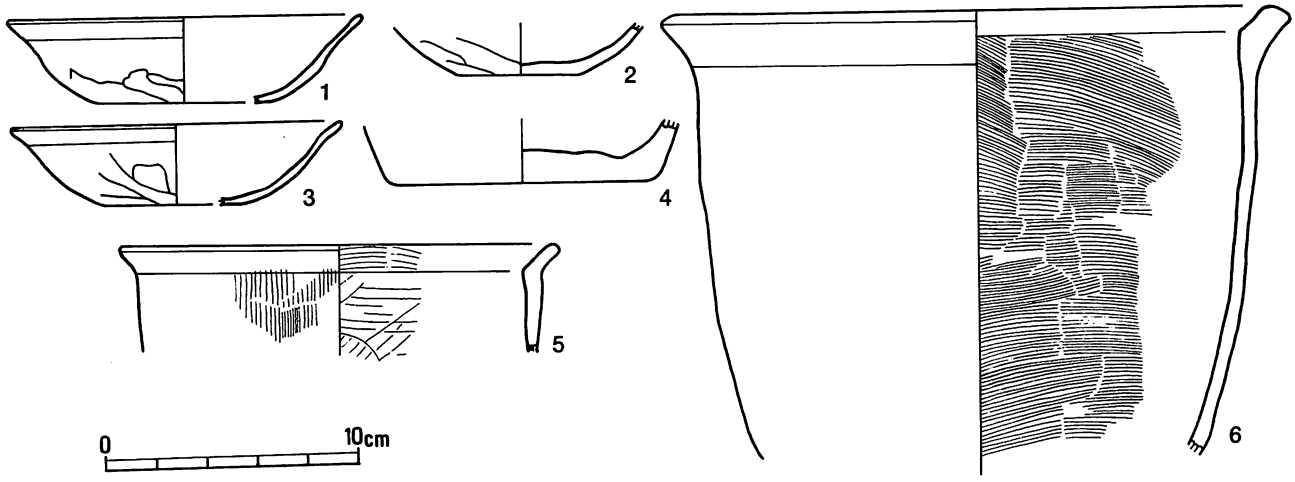
本住居跡の出土遺物は、比較的少量ではあるが、６点ほど図示した。

1・土師器坏。推定口径14.1㎝、器高3.4㎝、底径5.3㎝。口唇部はやや玉縁状を呈する。色調は、明褐色を呈し、内面及び外面横撫で、外面下半ヘラ削りが施される。2・土師器坏底部破片。推定底径4.6㎝。内面横撫で、外面にはヘラ削りが施される。色調褐色。胎土は赤色粒子含み緻密である。3・土師器坏。口径13.1㎝、器高3.2㎝、底径5.3㎝。内面及び外面上半横撫で、外面下半ヘラ削り、色調は淡褐色を呈し、胎土は赤色粒子含み緻密である。口縁部はやや外反し、口唇部がわずかに玉縁状になる。4・土師器甕底部破片。推定底径10.0㎝。色調は明褐色を呈し、胎土は長石、金雲母含みやや粗い。5・土師器小型甕。推定口径17.4㎝。内面横ハケ、外面縦ハケの器面調整が施される。色調は内面黒褐色、外面褐色を呈する。胎土は長石、金雲母含む。6・口径24.8㎝。内面には横ハケが緻密に施される。10世紀第２～第３四半期に位置づけられる。

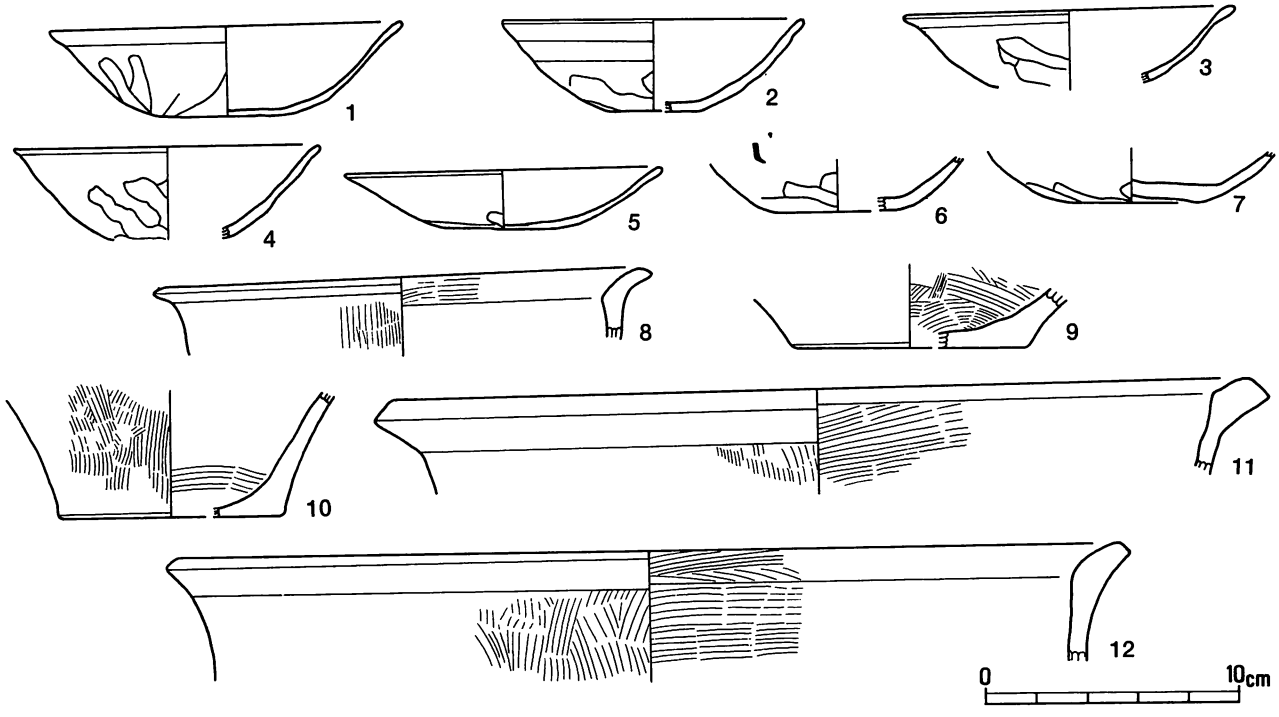
◎第13号住居跡出土土器（第41図）

本住居跡からは、12点ほど図示した。

1・土師器坏。口径13.9㎝、器高3.5㎝、底径4.7㎝。口唇部端部が玉縁状を呈する。色調は明褐色を呈し、胎土は赤色粒子含み緻密。内外面上半横撫で、外面下半にヘラ削りが施される。2・土師器坏。推定口径12.0㎝、器高3.6㎝、推定底径3.7㎝。口縁部が１に比べて厚く、口唇端部は玉縁状を呈さない。色調淡褐色、胎土は赤色粒子含み緻密。内外面上半横撫で、外面下半ヘラ削りの器面調整が施される。3・土師器坏。推定口径13.0㎝。色調は、淡褐色。胎土は赤色粒子含み緻密。口唇部は玉縁状を呈する。内外面上半横撫で、外面下半ヘラ削りを呈する。4・土師器坏。推定口径12.1㎝、器高4.5㎝。器体部内外面上半横撫で、外面下半ヘラ削りが施される。5・土



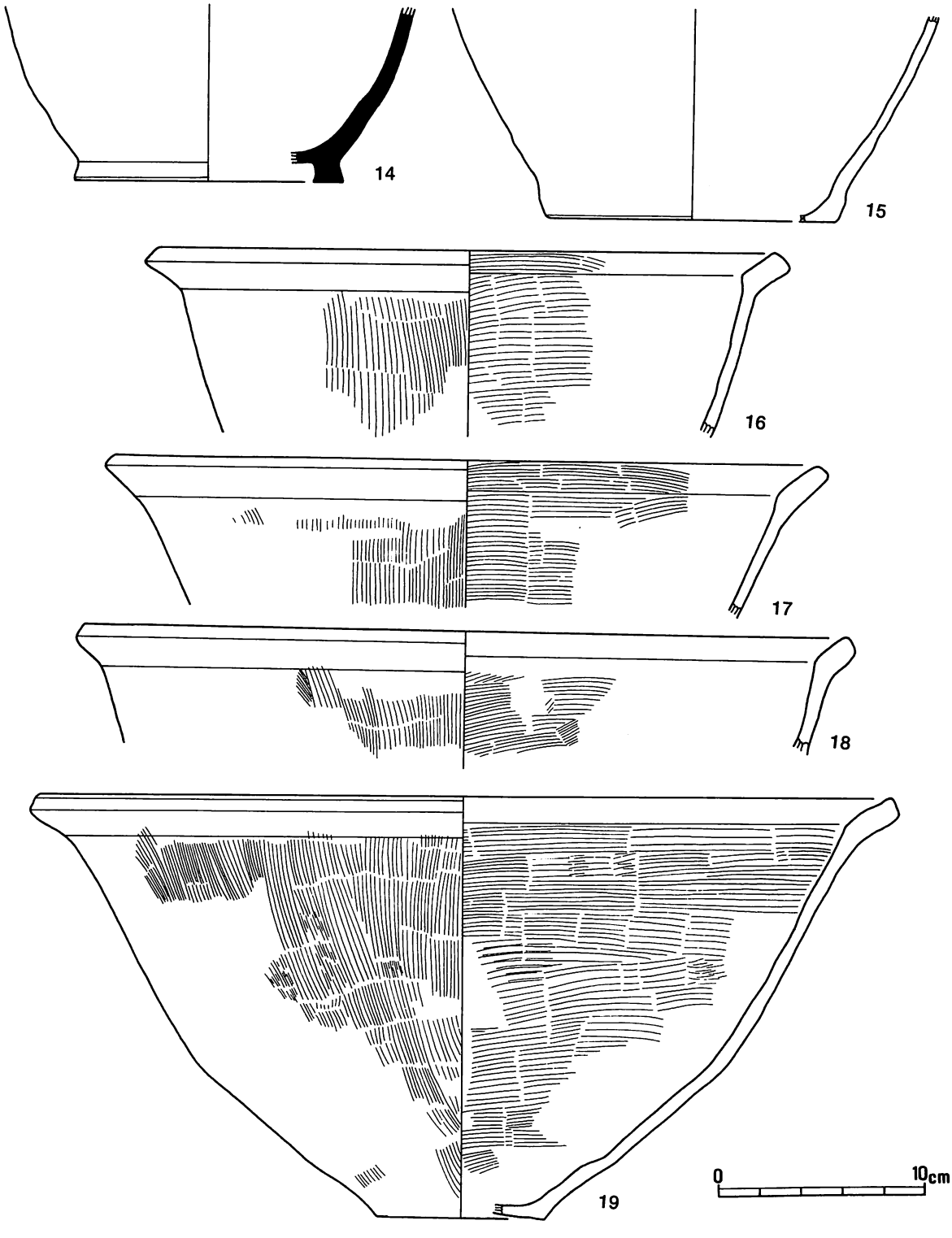
第40図　第12号住居跡出土土器



第41図　第13号住居跡出土土器

師器皿。口径12.6cm、器高2.3cm、底径4.1cm。内外面上半横撫で、外面下半ヘラ削りが施される。色調は赤褐色を呈し、胎土は石英、赤色粒子含み緻密である。6・土師器坏。推定底径3.7cm。内外面上半横撫で、外面下半ヘラ削り、胴部上半に墨書が記されるが判読不明。7・土師器坏底部破片。推定底径4.9cm。内外面上半横撫で、外面下半ヘラ削りの器面調整。色調は赤褐色を呈し、胎土は長石、赤色粒子含み緻密。8・土師器小型甕口縁部破片。推定口径18.1cm。色調は明褐色を呈し、胎土は長石、赤色粒子含む。内面横ハケ、外面縦ハケの 器面調整が施される。9・土師器甕底部破片。推定底径9.6cm。内面横ハケの器面調整が施され、色調は褐色を呈する。10・土師器甕底部破片。推定底径8.9cm。内面横ハケ、外面縦ハケの器面調整、色調は内面淡褐色、外面暗褐色を呈する。内面横ハケ、外面縦ハケの器面調整が施される。11・推定口径33.8cm。口縁部が厚口の口縁を呈する。内面横ハケ、外面縦ハケの器面調整が施され、色調は、褐色を呈し、胎土は長石、石英、金雲母含む。12・推定口径37.0cm。頸部の屈曲が不明瞭で、口縁部が末広口縁を呈す。内面横ハケ、外面縦ハケの器面調整を施す。色調は暗褐色を呈し、胎土は長石、石英、金雲母含む。10世紀第２～第３四半期に位置づけられる。

第42図　第14号住居跡出土土器　(1)



第43図　第14号住居跡出土土器　(2)

◎第14号住居跡出土土器（第42図～第43図）

本住居跡から、土師器坏・甕・灰釉陶器・鉢など19点図示した。

1・土師器坏。推定口径15.2cm、器高3.8cm、推定底径5.2cm。器面調整は内面及び外面上半横撫で、外面下半ヘラ削り。色調は淡褐色を呈し、胎土は赤色粒子含み緻密。2・土師器坏口縁部破片。推定口径13.2cm。内面及び外面横撫での器面調整が施され、色調は淡褐色、胎土は緻密。3・土師器坏底部破片。推定底径5.6cm。内面横撫で、外面下半にヘラ削りが施される。色調は淡褐色、胎土は赤色粒子含み緻密。4・灰釉陶器。推定底径6.9cm。色調

は灰褐色を呈し、長石含む。5・土師器甕口縁部破片。推定口径28.8㎝。頸部の屈曲はあまり明瞭ではない。内面横ハケ、外面縦ハケの器面調整、色調は明褐色を呈し、胎土は長石、金雲母含む。6・土師器甕口縁部破片。推定口径18.4㎝。口縁部が短く、頸部の屈曲が明瞭。内面横ハケ、外面縦ハケの器面調整が施される。色調は褐色、胎土は、長石、金雲母含む。7・土師器甕口縁部破片。推定口径29.8㎝。頸部の屈曲は緩やかになる。色調は明褐色、胎土は長石、金雲母含む。内面横ハケ、外面縦ハケの器面調整が施される。8・土師器小型甕。推定口径16.7㎝。内面横ハケ、外面縦ハケの器面調整が施され、色調は褐色、胎土は長石、金雲母含む。9・土師器甕口縁部破片。推定口径28.5㎝。頸部の屈曲は不明瞭で、末広口縁を呈する。内面横ハケ、外面縦ハケの器面調整が施される。色調は明褐色。胎土は、長石、赤色粒子含む。10・土師器甕底部破片。推定底径8.0㎝。内面横ハケの器面調整。色調は褐色を呈し、胎土は長石、金雲母含む。また、底部には木葉痕がみられる。11・土師器甕口縁部破片推定口径33.6㎝。内面横ハケ、外面縦ハケの器面調整が施され、色調は明褐色を呈し、胎土は長石、金雲母含む。12・土師器甕口縁部破片。推定口径28.0㎝。頸部の屈曲は不明瞭で、末広口縁を呈する。内面横ハケ、外面縦ハケの器面調整、色調は内面赤褐色、外面暗褐色、胎土は長石、赤色粒子含む。13・土師器甕口縁部破片。推定口径33.2㎝。口縁部の屈曲は不明瞭で、口縁部が短く、あまり外反せず開かない。内面横ハケ、外面縦ハケの器面調整、色調は内面褐色、外面暗褐色を呈する。14・須恵器底部破片。推定底径13.0㎝。色調は灰褐色を呈する。15・土師器甕底部破片。推定底径14.0㎝。色調は明褐色を呈し、胎土は長石、金雲母含む。16・土師器鉢。推定口径29.8㎝。口縁部が、厚口口縁を呈し、頸部が強く屈曲しする。色調は明褐色、胎土は長石、金雲母含む。内面横ハケ、外面縦ハケの器面調整が施される。17・土師器鉢。推定口径34.0㎝。頸部の屈曲はほとんどみられず、緩やかに外反しながら開く。内面横撫で、外面縦ハケの器面調整が施され、色調は明褐色を呈し、胎土は長石、金雲母含む。18・土師器鉢。推定口径36.9㎝。内面横ハケ、外面縦ハケの器面調整が施され、色調は、褐色、胎土は長石、金雲母含む。19・土師器鉢。口径41.0㎝、器高20.0㎝、底径8.2㎝。頸部は緩やかに屈曲し、胴部中央わずかに膨らむ。内面横ハケ、外面縦ハケ調整が施される。また、底部には木葉痕がみられる。本住居跡は、10世紀第４四半期に位置づけられる。

◎第20号土坑出土土器（第44図）土坑一覧表。

1・浮線文系の深鉢型土器の胴部破片である。地文は縄文で、浮線上の刻目は細く繊細ながら浮線は太い。2・浮線文系の深鉢の口縁部破片。大型の深鉢型土器で、口縁部は強く内湾し、波状になる。地文は縄文で、口縁部外面の浮線は曲線をなし非常に緻密である。１・２はいずれも縄文時代前期末の諸磯ｂ式期。

◎第62号土坑出土土器（第45図）土坑一覧表。

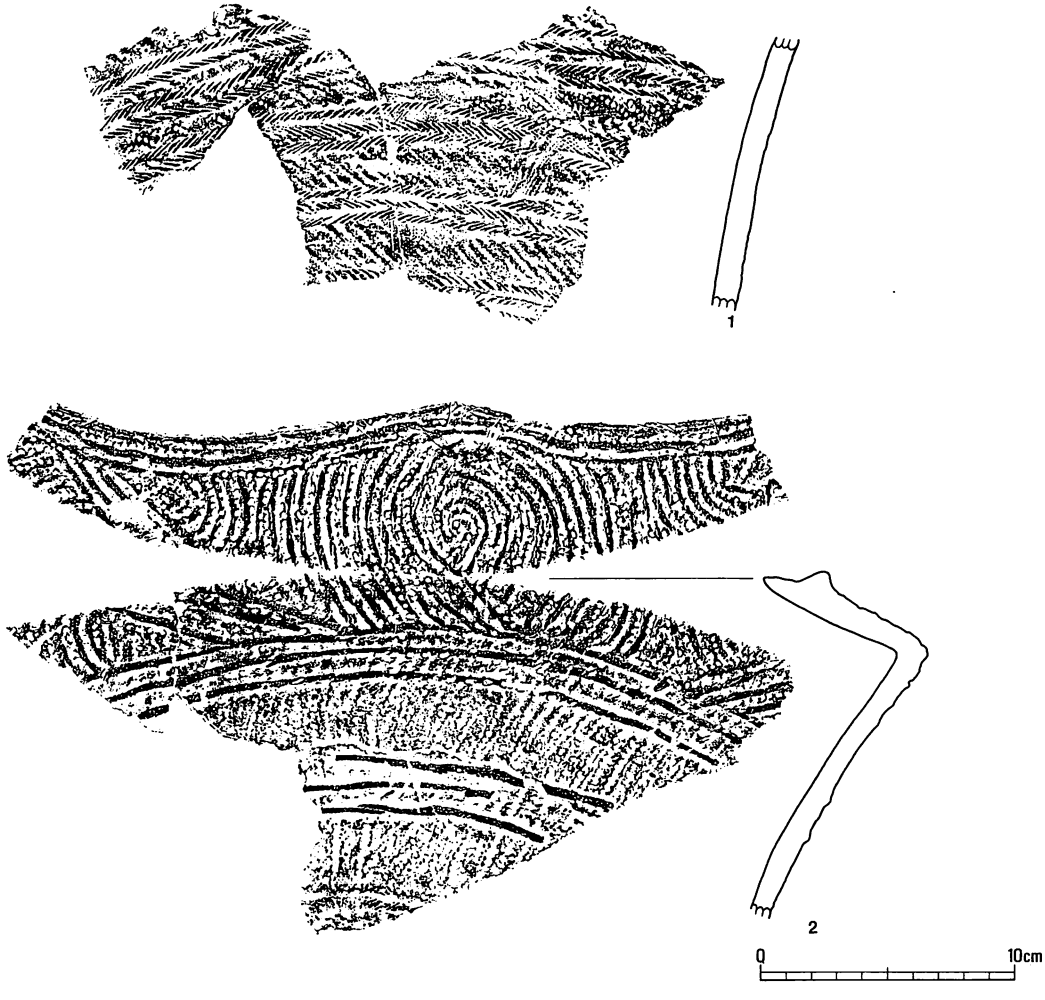
屈折底と、２単位の大型塔状把手と２対の小型突起状把手が有する深鉢で、底部が欠損している。大型の塔状把手は中空で把手は双孔を有する。また、外面に簡略化された人面装飾が施されるが、片方には省略化される人面と思われる装飾を有する。胴部には、隆帯による区画が施される。色調は、暗褐色で金雲母含み、焼成良好である。縄文時代中期井戸尻Ⅲ式期に比定される。

◎第３号集石土坑出土土器（第46図・４）

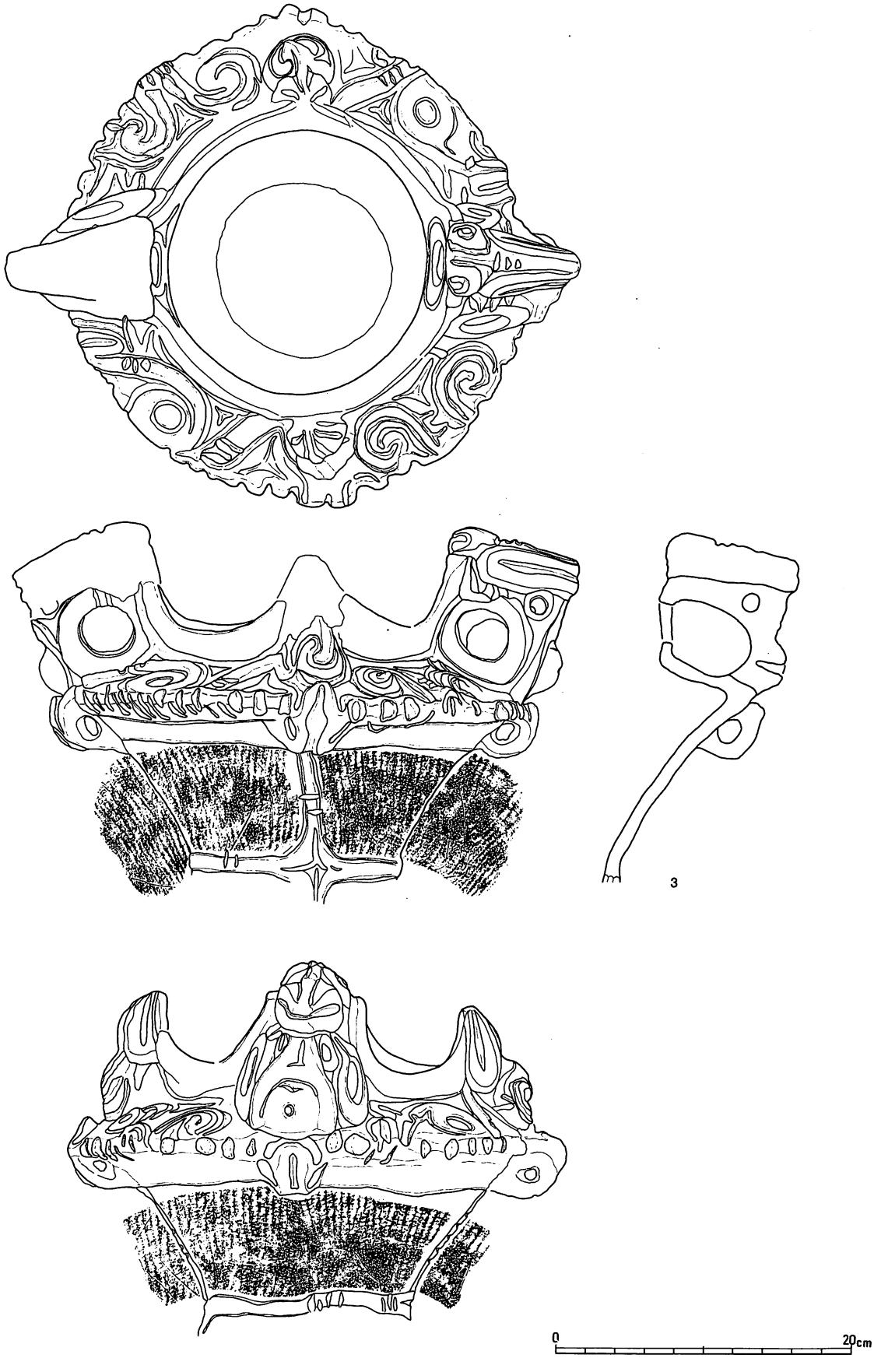
深鉢。集石土坑内覆土中に小破片で出土しており、波状口縁の結節状浮線文が付される土器で、浮線文による文様がレンズ状、渦巻き状に施される。前期後半の諸磯ｃ式期に比定される。

◎第４号集石土坑出土土器（第46図・５）

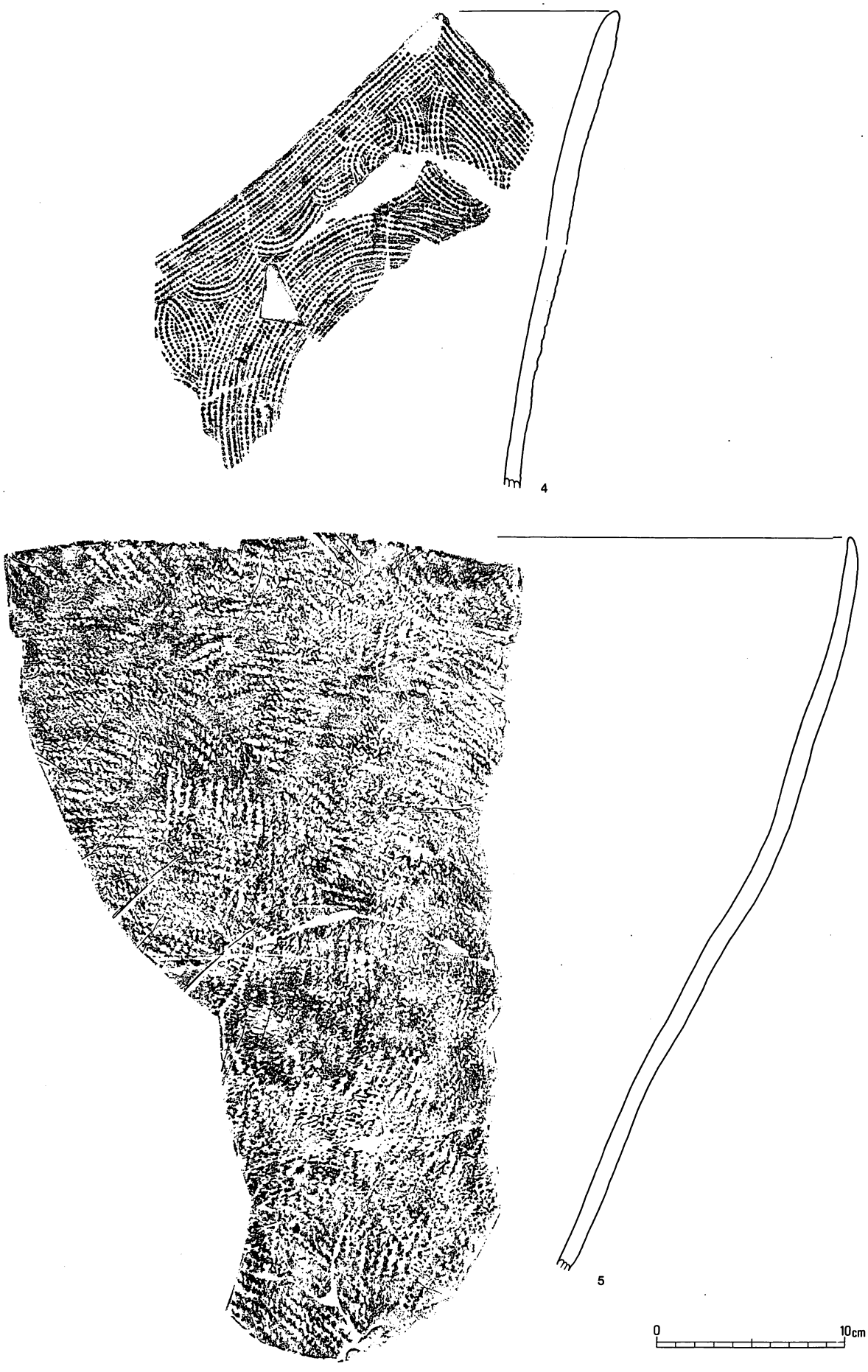
深鉢。集石土坑としているが、円筒状を呈する土坑の中位から出土している。口縁部は、緩やかな波状を呈する大型の深鉢で、多方向から縄文による施文が施される。前期後半の諸磯ｂ式期に比定される。



第44図　土坑内出土土器（1）



第45図　土坑内出土土器　(2)



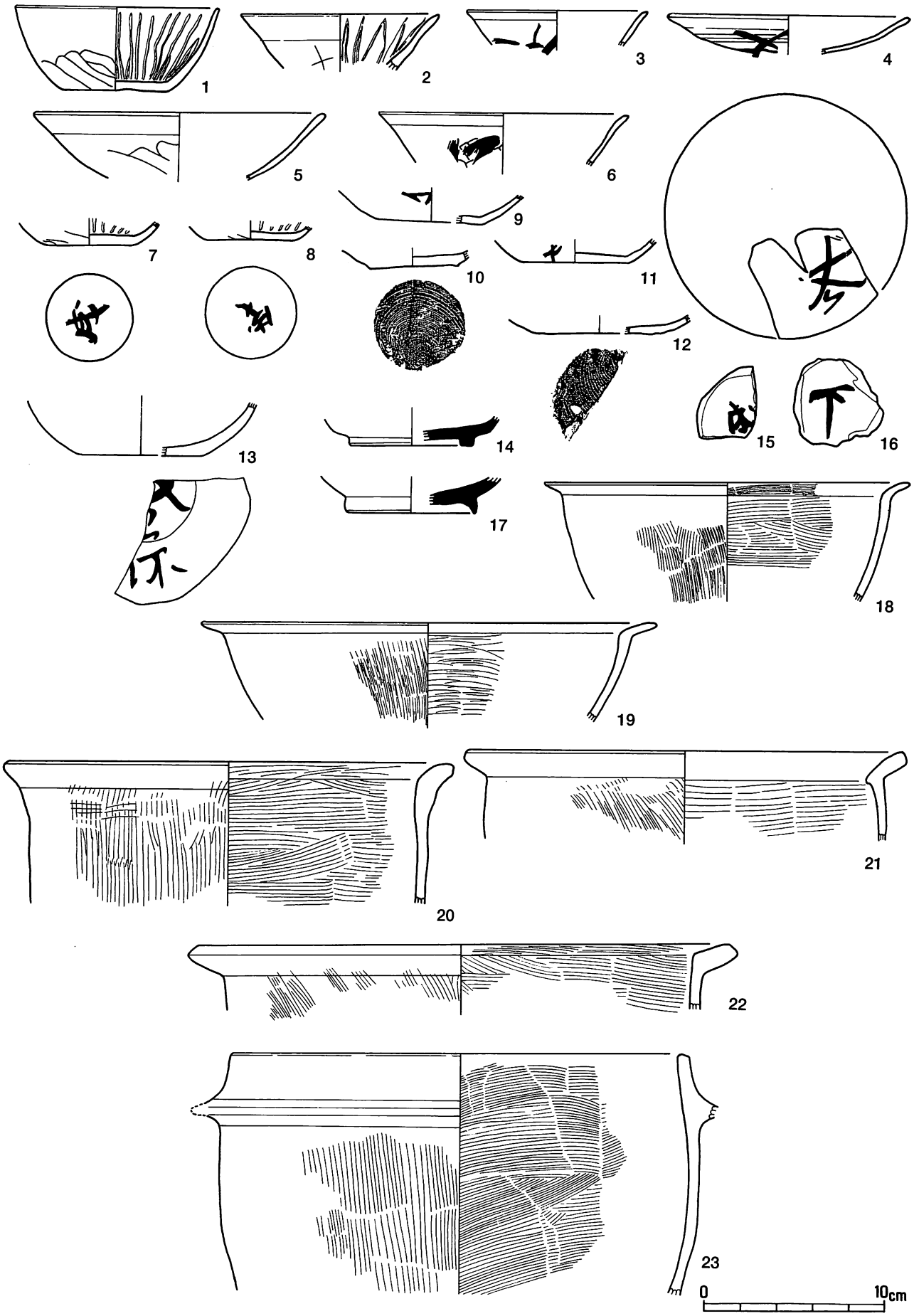
第46図　土坑内出土土器　(3)

第２節　遺構外出土土器

遺構外出土遺物（第47図）平安時代

本遺跡から、出土した墨書土器や、主な遺物を図示した。

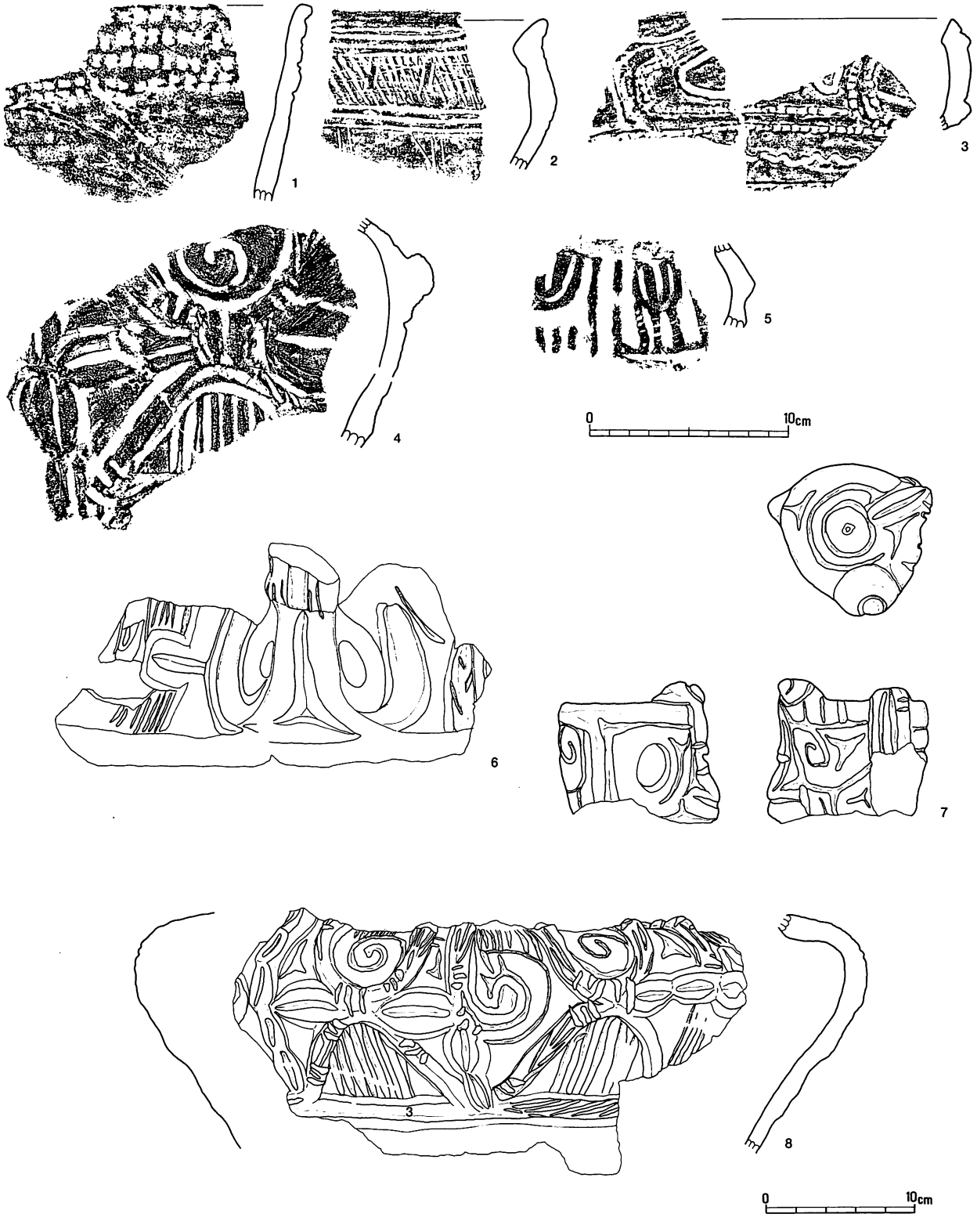
1・H－７グリッド出土。土師器坏。口径11.3㎝、器高4.5㎝。底径5.7㎝。内面に放射状暗文、外面上半横撫で、外面下半ヘラ削りが施される。色調は明褐色、胎土は赤色粒子含み緻密。９世紀前半代。2・F－11グリッド出土。土師器坏口縁部破片。推定口径11.0㎝。胴部外面には×印の線刻が刻まれている。９世紀後半～10世紀前半代。3・H－21グリッド出土。土師器坏口縁部破片。推定口径10.0㎝。色調は明褐色を呈し、胎土は赤色粒子含み緻密。内外面横撫での器面調整が施される。器体部外面には、墨書がみられる。（第38図・5）の土師器と同様な、墨書の一部と思われる。10世紀前半代。4・H－22グリッド出土。土師器皿。推定口径13.4㎝。底部外面には回転ヘラ削り、内外面上半横撫での器面調整。色調は、赤褐色を呈し、胎土は赤色粒子含み緻密。器体部外面には、墨書が記されるが、異体字と思われ判読不明。10世紀前半代。5・E－13グリッド出土。土師器坏。推定口径16.2㎝。内面及び外面上半横撫で、外面下半ヘラ削りが施される。口縁端部がやや玉縁状になる。10世紀後半代。6・H－21グリッド出土。土師器坏口縁部破片。推定口径14.0㎝。口唇部が、やや玉縁状になる。色調は内面赤褐色、外面淡褐色を呈する。胎土は緻密で、内面及び外面上半横撫で、外面下半ヘラ削りが施される。外面胴部に墨書が施されるが、一部のため判読不明である。10世紀後半代。7・H－９グリッド出土。土師器坏底部破片。底径4.8㎝。内面に暗文、外面にはヘラ削りが施され、底部外面には、第３・５号住居跡に多くみられる『成』の文字が記される。8・C－10グリッド出土。土師器坏底部破片。底径5.0㎝。７と同様、内面暗文、外面にヘラ削りが施される。底部外面に『成』の墨書がみられる。9・F－15グリッド出土。土師器坏底部破片。推定底径5.7㎝。色調は、明褐色を呈し、内外面撫で調整が施される。器体部外面には、墨書が記されているが小破片のため判読不明。10・E－13グリッド出土。土師器坏底部破片。底径5.0㎝。色調赤褐色、胎土は緻密、底部外面には、回転糸切り痕がみられる。11・F－4グリッド出土。土師器坏底部破片。底径6.0㎝。色調は赤褐色を呈し、胎土は緻密。胴部外面には墨書がみられる。12・E－10グリッド出土。土師器坏底部破片。推定底径5.4㎝。器面調は内外面横撫で、底部外面には回転糸切り痕がみられる。13・表採。土師器坏胴部破片。推定底径6.6㎝。底部外面から胴部にかけて、墨書が施されるが『□□坏』と記されている。県内ではあまり類例のない貴重な資料である。14・I－21グリッド出土。灰釉陶器の底部破片。15・F－15グリッド出土。坏底部破片。底部外面に『成』の墨書が記される。16・F－14グリッド出土。15同様に坏底部破片で、外面に『下』の墨書が記される。17・H－17グリッド出土。14同様灰釉陶器の底部破片。18・I－6グリッド出土。土師器甕口縁部破片。推定口径20.1㎝。頸部は強く外反し、口縁部が大きく開く。色調は褐色、内面横ハケ、外面縦ハケの器面調整が施され、胎土は長石、金雲母含む。19・I－19グリッド出土。土師器甕口縁部破片。推定口径25.2㎝。頸部の屈曲が強く、口縁部は大きく開く。内面横ハケ、外面縦ハケの器面調整が施される。色調は、明褐色を呈し、胎土は金雲母含む。20・H－20グリッドに位置する。頸部は緩やかに屈曲し、末広の厚口口縁を呈する。内面横ハケ、外面縦ハケの器面調整が施される。色調は赤褐色、胎土は長石、金雲母含む。21・I－6グリッド出土。土師器甕口縁部破片。推定口径24.3㎝。内面横ハケ、外面縦ハケの器面調整が施される。22・I－6グリッド出土。土師器甕口縁部破片。推定口径30.3㎝。内面横ハケ、外面縦ハケの器面調整が施される。色調は、赤褐色を呈し、胎土は長石、石英、金雲母含む。23・C－8グリッド出土。推定口径25.4㎝、推定鍔径29.8㎝。内面横ハケ、外面縦ハケの器面調整を施す。



第47図　平安時代遺構外出土土器

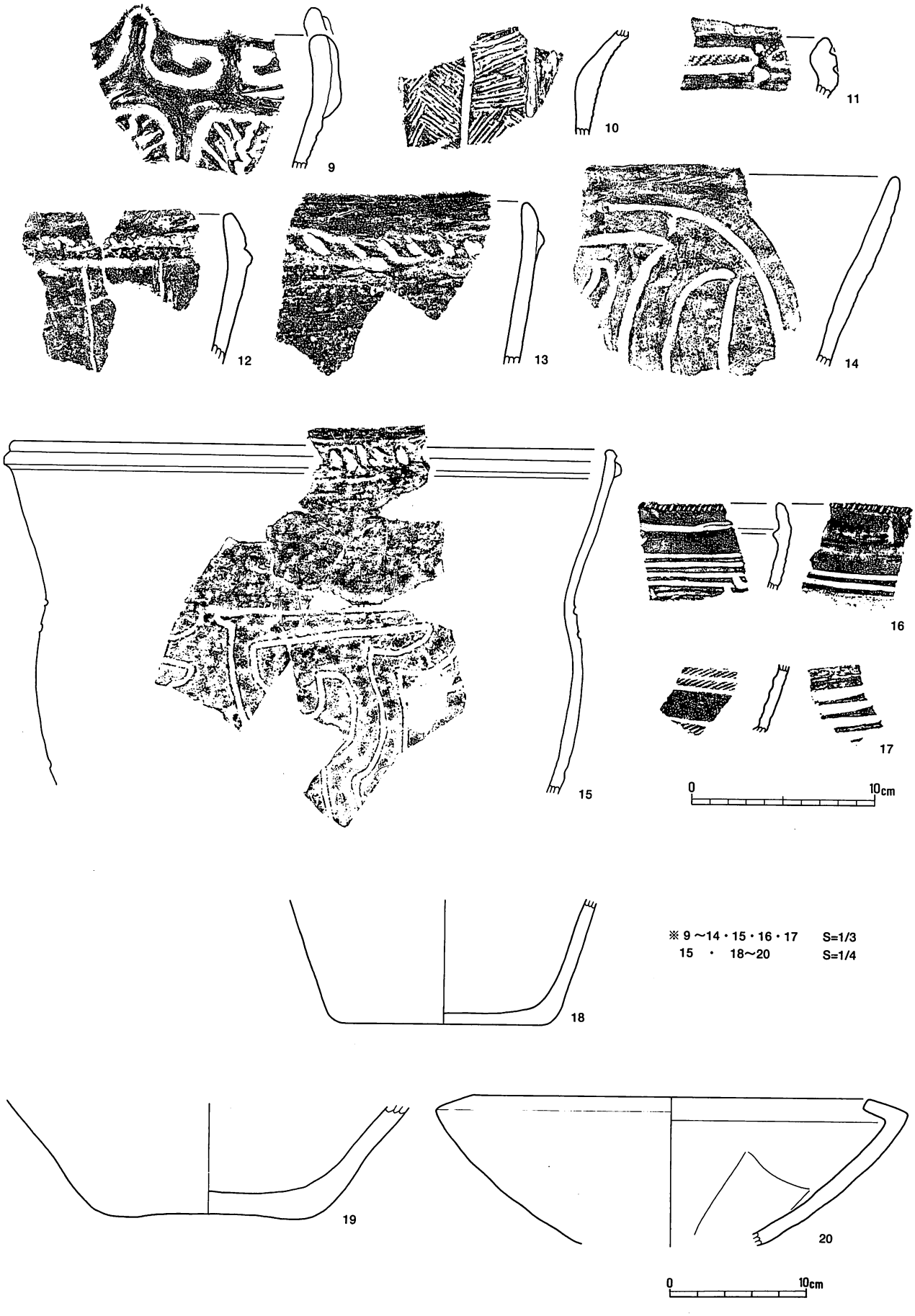
遺構外出土土器（第48図～49図）縄文時代

1・深鉢の口縁部破片。口唇端部と口縁部に、2本一対4条の棒状による刺突文が施される。胎土はやや粗く、縄文前期中頃に比定される。2・深鉢の口縁部破片。口唇部が「く」の字状に外反する。口唇下部が内湾する。全体に半截竹管による押引文が施される。中期初頭に比定される。3・深鉢の口縁部破片。2同様、口縁部が内湾し、隆帯による楕円状の区画がなされ、区画内には楕円沈線文や、区画の脇には連続する角押文が巡る。中期中葉に比定される。4・深鉢の胴部破片。十文字に連鎖状隆帯を施し、隆帯による区画がなされ、人体モチーフなどが施される。区画内は沈線による施文がみられる。中期中葉に比定される。5・深鉢の胴部破片。縦方向の隆帯やU字状の区画による文様を施す。中期中葉に比定される。6・深鉢の強くくびれる部分に装飾される把手部で、把手部には貫通孔が施される。中期中葉に比定される。7・深鉢の口縁部に付された塔状把手部分で、沈線による渦巻文、三叉文、円文が施され、貫通孔がみられる。中期中葉に比定される。8・肩部が強く内湾する胴部破片で、縦方向と横方向に連鎖状隆帯を施し、人体モチーフなどの区画内に三叉文、渦巻文、沈線文等の文様を施す。中期中葉に比定される。9・深鉢の口縁部破片。口縁部は沈線による唐草文様がみられ、口唇部に小突起が形成される。胴部には、沈線による区画がなされ、区画内には逆「ハ」の字状文で充填され、区画中央には縦方向に蛇行する沈線がみられる。中期後半に比定される。10・深鉢の胴部破片。胴部中央がくびれる形態を持ち、縦方向の沈線文で区画され、区画内に横方向・「ハ」の字の沈線が施される。中期後半に位置づけられる。11・深鉢の口縁部破片。口縁部がキャリパー形を呈すると思われ、口縁部文様は、楕円区画文がみられ区画内に縄文が充填される。また、区画の境目には、円形の刺突文が上下2点施される。中期後半に比定される。12・深鉢の口縁部破片。口縁部がやや内湾し、口縁部下部には、微隆起が巡り、微隆起上部に連続円形刺突文がある。胴部には、縦方向の沈線がみられ区画文となる可能性がある。中期終末から後期初頭に比定される。13・深鉢の胴部破片。緩やかな波状口縁を呈し、口縁部に横方向の微隆起が巡り、斜め方向の刻みが施される。後期初頭に比定される。14・深鉢の口縁部破片。胴部には沈線による区画文が施される。中期終末から後期初頭に比定される。15・大型の深鉢口縁部破片。推定口径32.8㎝。口縁部から胴部にかけて緩やかにくびれる。口縁部には微隆起による装飾に刻みが施される。胴部の文様体は、沈線による区画がみられる。後期初頭に比定される。16・鉢形の口縁部破片で、口縁部がやや内湾する。内面及び外面は丁寧なミガキが施され、横方向の沈線が内面及び外面に施される。後期中葉に比定される。17・鉢形の口縁部破片で、16同様に横方向の沈線を基本とし、外面にはより糸文帯と無文帯とに分かれる。後期中葉に比定される。18・深鉢底部破片。推定底径15.0㎝。外面は無文である。19・深鉢形の底部破片。推定底径14.0㎝。深鉢底部中央はやや凹みがみられる。20・浅鉢形土器。推定口径28.6㎝。口縁部が強く内側に屈曲し、胴部は丸みを帯びる。口縁部及び胴部には文様はなく、ミガキが丁寧に施される。



※1～5　S=1/3
6～8　S=1/4

第48図　遺構外出土土器（1）



第49図　遺構外出土土器　(2)

◎第50図１～16。

諸磯ｂ式土器を一括した。１～５が浮線文系深鉢型土器。６～16が沈線文系深鉢型土器。１～５はいずれも地文に縄文が施される。１は口縁部が緩やかに内湾し、浮線自体は緻密に施され、刻目は細く長い。２は、浮線があまり明瞭ではなく、扁平。刻目は１に比べ太い。３は浮線が緻密に施され、刻目は明瞭ではなく短い。４は口縁部破片で、浮線文が横方向にみられる。刻目は細く緻密に施される。６～16は沈線系の深鉢型土器で、７・９・10～13には地文に縄文が施される。６は口縁部の破片で、円形の沈線とボタン状添付文が施される。７は口縁部がやや内湾し、口唇部が折り返る。８は口縁部が内湾し口唇部外面に円形の刺突文が施される。９は口縁部の屈折が強く、波状の程度は緩い。口縁部外面上部には、半截竹管による結節状浮線文（沈線）がみられる。10も口縁部の屈折が強く、波状の程度は緩い。口縁部外面上半には半截竹管による押引文がみられる。11は沈線は細く繊細で、横方向に施される。12・13は頚部のくぶれと、突出する部分の胴部破片である。４本１単位の平行沈線が巡る。14～16は、深鉢の底部破片で、地文には縄文は施されない。２本１単位の半截竹管による沈線が廻る。

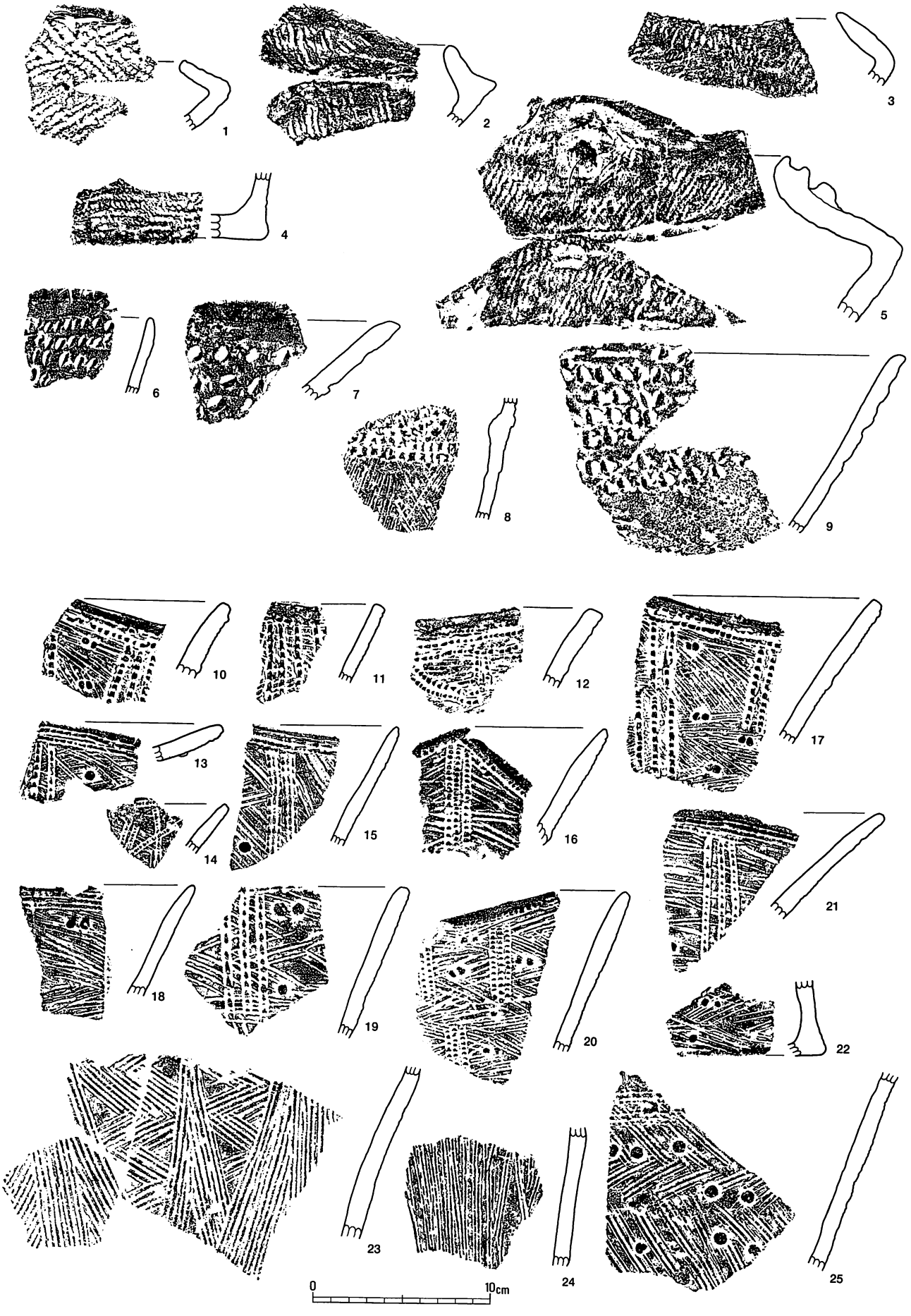
◎第51図１～５は諸磯ｂ式期の縄文系の土器を図示した。１～３、５はいずれも波状口縁を呈する深鉢の口縁部の破片で、「く」の字型に屈折する。５には比較的大きな円形添付文がみられる。４は、深鉢の底部破片である。

◎第51図６～25、第52図１～21は、いわゆる諸磯ｃ式期の土器片を一括した。

６～９は、深鉢の口縁部破片で、いずれも、棒状の工具を左ないし、右方向から斜めに押しつけ、この部分の文様帯が爪形状の連続文としてみられる。８の胴部には直線、羽状などの集合沈線が施される。10～12・17は波状口縁を呈する深鉢の口縁部破片で、いずれも細い結節状浮線文が２本～３本１対で施され、10・17には円形添付文が２個一対で付される。13～25、第52図１～21は、棒状添付文が完全に結節状浮線文となり、繊細なイメージが伺える。円形添付文も２個一対で施され、口縁部は波状を呈するものである。口縁部や胴部においては、地文として直線・羽状・弧状・渦巻き状の沈線が施される。11～21については、結節浮線文が発達するもので、口縁部～胴部上半に渦巻き状の結節浮線文が向かい合って施され、口縁部は波状を呈するものである。底部は、18～20にみられるように中部高地型でみられるトロフィー型土器の底部同様の文様を持つものである。

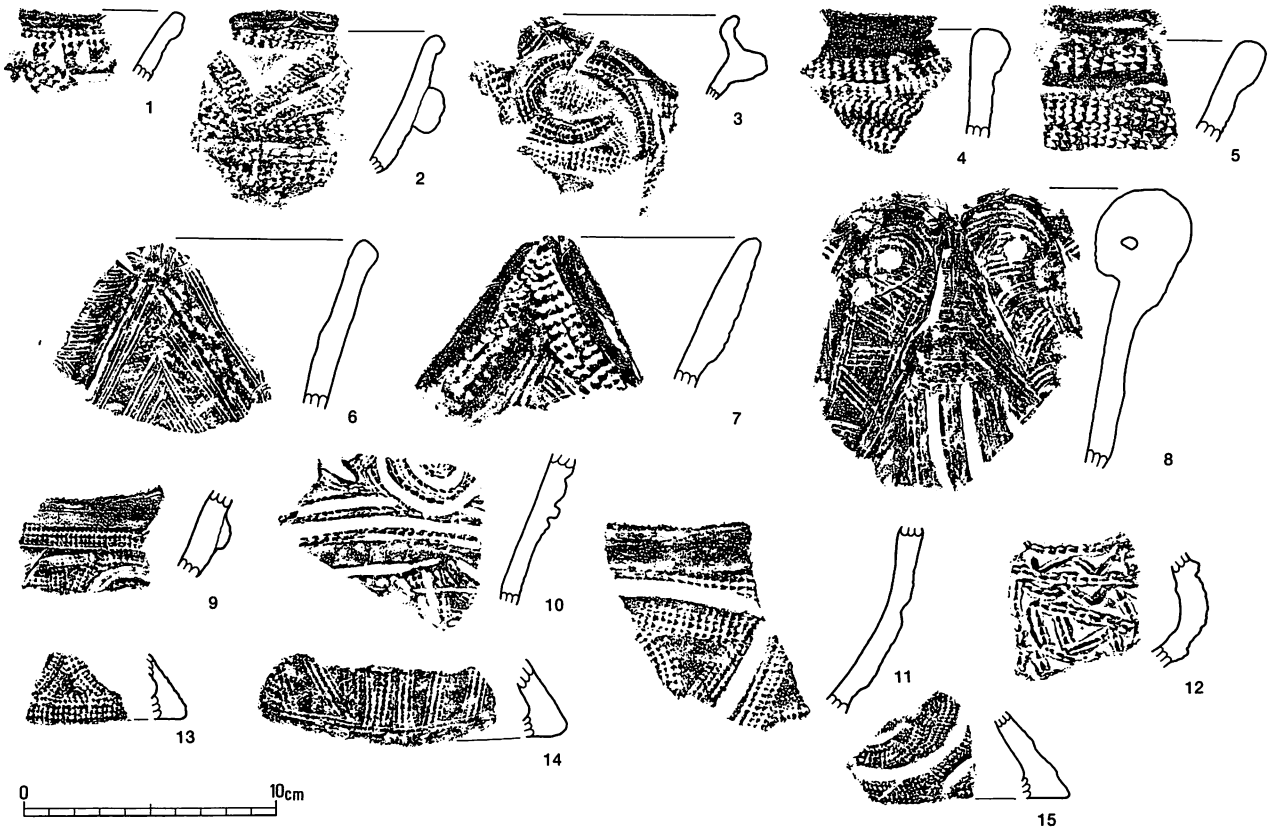
◎第53図１～15は、前期最終末の十三菩提式期に位置づけられると考えられるものを一括した。１は、口縁下部には抉り取るような形で、三角形状の陰刻で文様が施されるものである。２は、深鉢の口縁部破片で、結節凹線文を中心とするものである。３・２と同様に結節凹線文が渦巻状を呈している。

第50図　遺構外出土土器　(3)



第51図　遺構外出土土器　(4)

第52図　遺構外出土土器　(5)



第53図　遺構外出土土器 (6)

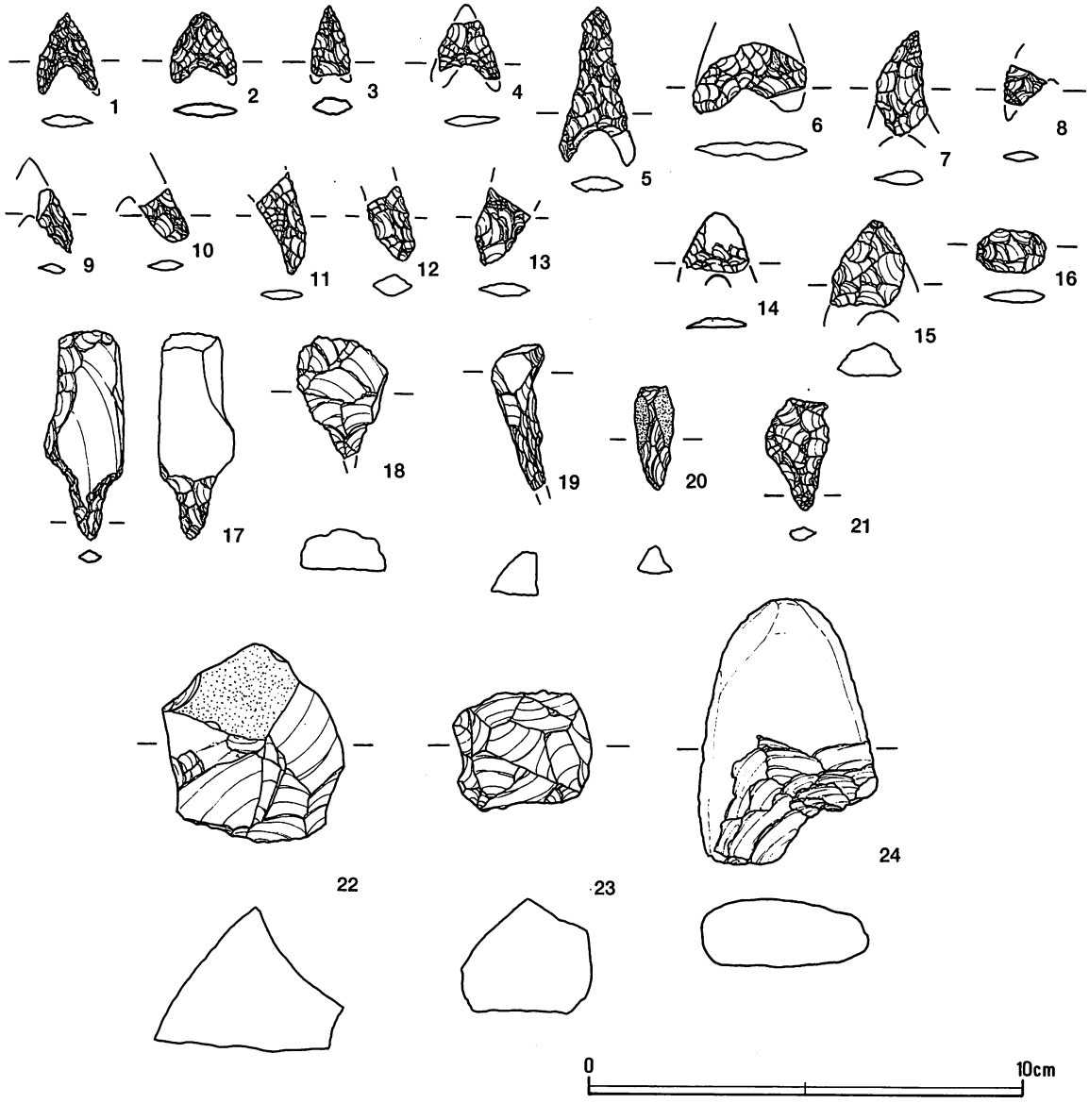
第３節　出土石器

◎石　　器

今回の調査では、生活用品の一部といわれている石器の出土量は比較的少ない。こうした状況について、本遺跡は平安時代を中心とした集落の遺跡であり、縄文時代前期～後期に至るまで土器片が出土しているものの、ほとんど遺構に伴っていない。これは、本遺跡が、縄文時代にいては居住地としてではなく、狩猟のための陥し穴が検出されていることから、環境を生かした生活の場と考えられることから、石器などの出土量が少ないのかもしれない。なお、これらについては、各器種ごとの報告を終了した後に一覧表に示すこととする。

◎石鏃・石錘（第54図）・第２表

本遺跡から、出土した石鏃・石錘などの石器類は、24点出土している。(第54図・第２表)。石材は、圧倒的に黒曜石が多く、中にはチャート・頁岩類が含まれる。石鏃としたものが15点、石錘が５点、その他の石器が４点含まれる。石鏃は、完形もしくはほぼ完形にちかいものは４点と少なく、ほとんどが先端部もしくは脚部が欠損している。石錘は、５点ともほぼ完形に近く、良好のものが多い。



第54図　出土石器　(1)　石鏃・石錘

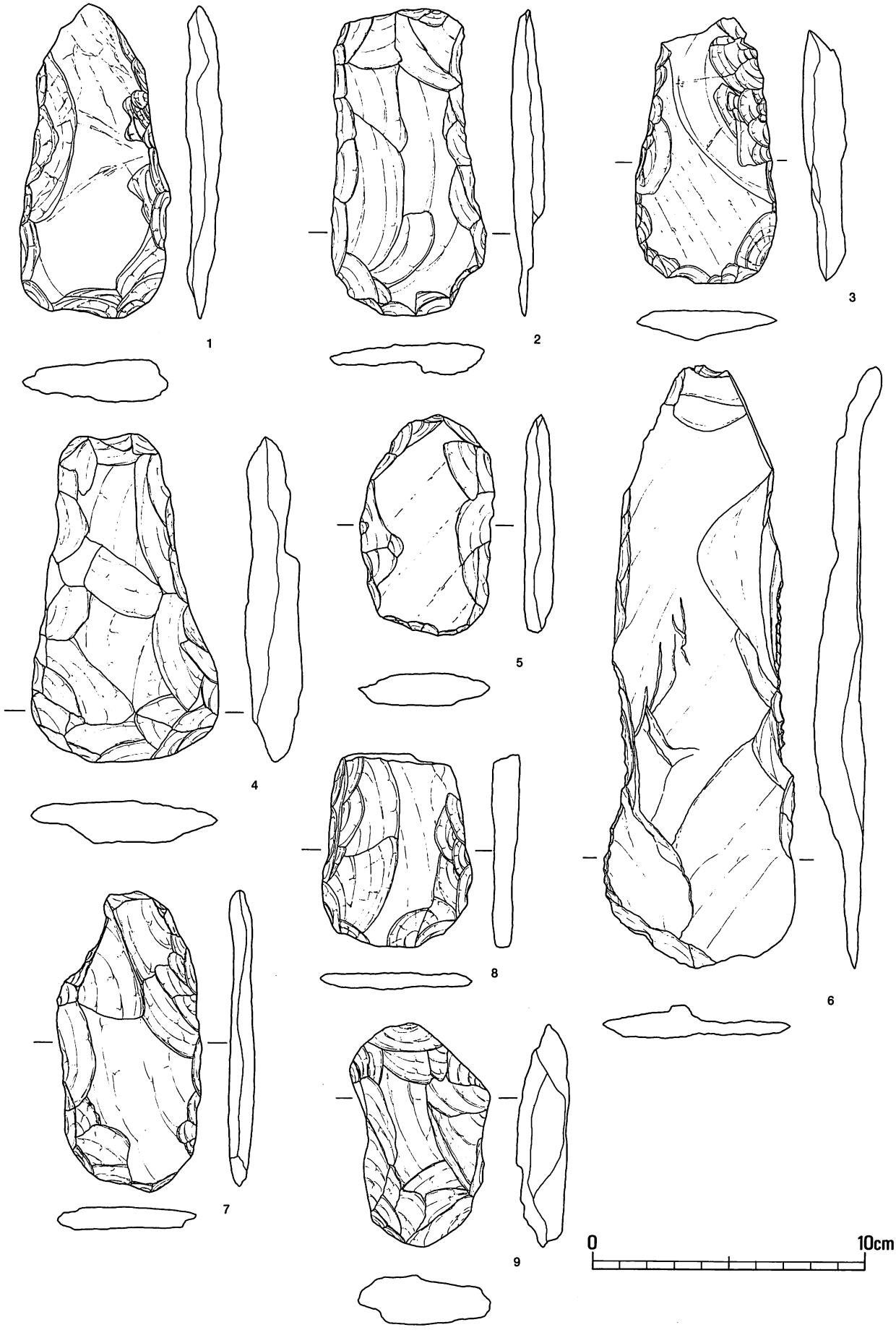
第２表　石鏃・石錘（第54図）

単位（cm・g）

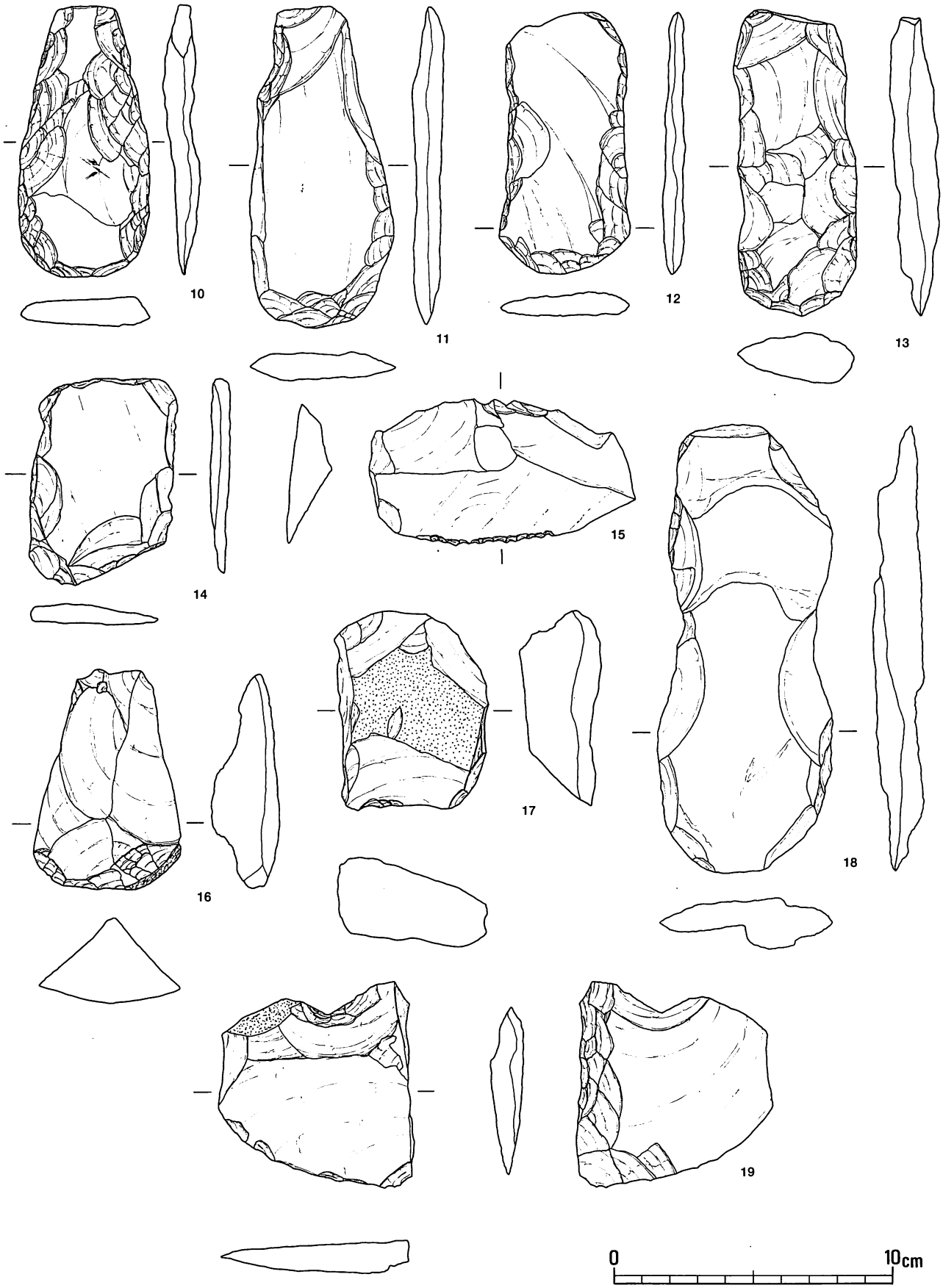
番号	出土位置	長　さ	巾	厚　さ	重　量	石　材	備　　考
1	G−7	1.80	1.40	0.20	0.40	黒 曜 石	ほぼ完形。
2	F−14	1.60	1.50	0.15	0.60	黒 曜 石	ほぼ完形。
3	F−11	1.60	0.90	0.40	0.50	黒 曜 石	両脚部欠損。
4	F−14	(1.40)	(1.40)	0.20	0.50	黒 曜 石	先端部、脚部欠損。
5	D−10	3.50	1.60	0.30	1.30	黒 曜 石	片方脚部欠損。
6	F−11	(1.50)	(2.60)	0.40	0.90	黒 曜 石	先端部、脚部欠損。
7	表　採	(2.40)	(2.40)	0.30	0.80	黒 曜 石	脚部欠損。
8	D−7	(0.90)	(1.00)	0.20	0.20	黒 曜 石	先端部、脚部欠損。
9	2号住	(1.60)	(0.90)	0.20	0.20	黒 曜 石	先端部、脚部欠損。
10	D−6	(1.20)	(1.10)	0.20	0.20	黒 曜 石	先端部、脚部欠損。
11	I−6	(2.40)	(1.10)	0.20	0.50	黒 曜 石	先端部、脚部欠損。
12	2号住	(1.70)	(1.10)	0.50	0.60	黒 曜 石	先端部、脚部欠損。
13	24　土	(1.70)	(1.80)	0.30	0.40	黒 曜 石	先端部、脚部欠損。
14	G−14	(1.30)	(1.50)	0.20	0.50	黒 曜 石	脚部欠損。
15	H−8	(2.00)	(1.60)	0.80	1.80	黒 曜 石	脚部欠損。
16	表　採	(1.00)	(1.60)	0.30	0.50	黒 曜 石	用途不明。
17	D−15	4.75	1.90	0.30	0.60	頁　　岩	石錘。
18	D−9	(2.80)	2.10	0.60	4.90	黒 曜 石	石錘。
19	H−6	(3.30)	1.20	1.00	3.40	黒 曜 石	石錘。
20	2号住	2.40	0.90	0.60	1.40	黒 曜 石	石錘。
21	E−15	2.60	1.50	0.30	2.50	珪質頁岩	石錘。
22	C−10	4.00	4.10	3.10	43.50	黒 曜 石	
23	E−10	2.80	2.70	2.50	26.10	黒 曜 石	
24	D−6	6.00	4.10	1.50	54.30	蛇 紋 岩	磨製石斧。

◎打製石斧（第55〜56図）第３表

本遺跡から、打製石斧は19点出土しており、第55〜56図に図示した。石材の内訳は、粘板岩類７点、片岩類４点、頁岩類３点、泥岩３点、凝灰岩１点、砂岩１点である。出土地については、ほとんどが遺構外出土のもので、住居内出土の石器については、いずれも平安時代の住居跡内であり、混入品と考えられる。形態についてはっきりしているものは、撥形が圧倒的に多く、ほかに短冊形・分銅形がわずかに含まれる。



第55図　出土石器 (2) 打製石斧　その1



第56図　出土石器 (3) 打製石斧　その２

第３表　打製石斧一覧表　　単位（cm・g）

番号	出土位置	形　態	長　さ	基部幅	刃部幅	刃部形	重　量	石　　材
1	7号住	撥　形	11.30	3.90	5.30	円　刃	99.0	片岩
2	2号住	撥　形	11.10	4.60	5.70	円　刃	95.0	粘板岩
3	2号住	撥　形	9.10	3.50	4.90	円　刃	83.0	泥岩ホルンフェルス化
4	7号住	撥　形	11.80	4.10	6.80	円　刃	176.0	片岩
5	56号土	撥　形	8.00	4.50	4.80	円　刃	66.0	粘板岩
6	I−4	撥　形	21.80	5.50	6.80	円　刃	275.0	粘板岩
7	K−17	撥　形	10.70	5.10	5.10	円　刃	77.0	泥岩
8	C−13	撥　形	7.00	4.40	5.60	円　刃	49.0	凝灰岩
9	H−5	撥　形	8.10	—	4.80	円　刃	87.0	粘板岩
10	G−4	撥　形	9.60	3.70	4.70	円　刃	69.0	頁岩
11	表　採	撥　形	11.40	2.90	5.20	円　刃	93.0	粘板岩
12	表　採	短冊形	9.20	4.30	4.60	円　刃	52.0	粘板岩
13	F−7	短冊形	10.90	3.90	4.20	円　刃	107.0	片岩
14	E−10	撥　形	7.00	4.90	4.50	斜　刃	40.0	粘板岩
15	I−20	—	5.00	9.50	—	横　刃	102.0	頁岩
16	I−6	撥　形	7.90	3.00	5.10	円　刃	86.0	泥岩
17	I−7	—	7.00	—	—	—	147.0	砂岩
18	I−23	分　銅	15.90	5.80	6.10	円　刃	147.0	片岩
19	4号土	—	7.30	—	—	—	73.0	頁岩

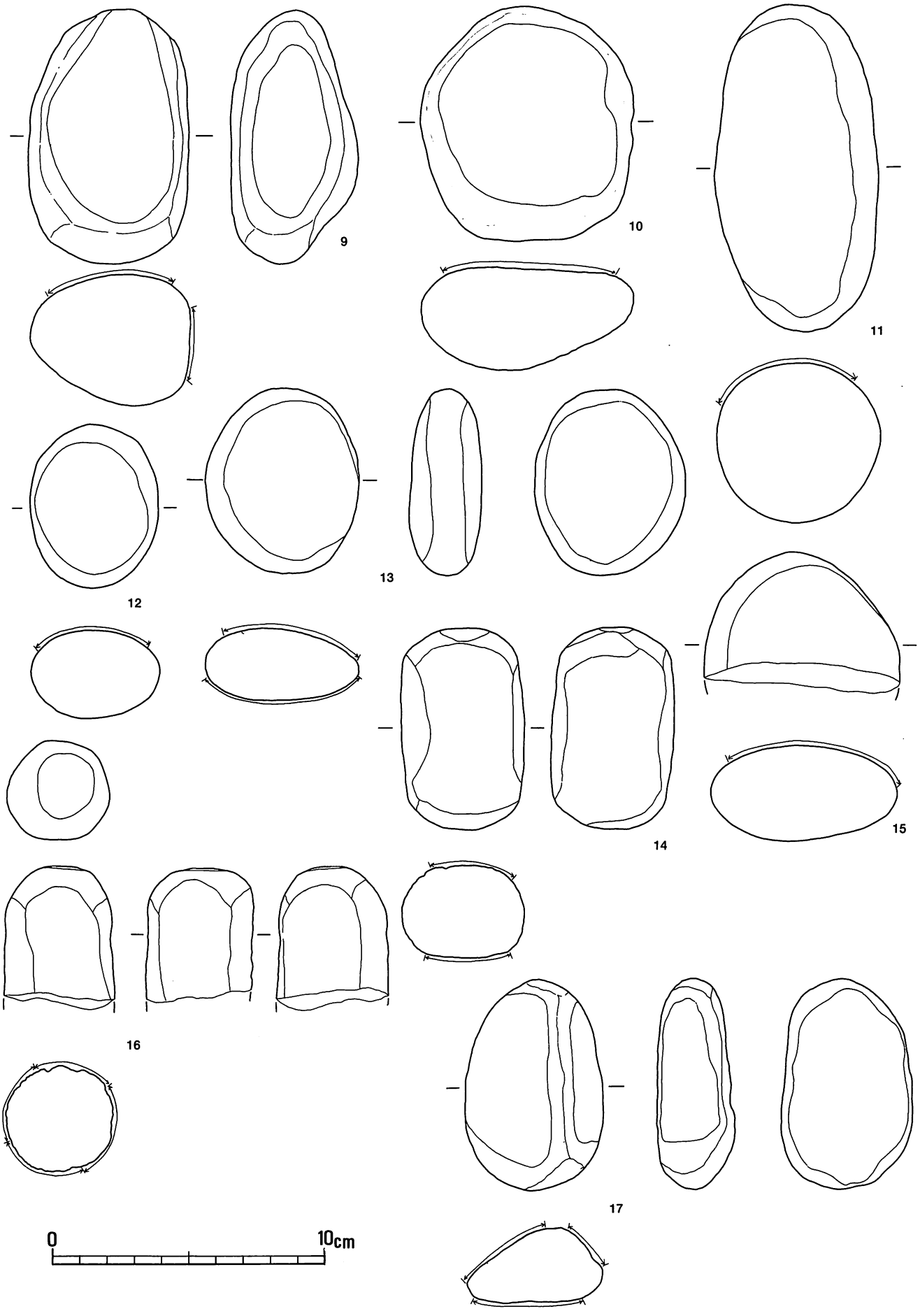
◎**磨　　石**（第57〜58図）第４表。

本遺跡から出土した磨石など第57図〜第58図に17点図示した。石材は、安山岩・花崗岩・砂岩類が多く、凹みがあるものないもの、稜磨石などがみられる。この中には、縄文時代のものや、平安時代の砥石と思われるようなものもこの中に含まれている。

第４表　磨石ほか石器一覧表　　単位（cm・g）

番号	出土位置	長　さ	巾	厚　さ	重　量	石　材	使用面	そ　の　他
1	2号住	11.80	9.50	3.30	1934.0	砂　岩	3	使用による削痕。
2	7号住	9.70	3.10	2.40	360.0	安山岩	1	石錘？。
3	E−13	8.40	6.80	2.50	767.0	花崗岩	1	
4	6号住	9.60	4.70	1.80	367.0	砂　岩	2	使用による凹みあり。
5	6号住	11.70	5.10	2.60	664.0	砂　岩	2	使用による削痕。
6	48号土	5.80	5.80	4.00	614.0	花崗岩	3	
7	52号土	6.40	4.20	3.40	332.0	花崗岩	2	
8	18号土	7.80	7.30	2.80	492.0	安山岩	1	上面に凹み1カ所。
9	4号集石	9.20	5.80	4.80	1186.0	花崗岩	2	
10	D−6	8.50	7.80	3.80	1193.0	安山岩	1	
11	E−13	11.90	5.90	5.70	1918.0	礫　岩	1	
12	E−10	5.90	4.70	3.20	436.0	安山岩	1	
13	E−8	6.70	5.60	2.60	456.0	安山岩	2	
14	E−8	7.30	4.50	3.40	583.0	安山岩	2	
15	H−11	5.20	6.80	3.40	499.0	頁　岩	1	
16	F−14	5.30	3.90	3.90	386.0	安山岩	5	
17	J−17	7.70	4.90	2.70	510.0	花崗岩	3	

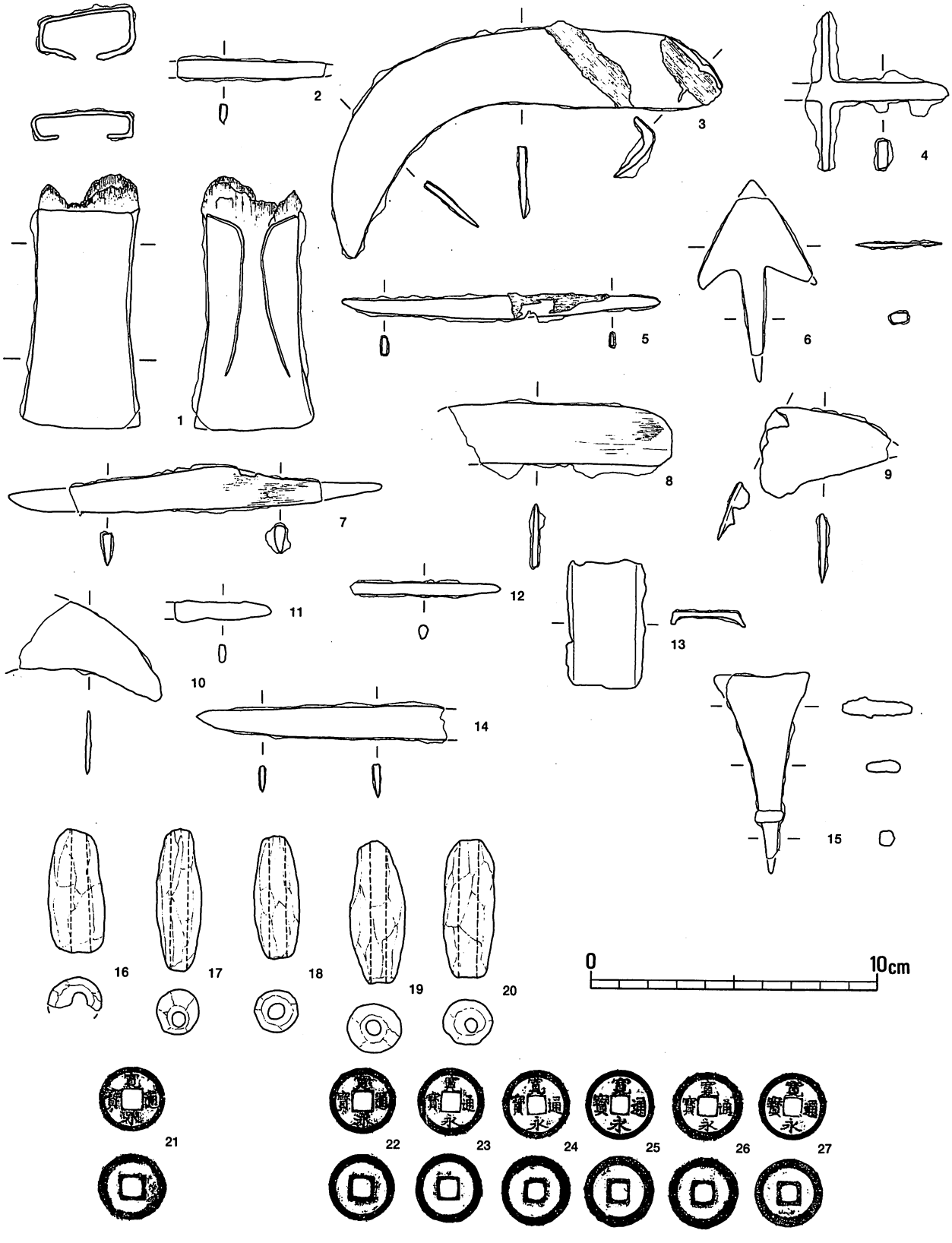
第57図　出土石器 (4) すり石 他　その1



第58図　出土石器 (5) すり石 他　その２

第４節　その他の出土遺物（第59図）

ここでは、遺構内出土・遺構外出土の鉄製品、土製品、古銭等を一括して図示した。1・鉄製斧。第３号住居跡出土。現存長さ8.8㎝、推定巾4.1㎝、厚さ0.1㎝。装着部は袋状になり、木質が残る。折り返しは、全周しない。2・第７号住居跡出土。棒状鉄製品。現存長5.1㎝、巾0.6㎝、厚さ0.2㎝。3・鉄製鎌。第７号住居跡出土。ほぼ完形。長さ13.6㎝、巾2.5㎝、厚さ2.0㎝。装着部には木質が残り、基部には折り返しが見られる。4・第８号住居跡出土。紡錘車・紡輪部。両端とも欠損しており、紡輪部が残る。現存長5.0㎝、紡輪形5.4㎝、厚さ0.3㎝。5・第７号住居跡出土。刀子。ほぼ完形。現存長11.2㎝、巾0.8㎝、厚さ0.2㎝。茎部には、木質部が残る。6・第７号住居跡出土。鉄鏃。鏃身部上部及び基部が欠損している。現存長5.4㎝、現存鏃身部2.9㎝、基部3.0㎝。鏃身部厚さ鏃身部上部は欠損しているが、正三角形を呈する。7・刀子。第８号住居跡出土。現存長8.7㎝、巾1.4㎝、厚さ0.3㎝。刃部及び基部が欠損している。8・鎌？。第８号住居跡出土。現存長7.8㎝、幅2.0㎝、厚さ0.2㎝。おそらく鎌の装着部と思われ、若干木質部がみられる。9・鎌？。第14号住居跡出土。現存長4.5㎝、幅2.3㎝、厚さ0.3㎝。10・鎌？。第12号住居跡出土。現存長4.9㎝、幅2.2㎝、厚さ0.2㎝。11・棒状鉄製品。５号掘立柱建物跡出土。現存長3.3㎝、幅0.6㎝、厚さ0.2㎝。12・棒状鉄製品。G－23グリッド出土。現存長5.2㎝、幅0.4㎝、厚さ0.3㎝。13・帯金具？。D－10グリッド出土。現存長4.4㎝、幅2.7㎝、厚さ0.2㎝。14・刀子。F－14グリッドに位置する。現存長8.6㎝、幅1.2㎝、厚さ0.2㎝。基部は欠損しており、刃部のみがみられる。15・不明鉄製品。H－21グリッド出土。現在長6.5㎝、幅2.7㎝、厚さ0.4㎝を測る。16～20は第２号住居跡出土の管状土錘である。16・1／2欠損。長さ4.3㎝、幅1.9㎝、推定孔径0.5㎝、重量9.1g。17・完形。長さ4.9㎝、幅1.6㎝、孔径0.5㎝、重さ9.9g。18・完形。長さ4.2㎝、幅1.5㎝、孔径0.5㎝、重さ8.3g。19・完形。長さ4.9㎝、幅2.0㎝、孔径0.5㎝、重さ12.2g。20・完形。長さ4.8㎝、幅1.8㎝、孔径0.5㎝、重さ13.1g。１軒の住居跡から土錘５点の出土であるが、長さ4.2～4.9㎝。重さ8.3～13.1g。本遺跡においては、比較的大きめの土錘が出土している。21～27は古銭で、21は遺構外出土、22～27は１号墓壙出土のいわゆる「六道銭」とよばれるものである。21～27はいずれも『寛永通宝』である。



第59図　その他の出土遺物　鉄製品・土製品・古銭

第Ⅴ章　おわりに

今回発掘調査された、九鬼Ⅱ遺跡について縄文時代と平安時代について若干の考察を述べてみる。

1．縄文時代について

今回の調査で出土した縄文時代の遺物は、縄文時代前期末諸磯ｂ・ｃ式期を中心とし、縄文前期～後期に至るまで、幅広く検出されている。しかし、縄文時代の遺構としてローム層を掘り込む遺構は、住居跡１軒と土坑がわずかに検出されたのみであり、本遺跡が縄文時代について言えば集落遺跡とは考えにくい。これについては、本遺跡から、ローム層を掘り込む『陥し穴』と考えられるものが３基ほど検出されている。このことから、縄文時代における本遺跡の環境は、山裾沖積地の緩斜面に位置していることから、本遺跡が縄文時代について狩猟の場と考えられる。

2．平安時代について

本遺跡から検出された住居跡は、９世紀後半～10世紀後半代に位置づけられるものであり、各住居跡の時期は伴出した土器からおおよそ以下のように分けられる。

１号住居跡・・・・・・・・・・・・10世紀後半代
２号住居跡・・・・・・・・・・・・９世紀中頃
３号住居跡・・・・・・・・・・・・９世紀後半代
５号住居跡・・・・・・・・・・・・９世紀中頃
６号住居跡・・・・・・・・・・・・10世紀後半代
７号住居跡・・・・・・・・・・・・10世紀後半代
８号住居跡・・・・・・・・・・・・９世紀後半代
９号住居跡・・・・・・・・・・・・？
10号住居跡・・・・・・・・・・・・？
11号住居跡・・・・・・・・・・・・？
12号住居跡・・・・・・・・・・・・10世紀中頃～後半
13号住居跡・・・・・・・・・・・・10世紀中頃～後半
14号住居跡・・・・・・・・・・・・10世紀後半代
15号住居跡・・・・・・・・・・・・？

以上のようになるが、９・10号住居跡については、出土遺物が全く見られず、時期は不明で、11号住居跡については抹消、15号住居跡については、２号住居跡と切り合いのため、おそらく、２号住居跡より古いものであると考えられる。このように、本遺跡は９世紀中頃～９世紀後半代、10世紀後半代に集落の形成が有ったと考えられる。

3・墨書土器について

本遺跡から、墨書土器が小破片を含め、かなりの出土量が見られた。住居跡からは、２・３・５・６・７・13・14号住から出土しており、その中でも主に、３・５・７号住居跡からの出土が目立つ。３・５号住居跡が『成』、７号住が『乃』の墨書が数多く検出されている。墨書が記される土器は圧倒的に土師器坏が多いが、他には土師器皿、灰釉陶器などごく一部に見られる。また、３・５号住居跡に見られる『成』はそのほとんどが坏の底部外面に記され、７号住居跡に見られる『乃』（得？）については坏部胴部外面にそのほとんどが記される。また、県内においておそらく出土例のない『■之坏』と判読できるものが遺構外ではあるが、検出されている。

附　編

九鬼Ⅱ遺跡出土の自然化学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

九鬼Ⅱ遺跡（都留市井倉字九鬼所在）は九鬼山の北西面の山裾沖積地緩斜面に立地する。これまでの発掘調査により、縄文時代前期末～後期・平安時代・近世の遺構・遺物が確認されている。その中で、平安時代の住居跡カマドから焼けた獣骨片や炭化種実遺体が検出された。また、近世の土坑墓から人骨と考えられる骨片が検出された。

今回の自然科学分析調査では、検出された獣骨の種類および人骨の部位や性別を明らかにすること、住居跡カマドから検出された種実遺体の種類を明らかにして平安時代頃の本遺跡における食料植物に関する資料を得ることを分析調査課題として、獣骨・人骨の同定と種実遺体同定を実施する。なお、獣骨・人骨については早稲田大学の金子浩昌氏に同定・解析を依頼したので、本報告では署名原稿として示した。

1．種実遺体同定

(1)　試料

平安時代の住居跡（2号住居跡・7号住居跡）のカマドから単体で確認された炭化種実遺体と同時代の8号住居跡覆土（水洗選別試料）である（表1）。

(2)　方法

肉眼あるいは双眼実体顕微鏡下で種類を同定した。

(3)　結果

水洗選別試料（試料名：8号住P69）からは種実遺体などは抽出されなかった。したがって、単体で得られた種実遺体の形態的特徴について示す。

・モモ（***Prunus Parsica*** Batsch）

バラ科サクラ属

核（内果皮）が検出された。褐色～黒褐色で大きさは2㎝程度。核の形は楕円形でやや扁平である。基部は丸く大きな臍点がありへこんでおり、先端部はやや尖る。一方の側面にのみ、縫合線が顕著に見られる。表面は、不規則な線状のくぼみがあり、全体としてあらいしわ状に見える。

表1　種実遺体同定結果

試料名	時　代	種類（個数）
7住　C2	平安時代	モモ（破片）
7住　C2	平安時代	同定不能
2住　C51	平安時代	モモ（1）
C－8G	平安時代	モモ（破片）
2住　C53	平安時代	モモ（1）

(4)　考察

モモは栽培の為に渡来した植物といわれている。モモは古くから人々に利用され、花の観賞や果実・種子は食用になることから、当時も食用されていた考えられる。モモは、古くは縄文時代前期に検出例が知られているが（長崎県伊木力遺跡：粉川，1988）、検出例・個体数が増加するのは弥生時代以降である。遺跡から出土したモモの形態分類に関しては、金原（1993）などいくつかの研究例がある。これらの研究例によれば、時代が新しくなるにつれて、小さくて丸いものより、大型で扁平のものが多く検出される傾向があるといわれている。また、江戸時代以前に食べられていたとされる古い形質のモモの核は、小さくて丸みがあるといわれている（堀田，1980）。今回検出されたモモは、現在のものと比べて小型で厚みがあり、球形に近い形をしていることから、古い形質のモモであるといえる。

2．九鬼Ⅱ遺跡出土獣骨と人骨の同定

(1) 試料

平安時代の２号住居跡（試料名：２住骨１～骨５，骨一括)、同住居跡カマド（試料名：２住カマド骨１)、７号住居跡カマド（試料名：７住No.１骨１～骨５，７住No.２骨１・骨２)、13号住居跡（試料名：13住骨１～骨３)、14号住居跡（試料名：14住骨１）から検出された獣骨片と近世の土坑墓（１号墓壙）から検出された人骨（試料名：１号墓壙骨１～骨19，骨，骨一括）である。住居跡から検出された獣骨は食料残渣と考えられている。また、人骨は出土状態から座棺と推測される。

(2) 方法

肉眼あるいはルーペを用いて骨の形態的特徴を観察し、種類・部位などを同定する。

(3) 結果および考察

◎ 平安時代住居跡カマドより出土した獣骨

カマドから出土した獣骨はいずれも細片であり、種名や部位の判るものは極めて少ない。以下に各住居跡毎に概要を記す。

２号住居跡では、ウサギの右踵骨（２住骨１）のほか、おそらく鳥の骨と見られる小片（２住骨３・２住骨５）がみられた。７号住居跡のカマドNo.２ではシカの末節骨（７住No.２骨１）と、同じく中足骨と思われる骨片（７住No.２骨２）のほか、胸骨と見られる細片（７住No.２骨２）がみられた。同住居跡のカマドNo.１では、肋骨片とみられる細片がいくつかみられたのみである。13号住居跡では、細かい鹿角（13住骨３）がみられた。これは若い個体の角の枝先部分とみられ、極めて細い。加工品の可能性もあるが、先端部が欠損しており、確証はない。14号住居跡は細片のみであった。

表２　住居跡出土獣骨同定結果

試料採取遺構名	試　料　名	同　定　結　果
２号住居跡	２住骨１	ウサギ・右側踵骨，不明骨片細片.
	２住骨２	不明骨片細片.
	２住骨３	鳥・小片，不明骨片細片.
	２住骨４	不明骨片細片.
	２住骨５	鳥・小片，不明骨片細片.
	骨一括	不明骨片細片.
２号住居跡カマド	２住カマドNo.１骨１	不明骨片細片.
７号住居跡カマドNo.１	７住カマドNo.１骨１	不明骨片細片.
	７住カマドNo.１骨２	不明骨片細片.
	７住カマドNo.１骨３	不明骨片細片.
	７住カマドNo.１骨４	不明骨片細片.
	７住カマドNo.１骨５	不明骨片細片.
７号住居跡カマドNo.２	７住カマドNo.２骨１	シカ・末節骨，不明骨片細片.
	７住カマドNo.２骨２	シカ・中足骨片，胸骨？細片，不明骨片細片.
13号住居跡	13住骨１	不明骨片細片.
	13住骨２	不明骨片細片.
	13住骨３	鹿角，不明骨片細片.
14号住居跡	14住骨１	不明骨片細片.

以上、本遺跡の平安時代住居跡カマドより出土した獣骨はいずれも細片で、確認された部位も断片的である。これらが食物残渣であるとすれば、当時、ウサギ・鳥類・シカが食用とされたと考えられる。なお鹿角に関する評価は類例を待ちたい。

◎　近世土坑墓（１号墓壙）より出土した人骨

人骨は土坑墓のほぼ中央におかれていた。発掘調査時の所見にあるように、土坑は既に底部を残すかなりの深さまで削平されていた。遺体は上半身を完全に失った状態であり、骨盤から下位をかろうじて残していた。骨盤は仙骨をほぼ残していたが、寛骨は腸骨部分が大破して、大座骨切痕から座骨は破損しながらも一部原形を止めていた。下肢は大腿骨、脛骨、腓骨、足根骨の一部が残されていた。右側の大腿骨と脛骨、腓骨は逆L型にあり、左の大腿骨と脛骨、腓骨はやや強く曲げて、両足を組むような形であった。距骨、踵骨その他の足根骨は認められたが、ごく一部であり、中足骨、指骨も一部が残されたのみである。

埋葬遺体は男性であり、年令については頭蓋縫合、歯牙の咬耗などからの推定はできないが、遺骸の状況から成人であることは間違いない。

表３　１号墓壙出土人骨同定結果

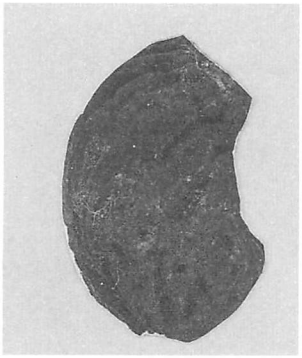
試料名	部　位　な　ど	備　　考
骨１	右側寛骨，左側寛骨，仙骨.	接合不可能な寛骨片・仙骨片数片.
骨２	左側大腿骨.	骨11と接合関係．不明骨片細片.
骨３	右側大腿骨.	大腿骨片数片.
骨４	肋骨片.	
骨５	右側尺骨.	尺骨の細片.
骨６	左側脛骨.	脛骨片数片（接合不可能）
骨７	左側腓骨，中手／中足骨片.	
骨８	右側脛骨.	脛骨片数片（接合不可能）
骨９	右側腓骨.	
骨10	左撓骨近位部.	
骨11	左側大腿骨.	骨７と接合関係．大腿骨細片数片.
骨12	右膝蓋骨.	破片.
骨13	踵骨.	
骨14	左立方骨.	
骨15	左第３楔状骨.	
骨16	右第３中足骨近位部.	
骨17	距骨.	骨片細片数片.
骨18	右第２中足骨近位部.	
骨19	左第３中手骨近位部.	
骨		指骨片，腓骨片，膝蓋骨片.
骨一括		不明骨片.

〈引用文献〉

堀田　満（1980）モモ・ビワ。「植物の生活誌」、p.136－142。平凡社。

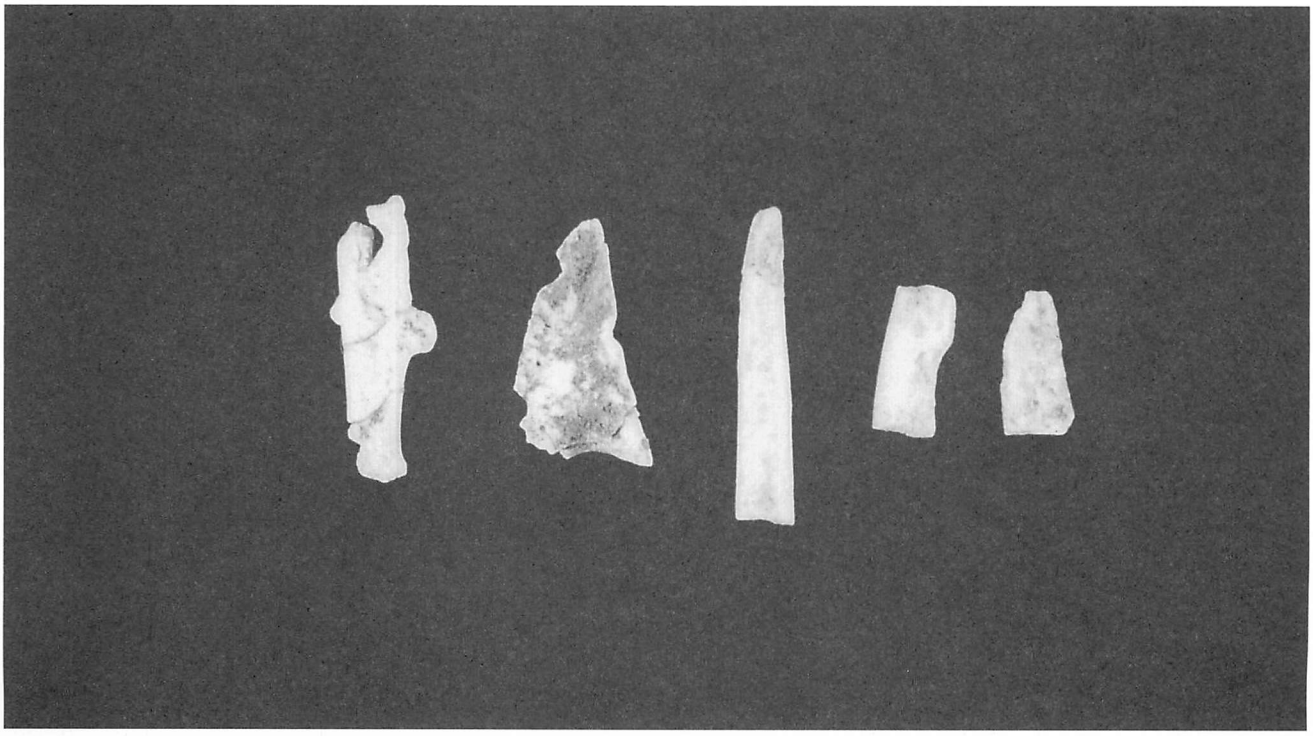
金原正明・粉川昭平・太田三喜（1992）モモ核を中心とする古代有用植物の変遷。
日本文化財科学会第９回大会研究発表要旨集、P.76－77。

粉川昭平（1988）穀物以外の植物食。「弥生文化の研究２　生業」、金関　恕・佐原　眞編、P.112－115、雄山閣。



モモ　核（内果皮）

墓壙（人骨）

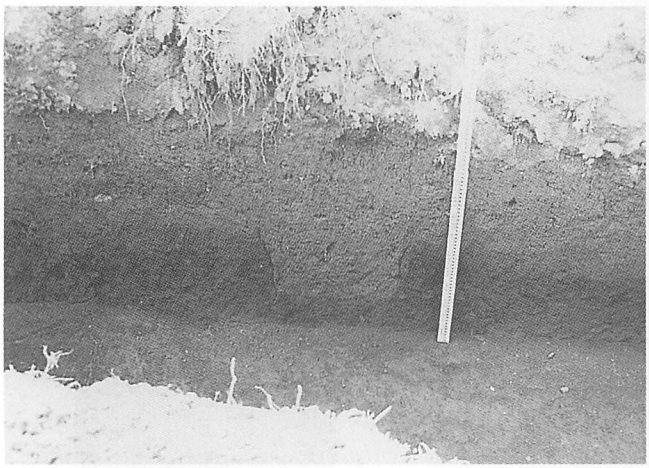


（獣　骨）

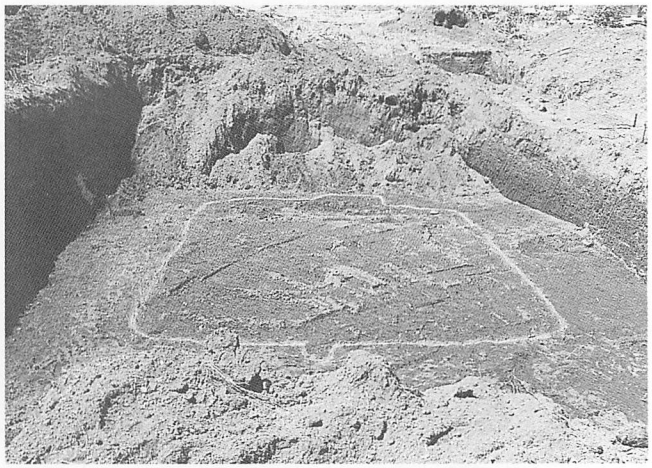
図　版

図版1

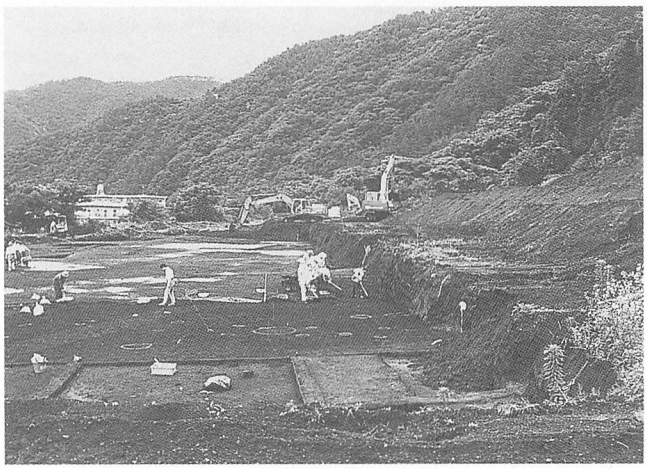
遺跡近景



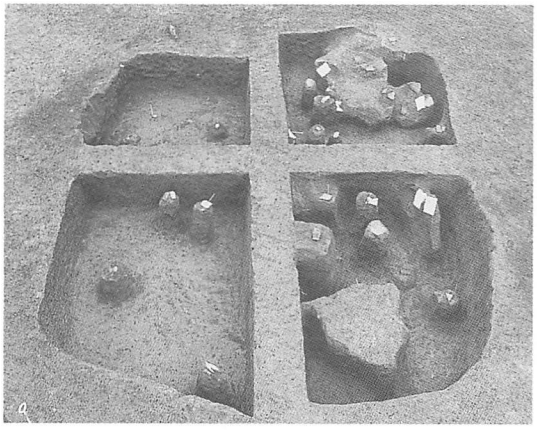
試掘調査時プラン確認状況



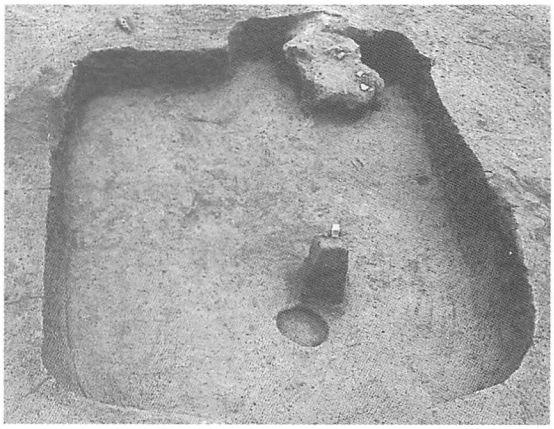
試掘調査時プラン確認状況



調査風景

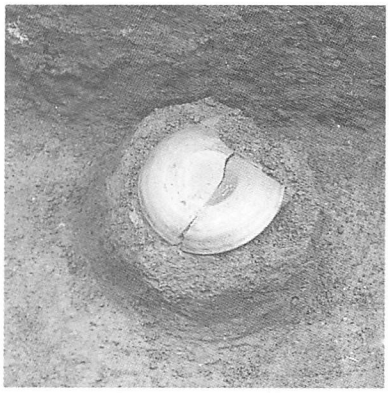


第１号住居跡遺物出土状況

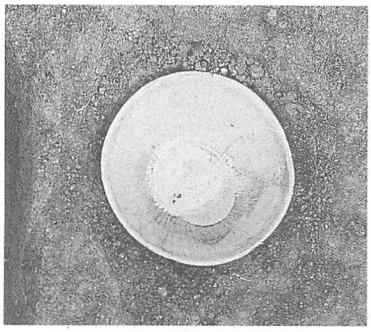


第１号住居跡完掘状況

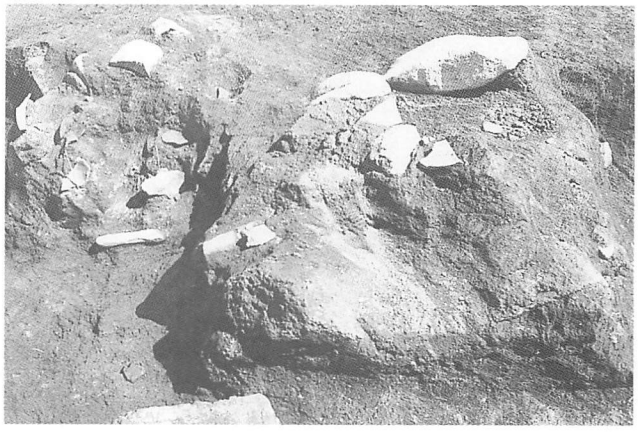
第２・15号住居跡完掘状況



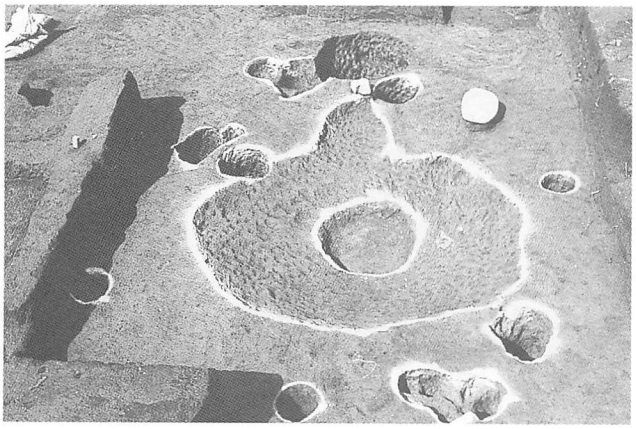
第２号住居跡遺物出土状況



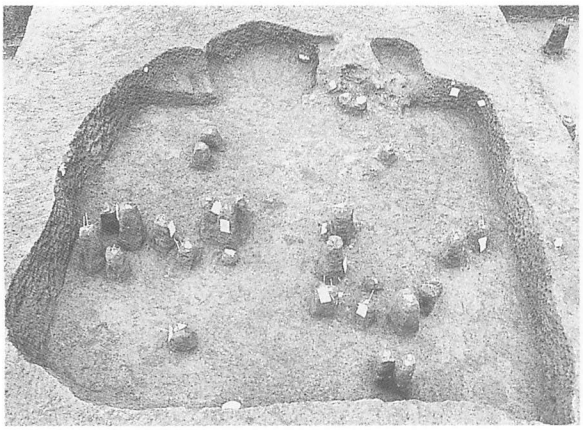
第３号住居跡遺物出土状況



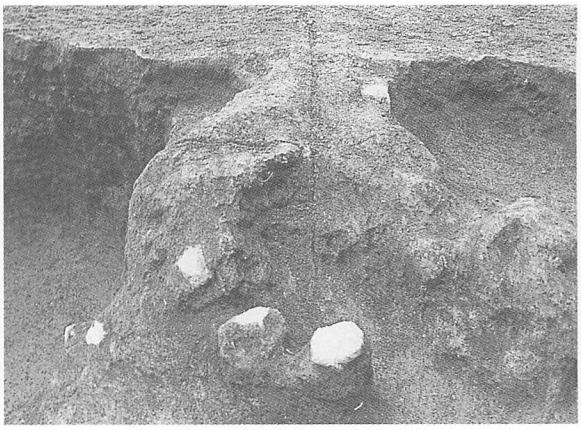
第３号住居跡カマド



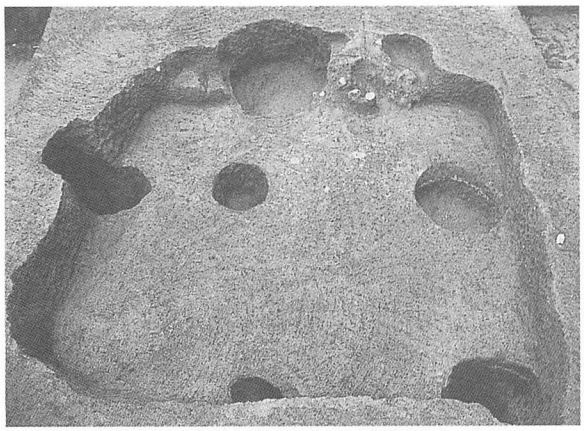
第４号住居跡完掘状況



第５号住居跡遺物出土状況



第５号住居跡カマド検出状況

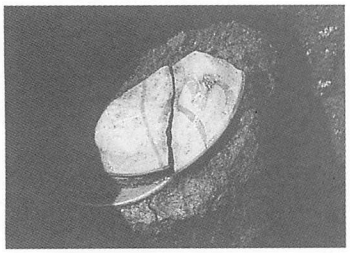


第５号住居跡及び第５号掘立柱建物跡完掘状況

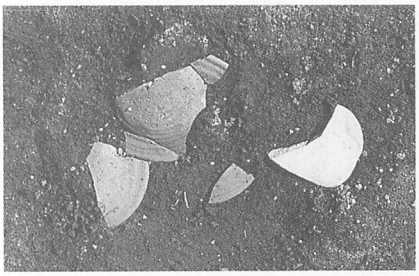
第７号住居跡調査風景

第７号住居跡遺物出土状況

第７号住居跡完掘状況



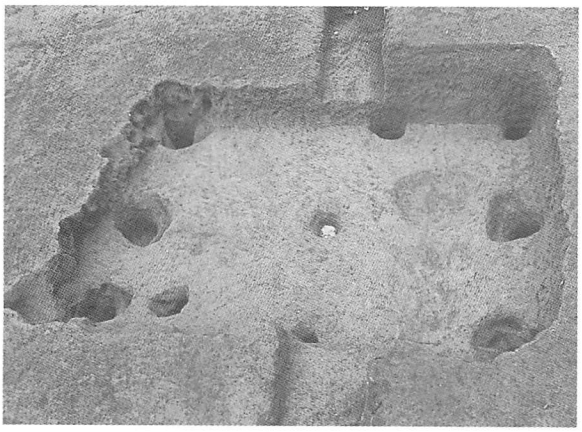
第７号住居跡墨書土器出土状況



同　左

第７号住居跡「鎌」出土状況

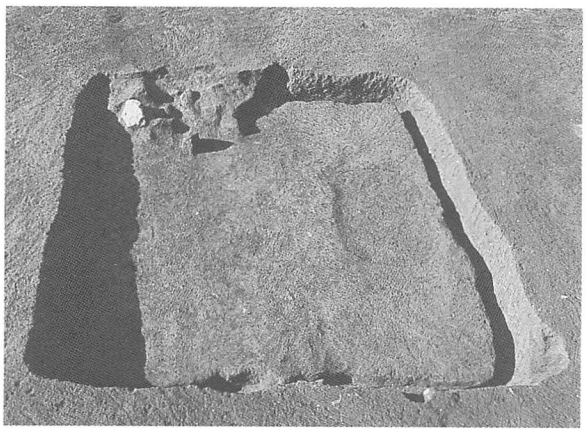
第 8 号住居跡「長頸壷」出土状況



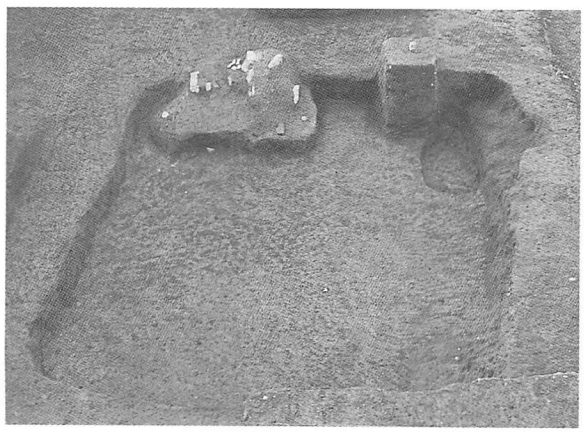
第 9 号住居跡完掘状況

第10号住居跡完掘状況

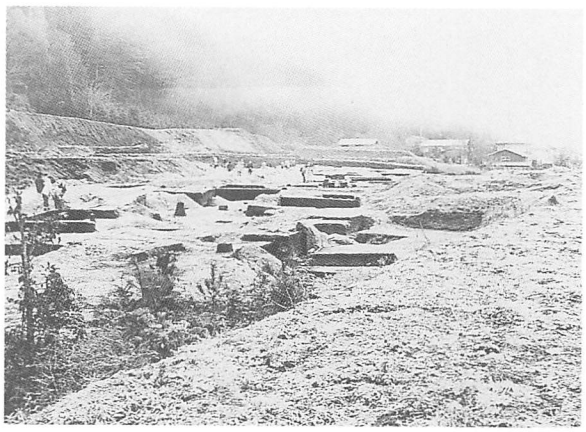
第12号住居跡調査風景



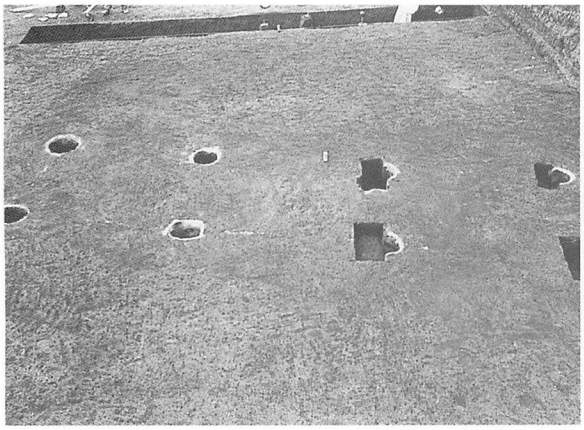
第12号住居跡完掘状況



第14号住居跡完掘状況



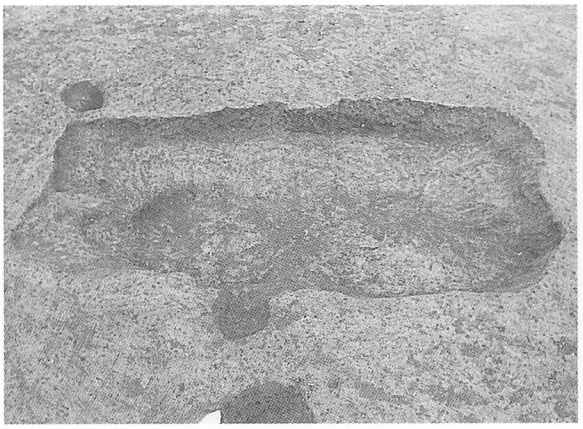
九鬼Ⅱ遺跡雪景色



第 1 号掘立柱建物跡

第 2 号掘立柱建物跡（柵列）

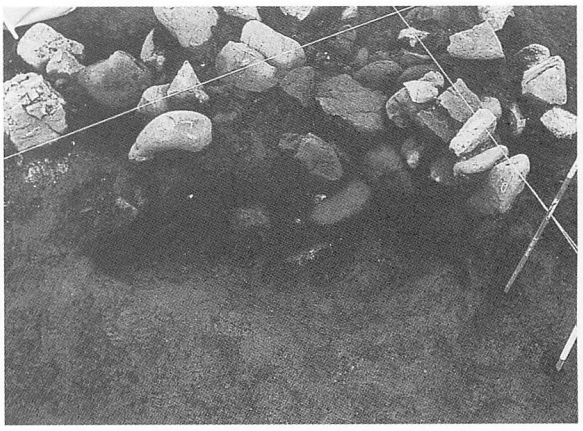
第 3 号掘立柱建物跡



第 1 号竪穴状遺構

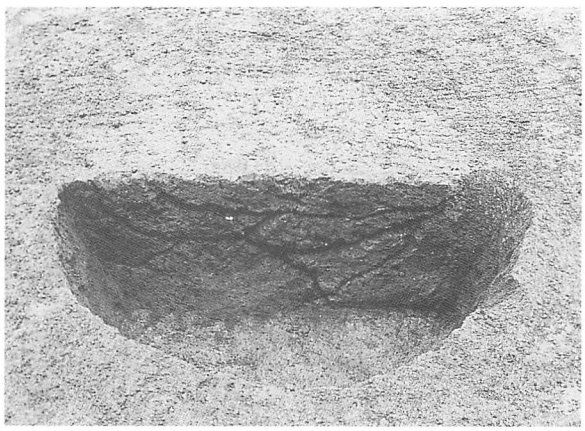
第 1 号集石土坑検出状況

第 3 号集石土坑

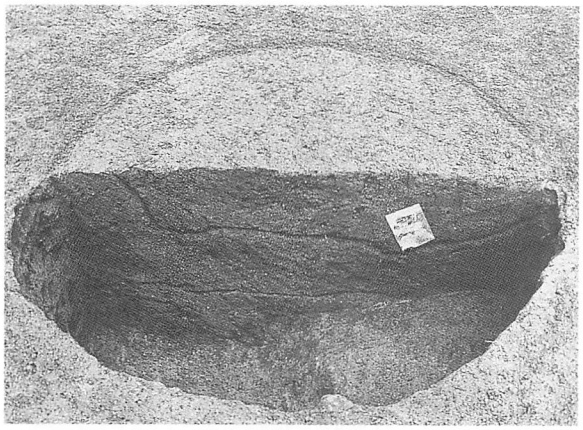


第 3 号集石土坑断面

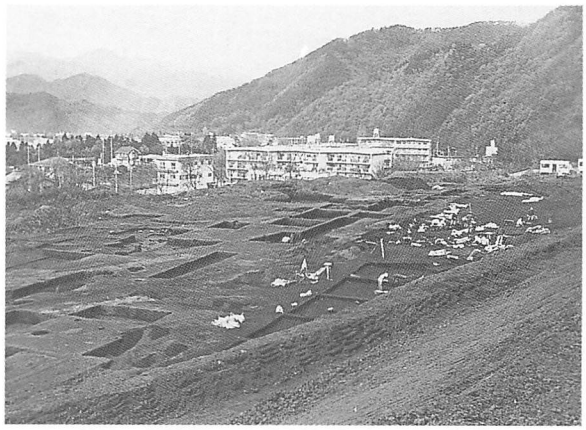
調査区近影



第１号土坑半截状況



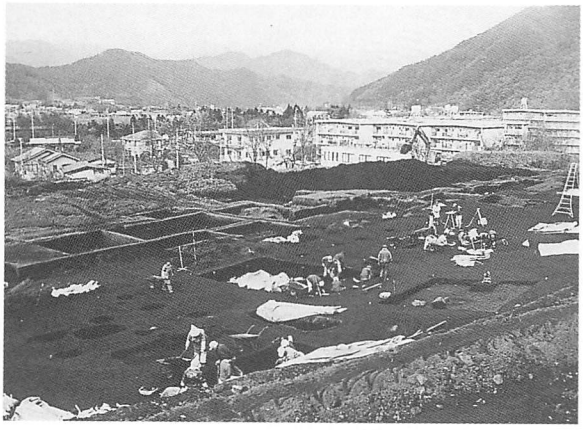
第13号土坑半截状況



調査風影

第62号土坑遺物出土状況

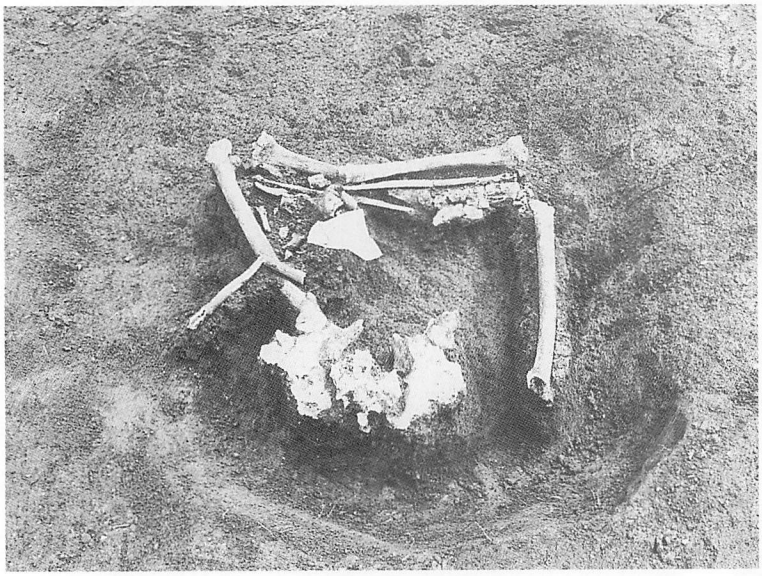
第49号土坑「陥し穴」



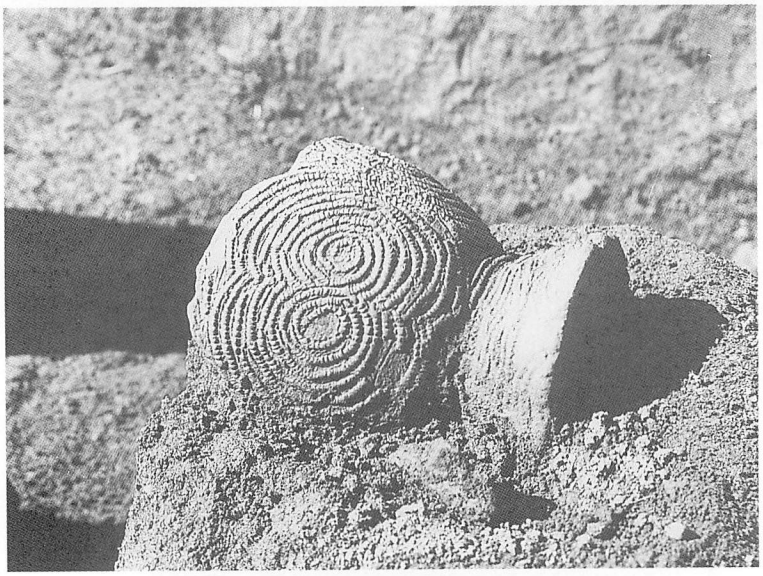
調査風影

調査区近影

第１号溝状遺構



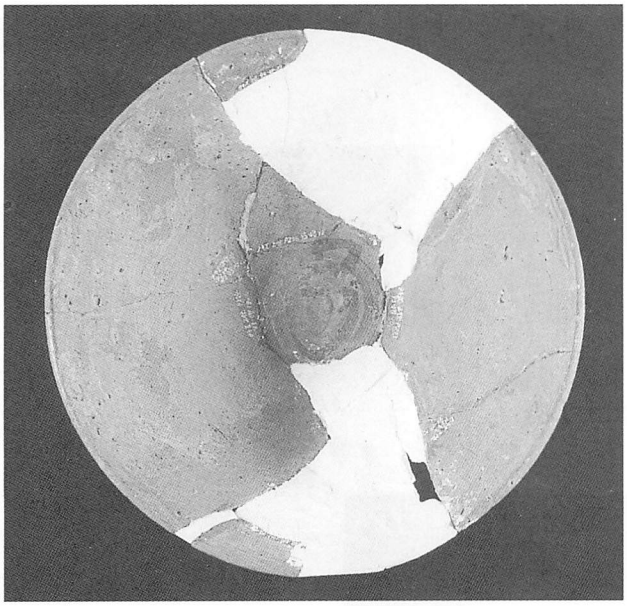
第１号墓壙人骨出土状況



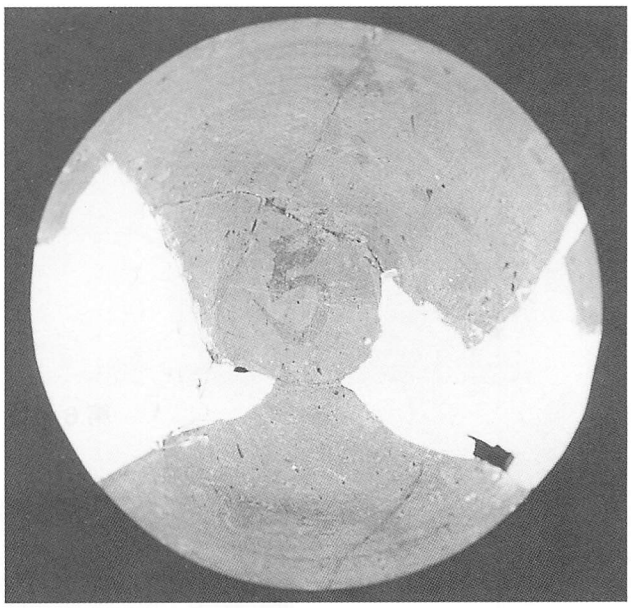
遺物出土状況

第１号住居跡カマド出土「鉢」

第２号住居跡出土「甕」

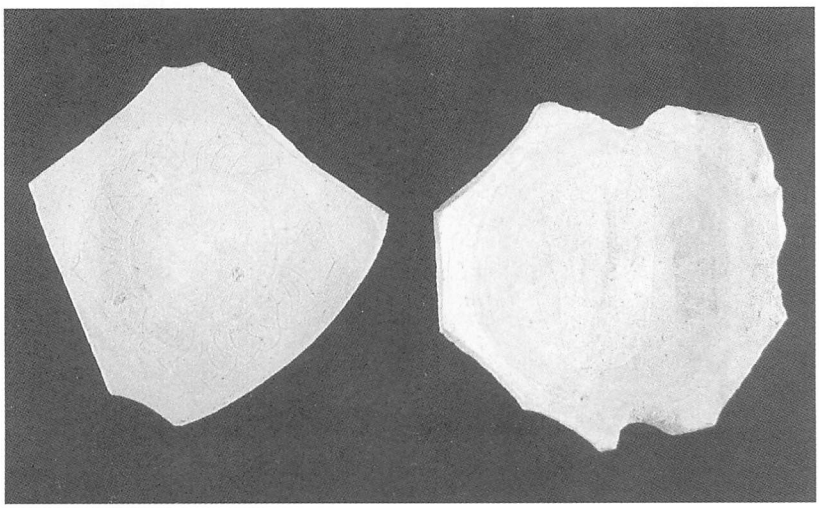


みこみ部

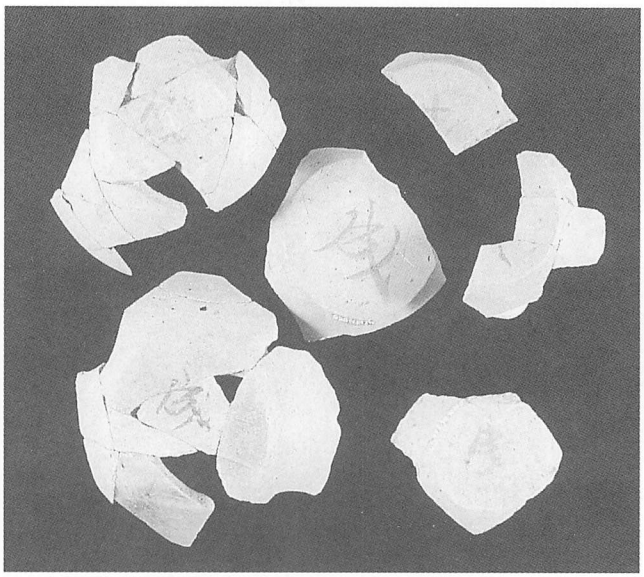


底部外面

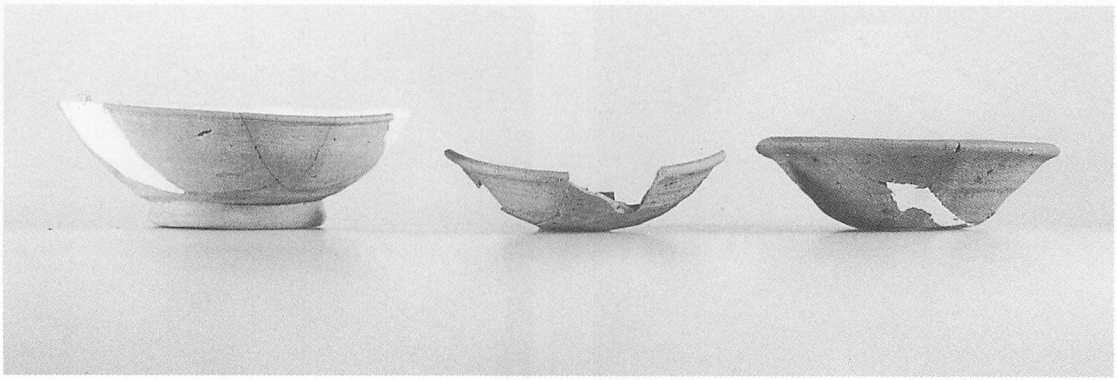
第２号住居跡出土坏



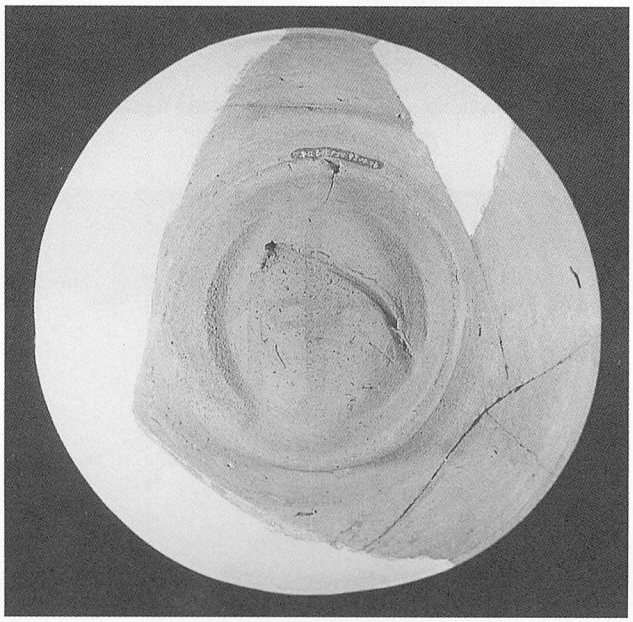
第３号住居跡出土　左「緑釉陶器」右「灰釉陶器」



第 5 号住居跡出土墨書土器

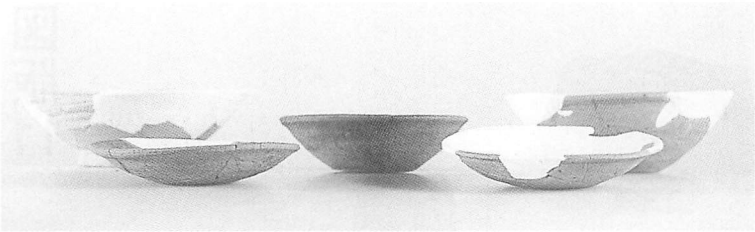


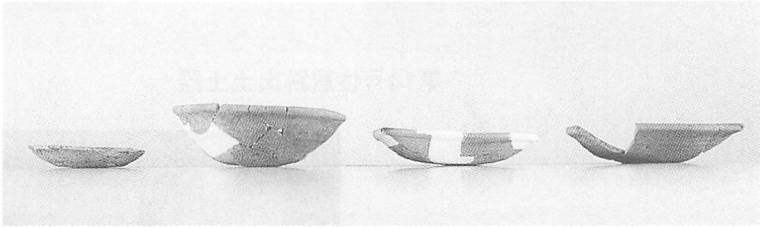
第 6 号住居跡出土土器

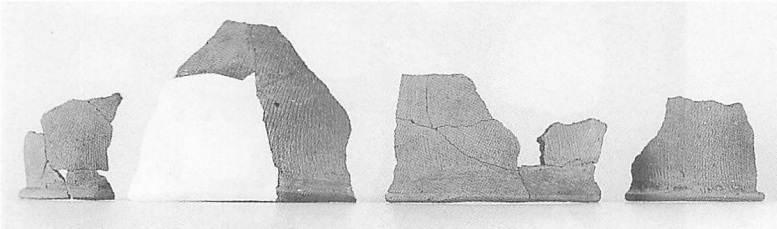


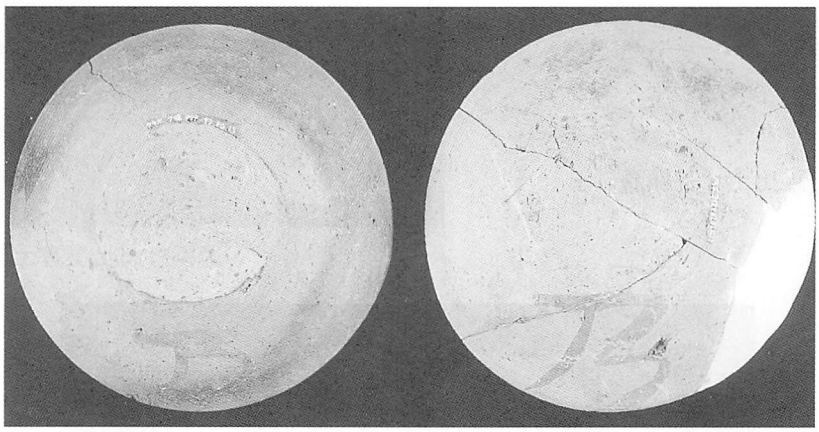
第 6 号住居跡出土墨書土器

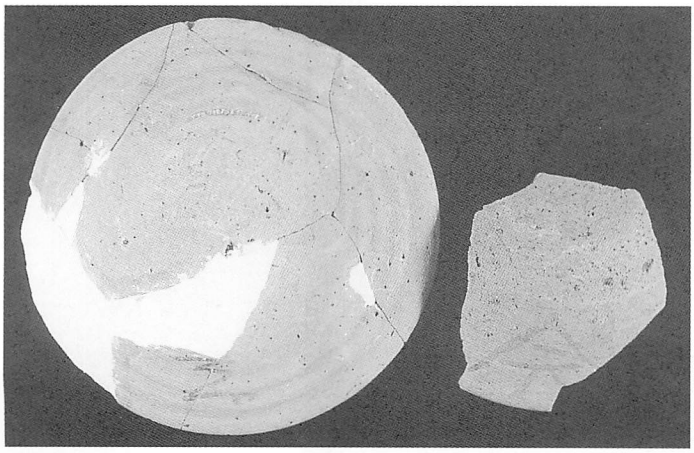
図版10　第7号住居跡出土遺物

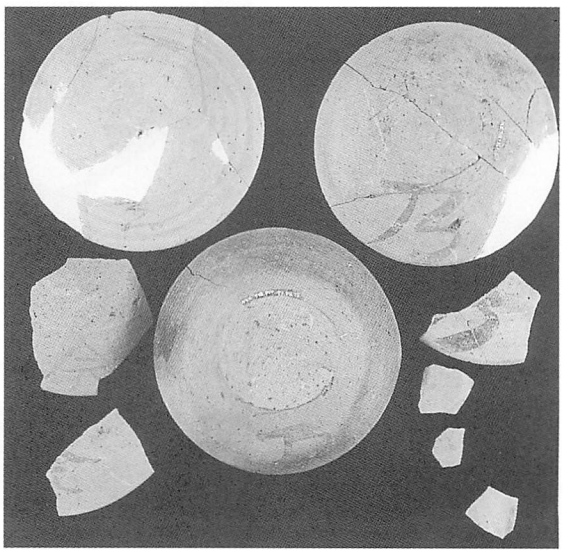


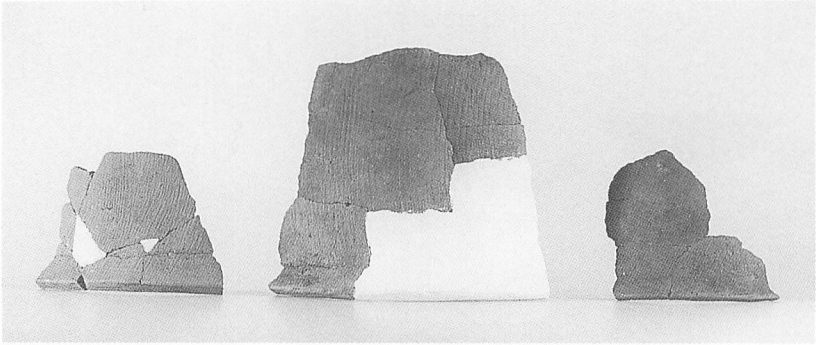






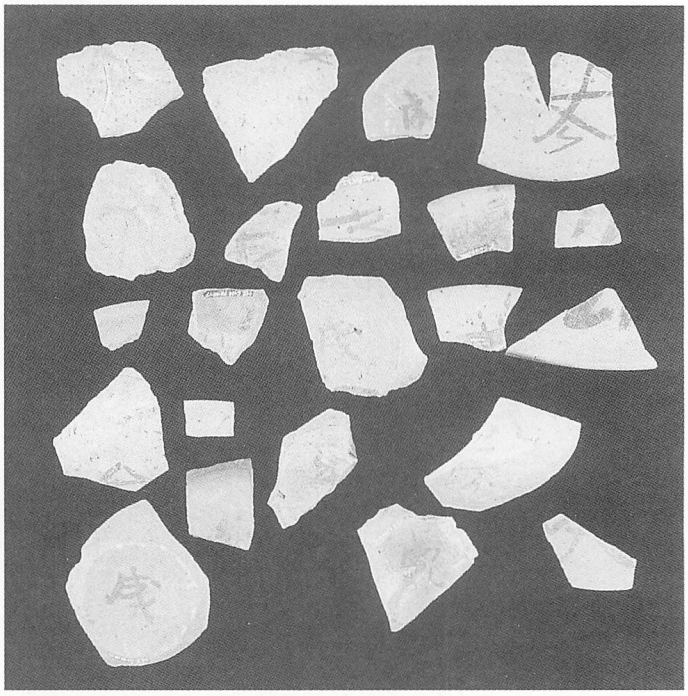




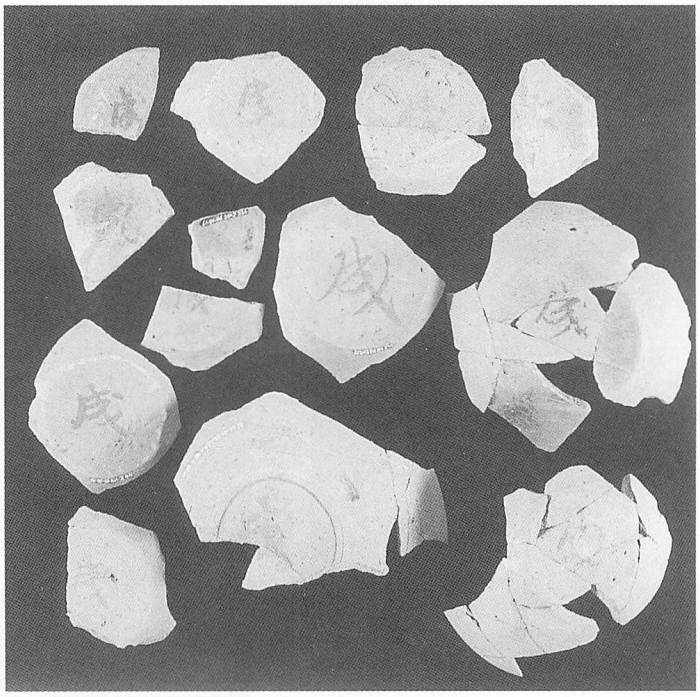


第14号住居跡出土土器

第 8 号住居跡出土「長顯壷」

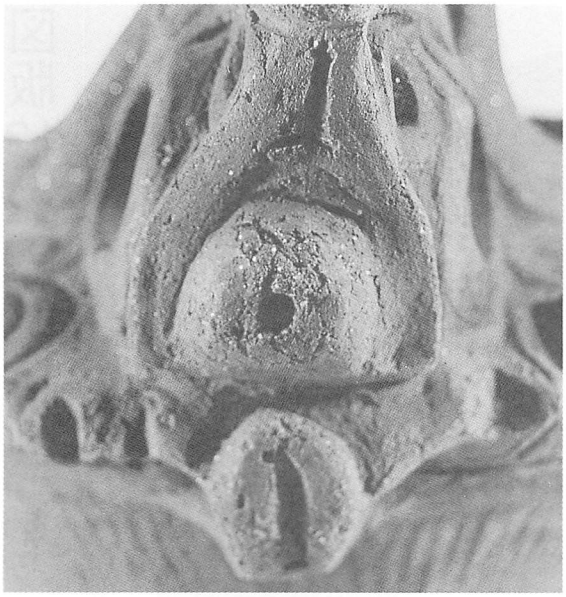


遺構外出土墨書土器

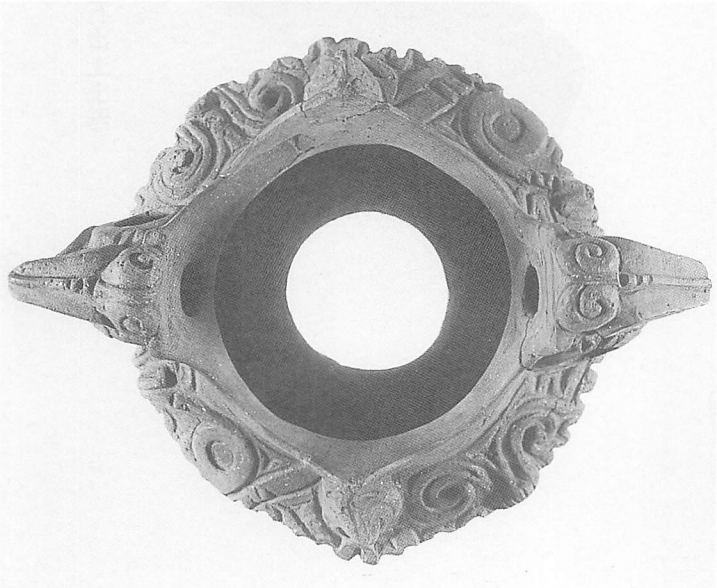


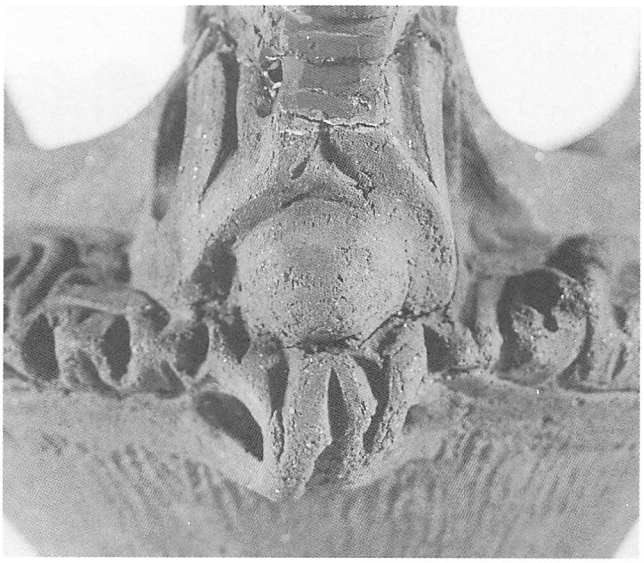
「成」墨書土器一括

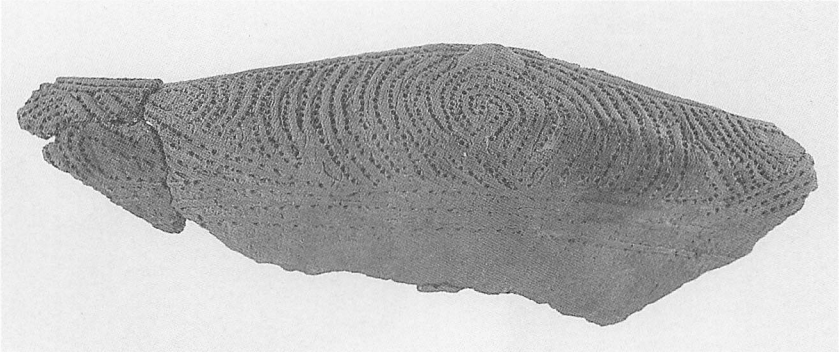
図版12　第62号土坑出土土器



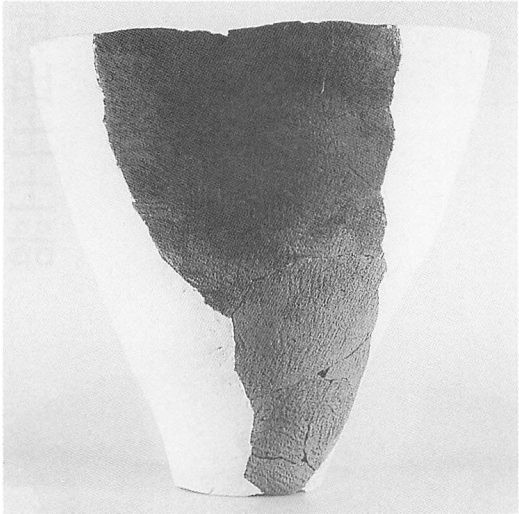
人面装飾部拡大



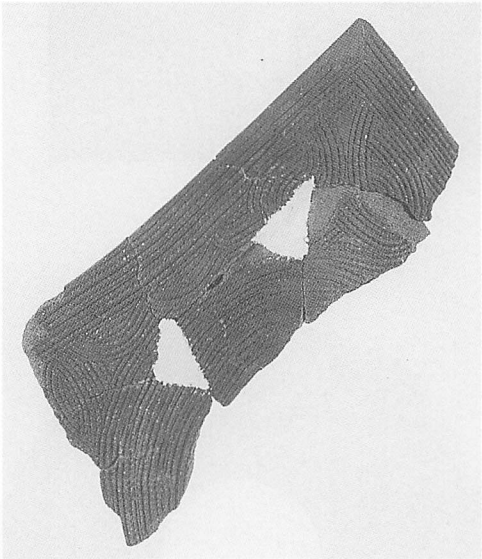




第20号土坑出土土器



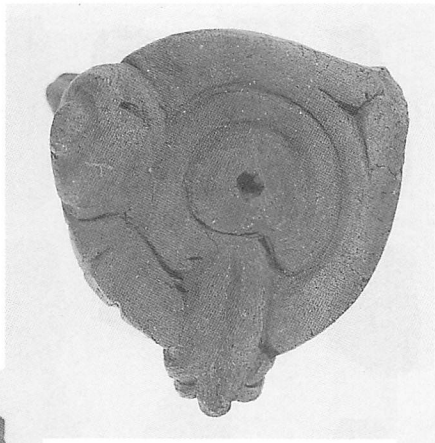
第4号集石出土土器

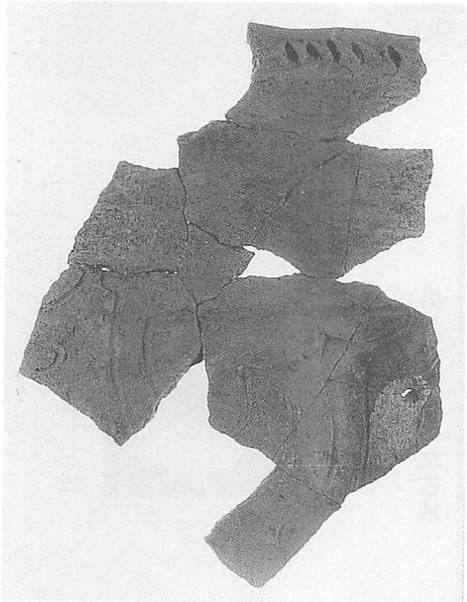


第3号集石出土土器

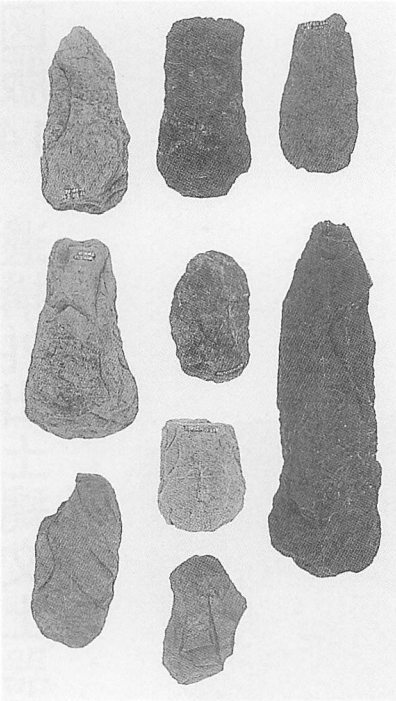
遺構外出土土器

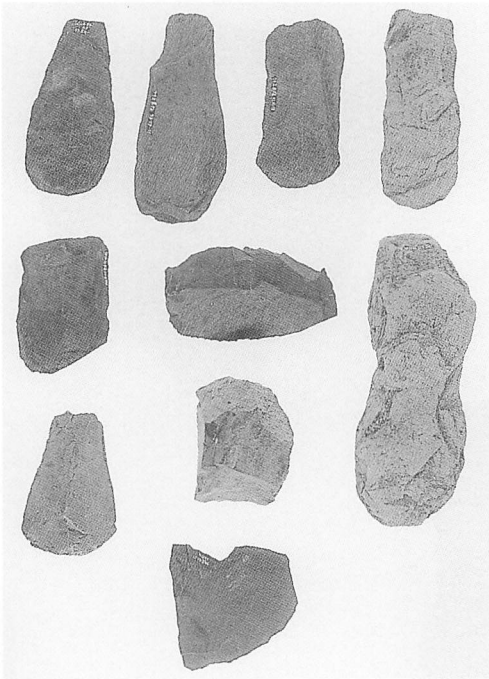
図版14　遺構外出土縄文土器

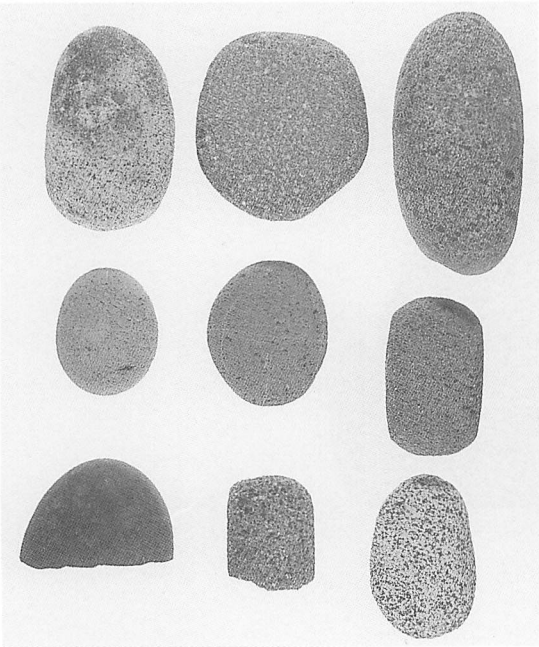


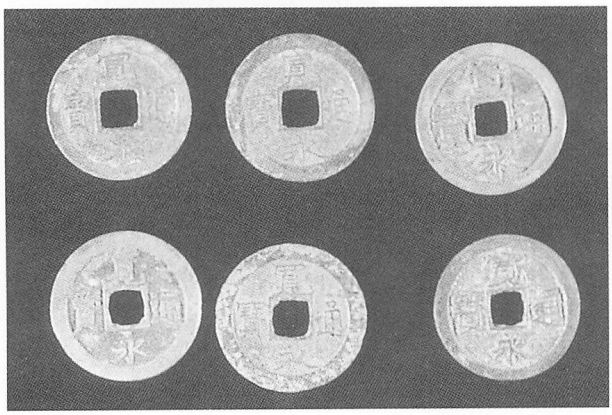


図版15　打製石斧・すり石・古銭

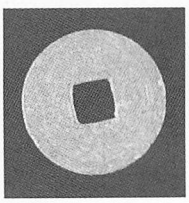








第1号墓壙出土古銭



遺構外出土古銭

報告書抄録

フリガナ		クキニイセキ	
書名		九鬼Ⅱ遺跡	
副題		山梨リニア実験線建設事業に伴う発掘調査報告書	
シリーズ		山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第118集	
編著者名		高野玄明・橘田重男	
発行者		山梨県教育委員会　日本鉄道建設公団	
編集機関		山梨県埋蔵文化財センター	
住所・電話		〒400-15　山梨県東八代郡中道町下曽根923　TEL 0552－66－3881・66－3016	
印刷所		㈱ヨネヤ印刷	
印刷・発行日		1996年3月22日・1996年3月29日	
遺跡所在地		山梨県都留市井倉字九鬼172－1・173外	
1/25000地図名・位置		都留　東経138°56′27″	都留　北緯35°34′35″ 標高416m
概要	主な時代	縄文時代前期・中期・後期、平安時代・近世	
	主な遺構	縄文時代の住居跡1軒・集石土坑4基・土坑62基、平安時代及びそれ以降の住居跡14軒・竪穴状遺構1棟・掘立柱建物跡・柵列8棟・溝状遺構、近世の墓壙	
	特殊遺構		
	特殊遺物	縄文中期人面装飾土器、平安時代の土錘・緑釉陶器	
	調査期間	1993年5月17日～12月24日	

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第118集

九　鬼　Ⅱ　遺　跡

印 刷 日　1996年3月25日
発 行 日　1996年3月29日
編　　集　山梨県埋蔵文化財センター
発　　行　山梨県教育委員会
　　日本鉄道建設公団
印　　刷　株式会社　ヨ　ネ　ヤ